

川柳塔

平成十五年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九一三號



日川協加盟

No. 913

六月号

予 告

第九回 川柳塔まつり

とき 10月5日(日)
ところ アウィーナ大阪

◎詳細は後日お知らせいたします。恒例によって
同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催
しますのでふるってご参加下さい。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁六、〇〇〇円 ③3/4頁二二、〇〇〇円

②半頁九、〇〇〇円 ④一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川 柳 塔 社

第27回 全日本川柳2003年香川大会

日時 六月十五日(日) 午前十時開場
会場 マツノイ・パレス(クリスタルホール)

〒761-1705 香川県香川郡香川町川東下

宿 題

第一部 締切りました

第二部 (当日投句、11時20分締切)

「公園」

吉岡 茂 緒選

「休む」

佐藤 美文選

「宝」

福岡 竜雄選

各題2句 当日配布の句箋に記入

第二次選者

吉岡 龍城・今川 乱魚・磯野いさむ

竹本瓢太郎・大木 俊秀

4、000円(昼食・記念品含む)

表 会 費

文部科学大臣奨励賞 1名

参議院議長賞 1名

川柳大賞 1名

大会賞 11名

ジュニア部門三賞の予定

問い合わせ先

〒761-8078 高松市仏生山町甲二五二四一

村尾孝峰 方

日川協香川大会事務局宛

TEL・FAX 087-889-3385

全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳香川大会実行委員長 吹田朝児

TEL・FAX 087-898-1177

堺港の変遷

河内 天笑

遣隋使の派遣（六〇七）そして遣唐使の派遣（六三〇〜八九四）と、七世紀から九世紀にかけて中国文化の模倣期に入り、大和の飛鳥文化や奈良の天平文化を支える多くの文化人や技術者が、堺の港を経由していったのです。遣唐使が廃止（八九四）され、都が京都に移ってからそれはそれまでの賑わいは下火になったものの、南北朝時代から室町時代には軍港や貿易港として活況をとり戻し、数多くの豪商を育て自由都市堺へと発展する原動力となったのは、言うまでもなく堺港あつての事なのです。

鎌倉時代には魚座という漁業組合をつくって、地方からもたくさん堺の港へ魚船が集まりました。堺商人は奈良や京都へ魚を広く販売し、莫大な利益をあげたのです。記録によれば堺だけでも元

禄八年（一二九五）には魚船を五九一隻も保有していました。

大阪の住吉神社は海的神様、漁業の神様として祀られ、今も住吉神社の前に堺の魚商人が建てた大きな灯籠があります。毎年八月一日の住吉神社のお祭りの日に、堺の浜で魚を売る市が賑やかに開かれるようになりました。大量の魚を捌くため前夜から夜とおし市を開いたもので、この頃から堺の大魚夜市が始まったものと考えられています。

現在、大阪市と堺市の境界となつている大和川は、むかし奈良を大和といったため大和川と名付けられました。この川は金剛山と生駒山から西へ流れ柏原市から北へいくつにも分かれて、大阪城の北がわで淀川に入り大阪湾に入つていたのです。東大阪市は今でも土地の低い所ですが、この辺りを流れていた大和川は、増水するたびに洪水となり、大きな被害が出ていました。特に承応元年（一六五二）の大洪水の頃から大和川のつけかえ運動が熱を増し、延宝四年（一六七六）

の大洪水の被害をつぶさに知った幕府は、元禄十六年（一七〇三）つけかえを決め工事を始めました。柏原から北へ流れていた川を西へ切りかえたことで、東大阪一带は洪水がなくなるばかりでなく、たくさんの新田が生まれました。しかし、いいことばかりではありません。大和川の運ぶ土砂が僅か一五〇年で堺港を土砂で埋めつくし、港は見る影もなくなつたのです。

砂で埋まつた大和川の河口にもどろん新田が出来ました。浅くなつた海岸を利用して戦後は埋立てをし臨海工業地をつくるとともに、大きな船の出入り出来る堺泉北港と名前も変わりました。

大浜海岸が埋め立てられる直前（昭和三十五年）あたりの大魚夜市は未だ私のまなうらにはつきり残っています。五〇メートル沖合までは遠浅なので、魚を積んだ大型船は沖合に停泊、トロ箱を積んだてんま船が砂浜に運び、七月三十一日の夕刻の花火から競り市が賑やかに行われたものでした。

座右の句

身の上ばなし程よく電車空いている

(智子)

私の句

出直しの峠で軽い靴を履く

有沢せつ子

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原王青

■巻頭言

カタカナ語の氾濫

川柳塔(同人吟)

自選集

水煙抄

麻生路郎物語(18)

愛染帖

誹風柳多留二四篇研究 55

茴香の花

「自然」

一路集「サイズ」

「けが」

河内天笑……(1)

波多野五楽庵……(2)

河内天笑選……(4)

奥田みつ子選……(55)

東野大八……(78)

波多野五楽庵選……(81)

政岡日枝子選……(86)

川端柳子選……(88)

北村賢子選……(88)

徳岡本丸選……(89)

カタカナ語の氾濫

波多野 五楽庵



ある日の朝刊の準社説的な一隅を覗いたらカタカナ言葉と題して、聞き慣れない言葉を目にするたびに「これをどう言い換えれば読者に分ってもらえるだろうか」と悩む」から始まる一文があった。

日本語の楽しさと美しさを看板にする川柳がカタカナ語に汚染されていやしくないか、と恐る恐る『川柳塔』のある号を開いてみた。読んでびっくり、あるわあるわ、数え切れないカタカナ語の羅列である。医師としての常識範囲内で知っているつもりがすっかり狂ってしまった。カタカナ語辞典と和英・英和辞典を前に取り組んでみた。勿論すでに日本語化しているカタカナ語が大半である。とはいえ、さりながら優美で繊細幽玄な短詩文学がこんなに変化してしまうとは。万葉集を編集された大伴家持(おとおものやかもち)もびっくりされているだろう。

どうしても解らなかったのは、サンフレ・ストレイシープ・フレディー・ジョークバック、

初歩教室「チャンス」……………三宅保州…(90)

秀句鑑賞 同人吟……………芳地狸村…(92)

水煙抄……………小澤幸泉…(94)

■エッセー ある川柳愛好家の死と手記……………黒川紫香…(95)

■同人特集 雨 百句……………(96)

■句集鑑賞『平成十五年』を拝読して……………小島蘭幸…(99)

五月本社句会……………(102)

■エッセー スペインのこころホタ……………早川棲世…(106)

各地柳壇 (佳句地十選/時広一路)……………(107)

柳界展望……………(123)

六月各地句会案内……………(124)

■編集後記……………楓葉・朱夏…(126)

座右の句

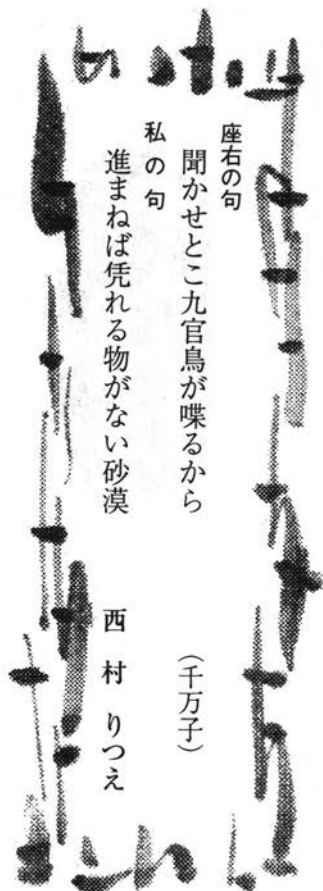
聞かせとこ九官鳥が喋るから

私の句

進まねば凭れる物がない砂漠

(千万子)

西村 りつえ



考えたらジョークバックはジョークの次に句読点が必要で、英語にもこんな単語はない。

人名や地名、商品が仕方がないとして、もしかしてカタカナ語辞典でも開いて似合う言葉を探し、これが近代的句風だ、と思つていたのなら言葉遊びの何者でもない。しかし、普段会話の中にエンドレスやデフォルメなどが使用されているとしたら、なんて頭の良い人ばかりなんだろう、と素直にごめんないであるが。川柳作家として侘び・寂びを捨ててしまったら何が残るのだろうか。

特に私みたいなロマンチズムを主とする作家には到底耐えられないものがある。しかし絶対に使つていけないという制約はない。使用するなら相手の国語をしっかりと勉強して欲しい。パンフレットをパンフで終つた例もある。いくら省略の文学とはいえ無理です。

大体、長いカタカナ語を使った場合の大部分は報告川柳になっているのが多い。

薫風名譽主幹の

亡母の闇この世は雨が降っています

秋風に傷なきものはなかりけり

この一句一句が一編の物語りになる句の深さが、カタカナ語では表現不可能なのです。

新しい言葉を探すのも良いが、万葉集の静けさの中に川柳を含めた短文学の原点がある事を忘れないで欲しい。



河内天笑選

出雲市 園山 多賀子

火も風も口説いた指輪外せない

花占い凝った女でまだ卒寿

人間を続けたいから水を飲む

春朧 女の業は未解決

許し合う水平線にある妥協

情けには弱いさくらは潔よい

竹原市 小島 蘭 幸

新郎新婦が笑う おとうさんが笑う

バージンロード父の威厳が消えていた

聖書読む牧師は日本語が上手い

乾杯の音頭は僕で いい日旅立ち

ばっちゃんも踊る素敵な披露宴

披露宴食べてる場合ではないぞ

米子市 政岡 日枝子

椿一首サクラに染まらない紅よ

桜古木両手ひろげたバランスよ

季は進みちらし寿司から桜餅

直感を信じその一步にのせる

開きなおって心を透かす刻をもつ

腹をくくれば喧騒さえもリズムカル

松原市 小池 しげお

嘘ばかり言うてお見舞から帰り

令夫人貴女は偉くないのです

交番に巡査の居てたことがない

一円を大事にしてる貯金箱

車から降りんと拝めないお寺

兄嫁のずるい所を知っている

吹田市 山本 希久子

弱者には傘小さ過ぎ雨期に入る

手を焼くだろうロボットに拘ねられて

九十五歳母は毎日鏡見る

キャッシュカード少うし罪の匂いする

逢うて春別れて闇になる刻よ

せまい日本西と東のうどんだし

宝塚市 嵯峨根 保子

信号の長さを待てるやさしい日
銀行の名に系図など添えて欲し
居酒屋のひれ酒アハハ恋ならず
ゲートボールのどこだけ雑草が引いてある
母の忌を弘川寺の花のいろ
フセインは髭そりの刑かいくぐる

堺市 志田 千代

オサツではまだ手を切ったことがない
父のオキテ活字ある紙踏むべからず
ハンカチにハナカミという母であり
後さきになるばあちゃんの長話
女だからホイホイついていくでない
二十(はたち)までこわい仲間に入っていた

堺市 村上 玄也

もう一度花見の出来る北の旅
父ちゃんは葉嫌いで卯酒
忍耐の限界越えたらしい語気
神の名の下に戦に駆り立てる
戦争で多忙な軍事評論家
決着はいつも玉虫色のまま

大阪市 前 たもつ

移り住む街の選挙はやかましい
イチローも松井もガムは噛んでない
勝てば官軍ブッシュも例にもれず

五欲とや ばくに食欲まだ上位
ありがたいことに持病が指図する
古稀すぎて写真もやっとな僕顔

鳥取市 福永 ひかり

気の病なかなか元に戻らない
予定表からだに無理をさせている
株下落企業努力も水の泡
生活のレベルを下げるのに努力
頑張ればいつか助けてくれる運
人間が確かに死んでいる戦

唐津市 市丸 晴翠

喝采のないキッチンで磨く鍋
義理を欠くことにも馴れて老いの坂
全自動干してはくれぬ洗濯機
洗濯機私の鬱も投げ入れる
養殖の鯛より鯛高級魚
来たときは独り帰りは手を繋ぐ

八尾市 生嶋 ますみ

もう八起き出来なくなった皮下脂肪
上品な奥様パチンコへ通う
歩けるといふ幸せに今気付く
さまざま人間模様レジの列
紙オムツになつても主人宝物
ママチャリで足りる行動範囲です

宇部市 平田実男

東かがわ市 原賢

腹八分口は七分のほうがいい
だんだんとヨイシヨコラシヨの数が増え
冷や飯の味を知ってる人間味
戯れにした指切りで共白髪
選挙戦違反してないのが落ちる

唐津市 樋口輝夫

栄転も左遷も同じ花見莫塵
ライバルに手を振っている選挙カー
乱立の候補だれでも良さそうだ
飲み忘れと言えば薬のことですよ
無農薬と言うて虫食い高値付け

東かがわ市 清川玲子

あの女あんないとこ見習おう
向い風と握手してからやる気出す
握りめし一つ貰った恩がある
春一番ピンクの下着ちぎれそう
目の前にある幸せに気づかない

東かがわ市 伊勢八重子

命水たどれば深い森に着き
木洩れ日に一息もらう花疲れ
躓いた心へ母の声がする
見返りを期待するから愚痴になる
優しさが全てを丸く取り仕切る

口下手がメールで送る熱い文
吾が城の城主はやっぱり妻だった
戦争は止めろと軍人墓地が声
さあ春だ春だと騒ぎだす手毬
生きているから進行形の話する

東かがわ市 池内かおり

老人力凄いと妻がネジを捲く
たまちゃんの意見も聞いてみたい川
仁和寺のしだれ桜とはなしする
犯人は町内でしたチカンです
おばちゃんを口で転がすみのもんだ

東かがわ市 川崎ひかり

そして今森が団地になってゆく
牙抜けた時から尻尾はえてきた
ひび割れた心にしみる春の雨
女には油断をしないのも女
究極の愛を辿れば母に着く

松山市 宮尾みのり

一陣の風 情勢が動きだす
想い出もわたくし流でナルシスト
乱切りであるからこその筑前煮
目配せの合図背いてみたくなる
ワンテンポ遅れた人に乱される

愛媛県 中居善信

弘前市 高橋岳水

ストレートこれが私の取り柄でね
閃きを今書かないとすぐ忘れ
有頂天になつて僕を叱つて
体ごとぶつかる人は抱きしめる
手のひらで遊ばれている段違い

砂川市 大橋政良

僕というレールを家の中に敷く
欠点を責めてみじめになつてく
結論を急いで足を掬われる
幕を引く呼吸のうまいお爺さん
眼帯の中で点滅する蛍

黒石市 相馬一花

結婚をすれば薄れる恋心
麗人のお酌拒むと恨まれる
なんとなく美しすぎて近づけぬ
こっそりと施錠してから読書する
ストレスを時々捨てに行く飲み屋

十和田市 阿部進

自分でもあきれるほどの忘れ癖
歯に衣を着せない男信じたい
選ぶのは楽な方です現代っ子
手料理の上手な妻は宝物
ここだけの話にきつと嘘がある

本音まで消してしまった削除キ
如意棒が縮む男の曲り角
帰路のない旅なら急ぐことはない
生き恥がどんだん溜るエビローグ
流れ着く男にぬくい港の灯

弘前市 福士慕情

学校が無くなる村の子が消える
ふわり来てペンペン草が根付いてる
のど仏コロンと動くラムネ玉
窓開けて逃げろ逃げろと蠅叩き
水槽のメダカ一匹だけとなり

弘前市 高瀬霜石

僕よりも真面目な僕の腹時計
ペテランになると嘘にも艶がある
降参はしない丼飯を食う
のら犬の背にまだNOが貼つてある
心太 再就職の口がない

弘前市 今愁女

シャガールもピカソも越えたクレヨン画
一年生もう意中の子いるらしい
マンションで青空知らぬ内職
母の日の祝われもせず逝つたはは
デパートより人数多い種苗店

弘前市 宮崎 ヒサ子

あの雪が何処へ消えたか今日から春

マスクにも段階がある花粉症

春播きは赤い花咲く種子にする

この頃は深読み避けてから案に

湯加減が良くて素直な月が出る

青森県 小寺 花峯

リストラの首は夕陽にブラブラ

結び目が解けて明日の日が怖い

口止めの底でチクチク胃が痛む

挫折する夢に添え木を当てて置く

窓際で確かめている退職金

青森県 西谷 大吾

輪の隅で人の情けを積んで老い

生きのびてカルテがずんと重くなる

目が覚めて妻の寝息をじつと聞く

鬼となり仏となつて母は老い

瘦身の猫背が唄う世去れ節

さいたま市 八田 敏

機械音忘れてた日が蘇る

妻介護本人以上に薬飲み

腰骨折 車椅子押し楽になり

レシピ集積んでも矢張り母の味

ペランダの花芽に追われ老いの腰

東京都 播本 充子

オシャレして壁画の前で待ち合わせ

衝動買いが止まらない孫の服

ツイてない今日はパソコンで遊ぼう

弁当屋ばかり目につく仮住居

建て替える勇気をくれた低金利

東京都 岸野 あやめ

江戸開府四百年の桜咲く

美しい顔がつかない嘘を言う

侮った鮎が今では無二の友

右顧左眄きよろきよろしてる春爛漫

東京は他人行儀な百貨店

横浜市 清水 潮華

そそくさと桜吹雪を急ぐ人

通勤の楽しみ文庫本開く

裏側を知っているから無理を聴く

この先を話すと自慢話めき

忘れないように時々釘をさす

横浜市 保田 絹子

とりどりの花に怖気る一張羅

ウィルスに思いつまるフルムーン

先輩に一步譲って自己嫌悪

うっかりの傷に終日悩まされ

大仰な仕種へ視線ズームイン

横浜市 小野 句多留

砂嵐去つて瓦礫の哀悼歌

好き嫌いいつてグルメに程遠い

雑魚としてまんなかへんにいる安堵

マスメディア味方の不利に目をつむり

身延山しだれ桜の雨慕情(身延山雨の吟行)

富山市 島 ひかる

高野山なお巖かに春の雪(四月五日)

ひと目千本吉野に遊ぶ春の午後

長谷寺のはたん蓄はまだ固い

優しくも怖くも弥陀にある視線

人ごとのように銃声聞いている

静岡県 藺田 獏 杏

新任の先生早くも仇名付き

五平餅串の香りも共に食う

開け放つ庫裡より匂う昔の香

今聞いた噂脚色してみよう

葱坊主頭が割れて春の風

京都市 都 倉 求 芽

ハイテクの兵器で低次元の戦

春ですれ黄砂にウイルス杉花粉

雑魚ばかり集め押し切る多数決

毎日がスタートまだ先は長い

悪友が僕より癌と心中した

京都市 高島 啓子

雲ひとつなく百歳のお葬式

二言目には友達と比べられ

年金が下りる思わず笑みが出る

机だけある交番に灯が点り

愛妻があつて愛夫というが無し

京都府 稲葉 冬葉

春爛漫思い残しのないように

4Bの芯削る如きの七十代

生きるってこういうことか観覧車

せちがらい世に無料無料と寄ってくる

善人が拾ってくれた定期券

奈良市 米田 恭昌

ライブが助言をくれた屋台酒

老いてなおプランが詰まるカレンダー

金の相談だんだん耳が遠くなる

今更に出来ちゃった婚是非もなし

古希祝いはいにかむ夫婦のペアルック

大阪府 初山 隆盛

青山のスーツが並ぶ入社式

老夫妻二票に見える選挙戦

揃つても揃わなくても二時を打つ

春を摘む爪はみどりのマニキュア

停まらないドミノ倒しに走る恋

大阪府 米澤 俣子

成功のうしろにいつも母がいた

パートナーのお前老いたね影法師

あのように老いたいひとが一人いる

言うだけは言うたがあとの自己嫌悪

リフォームでスタイル変わる家の顔

大阪府 澤田 和重

動揺をかくす笑顔がぎこちない

心細くなると仲間の数を読む

老いひとり自問自答に慣れてくる

同じ愚痴きいてる方が音をあげる

医者はしごしている内はまだ元氣

大阪府 西出 楓楽

SARS WARRはらく暇なパスポート

孫連れもまたオツなもの別府の湯

きままるのCDを買う春の冷え

響き合うためには欠かせないお酒

再生紙味のある字が書けそう

大阪府 鶴田 遠野

意中の人他言無用で神に告げ

組合の無いロボットにある使い捨て

顔立ちで重一票決める老母

空き腹が何でも妥協してしまい

参拝で傍の願いをこぼれ聞く

大阪府 熊代 菜月

宿坊の昔なつかし木の芽和え

不器用で間ぬけで可愛いうちの嫁

アリバイは一升ビンの減り工合

笑わない人形相手に愚痴こぼす

文鳥に誰が教えた河内弁

大阪府 西川 更紗

初競りの鯉届いて酒にする

恋かしらワイングラスが揺れている

リストラに家族の平和乱されて

通り抜けきれいきれいを連発す

振出しに戻れば急ぐ事もなし

大阪府 小糸 昭子

見捨てずに咲かせましたよシクラメン

豊かなる物に囲まれむなしき日

ブッシュさん親子で戦争ゴツコ好き

すぐ染まり保護色になる甘えんぼ

花が咲く裏路探訪ウォーキング

大阪府 中澤 伽羅

表でも言いたい事は言うてます

ひょいと裏見てから心楽になり

一人立ち出来ぬ私のもたれ癖

気をつけの一言指が反り返る

稜線のいろ刻々と日が沈む

民謡にあえずこおろぎ橋散歩

大阪市 津 守 柳 伸

人間の盾九条を揺り返す

五六回あくびがつづく恥ずかしさ

太陽の恵み満喫する桜

天ぶらになって戻った露のとう

大阪市 津 守 なぎさ

ストールがひらひら踊る春の土手

萌えあがる緑の中の露の臺

一列縦隊でかるがもお引つ越し

鳶の子を金の卵に育て上げ

はいはいとほろい話にのせられる

大阪市 津 村 志華子

ゆく雲にわが身重ねて流される

夢掬い無駄も掬うて生き上手

ポケットに小さな夢を貯めている

お守りの心算で入るガン保険

通り抜け川面絵になる花吹雪

大阪市 中 村 叡 子

年寄りがふたり母を一パツク

食べる量変らないのに夫痩せ

物忘れ右脳左脳よ怠けるな

少子化で五月の鯉が泳がない

琴の音に平和囁み締め通り抜け

去った人深追いしない白い雲

煎じつめれば私に非がありや

あいまいなテルテル坊主クビに処す

もう死語か情けは人のためならず

沈みかけた輪をまるくする無駄話

大阪市 川 端 一 歩

四月馬鹿 健保三割嘘でない

桜見る気にはなれないトマホーク

機械より人の心を杖とする

ボク苦手草書の手紙濃いルージュ

計画を立てて余命にかじりつく

大阪市 大 川 桃 花

物忘れもうへそくりも儘ならぬ

年金で女唄つてよく踊る

さくらんぼつまむ三本指立てて

改札が迷う切符を引ったくる

退院の近い人からよく笑う

大阪市 鈴 木 トヨ子

殿様になれる醍醐の花見酒

一言の意見も出さず金パツジ

初咲きの芍薬亡母と御対面

パソコンにタイプの腕が悔しがる

冷めかけた夫婦に遅い子が生まれ

大阪市 古今堂 蕉子

息急いで並んだうしろ誰もこず

独り身は一番風呂でしまい湯で

あいまいにして波風を立てる人

あじさいと梅雨の会いはパーフェクト

インタビュースこまで触れてはいけません

大阪市 板東倫子

お花見の中を突つ切る救急車

人形のように育てた娘が背く

引退をした横綱がよく喋る

花ケーキ恥ずかしながら誕生日

鉛と鞭持つて大国苦悩する

大阪市 杉澤 汀

尽させてくれと奇特な立候補

青空に吸い込まれゆく蝶の恋

やわらかい鞆のぼうがよう入る

メロンパン皮がうまいぞ午後三時

これがあの金の卵か青テント

大阪市 伊藤博仁

手を振ると数倍返す選挙カー

ポケットに隠した嘘が気にかかる

電気ガス戸締まりもよし鍵はどこ

新幹線深呼吸して先頭車

絵馬祈願不況知らずの天満宮

大阪市 星野 さらり

例会へいい句のシャワー浴びに行く

予定では今日がお花見なみだ雨

ラッシュ時もただ黙黙と改札機

流されて下流で石も腰据える

命抱く孫の腹巻き編んでいる

大阪市 榎本 日の出

世の中の裏も見てきた古い札

五体無事それから欲が飛び出した

嫌なこと飲みこんでいる深呼吸

生きたとは死ぬことよりも難しい

もしかしてひよつとすると胸さわぎ

大阪市 岩崎 公誠

丸投げで急ぐ課題を棚にあげ

バーゲンの快感に酔い無駄を買う

笑うほど儲けた奴が突然死

皺の字はほんとにシワを寄せている

弱腰を隠さず生きて楽になり

池田市 栗田 久子

誘われて断わる理由は何も無い

手を添えた口からのぞくきれいな歯

さやさと竹が懺悔をくり返す

筍のえぐみもおつに酒きりり

紫陽花の青に染まってたたむ傘

和泉市 中川 楓

交野市 森本 弘風

戦争はテレビゲームじゃないのです
囀りのソプラノ アルト 恋忙し
ド忘れは生きてる証齒を磨く
水ナスが旬の顔して糠まみれ
女です意地を通して咲いてます

茨木市 藤井 正雄

成績は悪いが負けぬ友の数
すき焼きを囲み合格祝い膳
美人アナひと足早い夏の服
喜寿祝う色鮮やかな散らし寿司
雨の宿情けをくれたのは地酒

泉佐野市 山本 蛙城

煙草の火貸してと性善説のころ
偶像が堕ちて巨体のがらんどろ
鈍行で気付く路傍の花の数
サダム万歳一夜明ければノーサダム
売薬の曰くありげなネーミング

大阪狭山市 矢野 梓

出来そうにない事言うている候補
選挙戦入りたい人が見当たらない
手伝ってもろうて疲れ倍になり
すぐ譲る癖がなかなか治らない
故郷の話にいつも出るうどん

二時間で冬から夏的那覇に居る
豚足も納得をする那覇の市
鮮やかな記憶爆音基地の鳥
出る杭になって一度は打たれた
古い靴妻がさっさと捨ててくれ

河内長野市 山岡 富美子

シャッターに媚びたりしない鬼瓦
定年へやつと港に辿り着く
賞罰はないが山河は越えてきた
時代から取り残されてお宝に
ひと恋し灯ともし頃の白い花

河内長野市 井上 喜醉

知床で桜前線行き止り
坂道は牛歩でもよし万歩計
生活のリズムやすらぐハワイアン
エビ天がうどんなの上で踊ってる
タンポポが踏まれてばかり丘の道

河内長野市 村上 直樹

血の砂漠観ながら酒を飲む驕り
高笑いして誤魔化したつまみ食い
納豆を捏ねて怒りを閉じ込める
引き際の覚悟を波に諭される
あだし世をいつ果てるとも運まかせ

河内長野市 加島 由一

花の下心豊かな握り飯

旅に出る天下晴れての素浪人

港町演歌の似合う店があり

この花を見せてやりたいバグダッド

たまご酒飲んでSARSを予防する

岸和田市 木村 正剛

スローライフ僕は単なるぐずなだけ

一合で足らず二合で余る酒

独り居の豆腐二丁で足るおかず

パソコンもメールも触わる勇気ない

豊作で貧乏します案山子さん

岸和田市 藪野 けい子

還暦にこころで余生考える

春四月ばちばち人が訪れる

立場上ネクタイ結ぶいい日取り

綿密に下書き書いて印刷ミス

明日にくる同窓会に磨かねば

堺市 和田 つづや

停年でさらに凡人臭くなり

職辞して開放感のスニーカー

ひと様を殴って痛いのは私

犬だけが御主人様と見てくれる

手の厚い人を信じて生きてます

堺市 西村 りつえ

美女達に照れたか富士は雲隠れ

水車小屋富士の湧水蕎麦を生み

命までやがて削りにくる健保

ミサイルも舌打ちしてる砂嵐

甘い声荒れた男の骨を抜き

堺市 齋藤 さくら

寝込まない友がベッドで弱音吐き

迷惑な電話がかかる選挙前

目のかすみ年の所為だと認めない

いい人の基準が親と子で違い

健康の一つにお酢を勧められ

堺市 山本 半銭

小気味よくやられっぱなし四月バカ

新しい友達期待してる春

親しげに話して名前浮かばない

痛いところそれぞれに持ち老人会

欠席に丸を付けては春が近く

堺市 源田 八千代

お祝に色鮮やかな桜鯛

打ち水と季節の花で客を待つ

出来そうもない公約を並べたて

候補者の嘆願を聞く冷めた目で

聞き違い思い違いが増えてきた

堺市 河内 月子

吹田市 瀬戸 まさよ

太陽にお札を言うて旬のもの
見逃がせぬテレビだけ見て諸事多忙

カーネーション母の日辺り咲きそうだ

梅の木に来る虫退治疲れます

殿は三男ジューンブライドは和装

四条畷市 吉岡 修

憑きの差で負けたと甘いことを言う

似たものと言われたくないらしい妻

アンケートめんどくさくて全部丸

梅雨冷えもよいな熱爛しみわたる

別々のテレビでつつがない夫婦

吹田市 穴吹 尚士

休肝日ですかと酒があざ笑う

過労死の一步手前で立ち止る

定年で解き放たれてうろたえる

美声より調子外れが座をさら

ぬるま湯と氣付いていない町役場

吹田市 太田 昭

嘘をつけぬ背中を見せて席を蹴る

女房と利害関係ない暮らし

話下手父の言葉にある温み

飾らない言葉にほっと包まれる

追伸でやっと本音を少し書け

砂嵐石油は地下に千一夜

核無用平和合唱地球人

寝て読書風邪の余徳もわるくない

老夫婦子らには解せぬ風味もつ

清々し香る花屋で待ち合わせ

高槻市 江原 秀夫

余技たのし墨の香春を呼んでくる

面影が墓前に浮かぶ梅雨ぐもり

そよ風に打算はじけるシャボン玉

うすい髭男の鼻下に春がくる

眉目口画いて仮面をととのえる

高槻市 乙倉 武史

お手ふりの仕草可愛い愛子さま

喜びの綻び隠しようがない

人並みにアトムにもある誕生日

老いらくの恋に終止符などはない

健康へ補助食品の潤滑油

高槻市 西谷 治三郎

こつこつと無理して貯めて子に捧げ

飼い主も猫も高齡白い髭

ヘルパーが来るのでなぜかほのぼのと

来て嬉し帰って嬉し孫五人

人にやる土産のためにパスツァー

高石市 浅野 房子

アルバムに夢幻を閉じ込める
背を向けた耳には届かない吐息
切れば血が出る^と知りつつ試し切り
たゆとうてしばしを遊ぶ夢うつ
自分だけ例外はない老いるのだ

豊中市 吉田 あずき

年を経るたびに桜が好きになる
城と桜こんな構図に目がうるむ
老桜燃えつきるまで演じきる
手作りが素朴な春の膳にする
独裁者の像地に落ちる目のあたり

豊中市 檜谷 郁子

盲導犬きつちり渡る交差点
交差点あなたは何処へ行ったやら
よちよち歩き微笑さそう愛子様
五百羅漢みんな笑えばどんなだろ
夜桜の下 缶ビールとび歩き

豊中市 山門 タミ

杖とられ今日から独り言いきかせ
年金で生きよと夫の思いやり
二人三脚結んだ紐が切れました
名残り雪梅は何度もクシヤミする
六十年一瞬だったシャボン玉

富田林市 藤田 泰子

腹の虫まだ大人には成りきれぬ
昔から飛んでいました杉花粉
苺には練乳私は頑固者
歳毎に冬がだんだん長くなる
急ぐこと無いのもさびし終電車

富田林市 中崎 深雪

死ぬまでに宇宙旅行をしたい
満天の星に守られ露天風呂
全山の萌える緑に深呼吸
謎めいている君解いてみたくなる
政界に女の数が増えている

富田林市 片岡 智恵子

逝つてなお大きく想う母の城
師は米寿 生徒は古稀のクラス会
子にかけける期待と見栄の裏表
戸を閉めるしつけに困る自動ドア
急いでも真つすぐ翔ばぬつがい蝶

富田林市 大橋 鐘造

一人寝の布団で夢を温める
風向きが変わり二人に秋がくる
人間になって見て来た夢の数
棚ボタの椅子で踊っているピエロ
舞い終えた私攫っていく天使

富田林市 中井アキ

寝屋川市 坂上高栄

ベッサメムーチョ僕知らない妻である
女の子持たぬ私のぶつきらばう

告白のあとさきにあるサ克蘭ボ

欲深い影も小さくなってくる

情熱のリズムを乱す花の冷え

寝屋川市 籠島恵子

去年とは違う想いで見るさくら

昨日は六分今日は八分のさくらかな

花冷えにさくらも静止してしまふ

散りそめるさくらに待ったかけてみる

あつと言うまに土にかえてゆくさくら

寝屋川市 富山ルイ子

ほどほどがまだ身につかぬまま古希に

もどかしいわたしに何時も腹が立ち

ひよろひよろと来る影法師いとしかり

日記書き終えたら急にねむくなり

わたしには走り使いが性に合う

寝屋川市 江口度

合言葉球児再起の砂拾う

梅干しの種もかめます総入歯

リストラで会社黒字になったとて

リングむく時妻は一番幸せで

遮断機へ心は先にとび越える

一本の庭の桜へ花見客

寝屋川市 堀江光子

今年こそ仇をとるぞ四月馬鹿

かつがれた顔をふうわり春の風

ふと目まい下界は車湧く如し

これという用はないがと顔を見せ

寝屋川市 平松かすみ

奥様に逝かれ寂しい花畑

ときどきは悪ざしていた血糖値

わたしより若い勿体ない命

お面なら取り替えたいたい花粉症

一ヶ月顔のハタケで医者通い

寝屋川市 森茜

友も眼を病んで恩師を見舞うなり

あいまいにして攫われた恋ごころ

急いだら脱げだす靴がもどかしい

控え目な出店で目刺し買ってくる

出合いがしらに猫うターンしてしまふ

寝屋川市 酒井 勇太朗

いろいろとあつた挙式に招かれる
奇麗だがモデルの足は細すぎる
招かれて招く作法を噛みしめる
時計見る余裕トップでゴールイン
幸せを見て下さいと招かれる

羽曳野市 三好 専平

ゴミ箱のシンブン漁る人が増え
近づくとはやっぱり争えず
酒タバコ砂糖塩まで断つて生き
月の砂漠を行くのは戦車ばかりなり
八回で同点のままテレビ切れ

羽曳野市 吉川 寿美

とぐろ巻く不況を飛ばせ春嵐
一病を労り病夫と長い旅
花吹雪忘れ上手に老いてゆく
火消しつばの蓋に居るのは母だろう
ここからは一步も退かぬ喉仏

羽曳野市 徳山 みつこ

桜咲く人いつせいに湧いて出る
水晶玉フセインどこにいます
影武者のいない人と住む平和
私の心も乱す砂嵐
渡米してからのゴジラを欠かさない

羽曳野市 安芸田 泰子

本心を言つて友情薄くなる
何時死んでもいいと真つ赤な嘘をつく
老妻も一寸艶めく花あかり
輪廻とや花も私も地に還る
娘の家も二泊位が丁度よい

羽曳野市 川口 信子

そばにいてだけで内助と言うおまけ
日々好日暮らしのリズム崩すまい
ストレスへ衝動買いのささやかさ
風に乗り風に千切れてゆく野望
義理人情知らぬ若さに言い負ける

羽曳野市 酒井 一壺

損得に関係なしの一本気
古里を持つてゐる人は慌てない
御曹司人の痛みが分らない
半日もすれば忘れるほどのこと
カニ缶を上司に贈り味知らず

東大阪市 笠井 欣子

若作りしてもかくせぬ首の皺
ああ今日も無事に済んだとしまい風呂
挿木した沈丁花にも花芽つき
思っただけ吐いた本音に悔いはない
笑う日も泣く日も御飯ちゃんと食べ

東大阪市 指宿 千枝子

まだ六十萌える余力もっている
あいまいな返事をしてる大人達
ご自分の意志を貫く弱い人
犬よりも強いと思う猫の意志
一年生みんな眩しく光ってる

東大阪市 中岡 妙

絵の中の美人に時が止まってる
足音が聞こえるような童話読む
生きるのに馴れてきたから面白い
雛のあと早々座る武者人形
デフレ来て時代遅れが流行り出す

東大阪市 安永 春

紫陽花も競うています梅雨の入り
研かれたナースの言葉美しき
祇園町コッポリ急ぐ花あかり
逃がさずに又兵衛桜に会いました
再会へくすり持参を笑い合い

東大阪市 谷口 義

ユーモアの分かる切手のはってある
灯を消してから考えることがある
さばさばと生きて真面目に歯を磨く
ほめられてどうして良いか分らない
しみじみと言えは納得してくれる

枚方市 寺川 弘一

やりくりを子にはゆとりと見せた母
神様はシャイで神殿閉じたまま
人生をリセットします定年日
でっかい夢を見てもお金はかからない
結婚をしないと何故に不思議なの

枚方市 海老池 洋

反故になる紙の無念を思うべし
鶴橋も京橋も抜け飲めない日
恥知れとわが身に鞭を打つ再起
慶に慶 弔には弔の花の役
残照の橋振り返り振り返り

枚方市 鈴木 政子

毎日が日曜家事は休みなし
少子化に加えハイミス増えてくる
北朝鮮何時でも戦う策を持ち
陸中海岸断崖包む霧浮上
ファックスに告別式場を初受信

藤井寺市 太田 扶美代

大切な人へこだわる車間距離
おいでませ春の暦に誘われる
魂が留守をした日の出来事さ
きつと孤独で男はいつも夢を追う
握手してしまった事を悔いている

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

丹精の土にすなおな芽が伸びる

泣きそうなひとにわたしが先に泣く

後継ぎというそれらしき顔になり

半ばではないから恋に悔いがある

故郷で死にたいなどと本音かな

藤井寺市 高田 美代子

空爆自爆ネコはのっそり日向ぼこ

年金暮らしデカンショ節で生きている

しじみ汁ひとりの昼へ温める

シナリオを変えたら肩が軽くなり

東海林太郎のような歌手にはもう会えぬ

松原市 國見 蘭香

有機野菜食べてる元氣信じ切る

減速をしたいが稽古追いかける

骨密度はかる怖さに迫られる

広告が無ければ無いで物足りず

お早ようと花に声かけ今日が明け

箕面市 岩津 ようじ

四月馬鹿アメリカ負けたイラク勝つ

小さい星の上で人間また戦

岸恵子おばあさん演る歳となる

花まつり墓地いらんかと電話くる

ウィルスも医学進歩に負けていず

老春譜 夜学梯子をしてる姉

鯉幟あげる平和に感謝して

こぶしの中に怒りを溜めているイラク

風通し良くして不満溜めぬ胸

携帯で遠隔操作されてます

八尾市 神原 まさと

引き返すことが出来ない通り抜け

アルコール零のビールで花の宴

花嵐去つて居眠り出る陽気

電子レンジ便利になつて値が下り

月曜の散歩桜を独りじめ

八尾市 山本 宏至

千円還付しますと役所から手紙

作つたらいかがケータイ専用車

降りつもる雪がゆたかな米つくる

手術一年自分の顔をとり戻す

丸かじりおいしい音を聞いている

八尾市 長谷川 春蘭

ともかくも受験がすんで笑顔出る

どこへどう行く矢印のない旅路

山よりの風に従う芽木の声

爽やかに誤字の指摘を受けしこと

露骨には書けず真意を少し曲げ

八尾市 宮崎 シマ子

首晒す覚悟で賭けに出てみよう
割り切った嫁を見事だと思ふ
世相とは別に路地裏子沢山
まわれ右しても同じ荊道
雪月花貴方と今も続いてる

八尾市 吉村 一風

親の愛老いてしみじみ嘔みしめる
生かされて花めでる目も養われ
きれいごとですまぬ介護も鬼になる
向い風今日も私をためしてる
健康な妻のリズムにのっている

八尾市 篠原 いつふみ

この先は流れにまかす花筏
金のこと絡んで絆切れかける
赤ちゃんの拳の中にある未来
地下鉄で同級生の河内弁
いまだ欲捨てず大きい方を取り

八尾市 井尻 民

すぐ返事くれると思ひ待っている
冗談のような顔して好きと言う
大笑いちよっぱり脳が若返り
キヤリア組おとこ肴に大ジョッキ
つい油断そこにきつちり落し穴

八尾市 内海 幸生

亡妻招んで乗せてやりたき花筏
言うことを呑み込んだらしい喉仏
不作法な若者叱れず旅続く
間違えたお経の口から聞く説教
桜咲く枯木でないぞと言う如く

芦屋市 黒田 能子

明日のこと分らないからよく笑う
成り行きで分らぬ振りをしてしまふ
隙あらばなまけ心が入り込む
紙一重だったと思う曲り角
紙つぶてマンネリの輪に投げられる

尼崎市 春城 武庫坊

春の霧何か幸せ秘めている
桜満開去年と違う風が吹く
春の天 古きを捨てて考える
花便り聞くとお酒が旨くなる
孫結婚爺は結婚六十年

尼崎市 春城 年代

春眠のやさしさ平常心戻る
家中の段差目を閉じてもわかる
単純なミスが続いている余生
血のよどむことのないようボレロ聞く
花吹雪若い女の髪に舞う

尼崎市 林 昭三

同窓会出世頭が酌ぎに来る
短文で余白をもった葉書の美
大根も野菜も半分買う独り
退職時返す社章を贈られる
みどりの木陰定年過ぎた椅子がある

尼崎市 松下 比ろ志

カラオケをお国訛りで盛り上げる
好き嫌いだけで歩くと行き詰る
二枚舌転がす音色なめらかだ
窓際の男は雲と対話する
表札は風雨に耐えて自己主張

尼崎市 長 浜 澄 子

リベラルな生き方目指すベレー帽
ダークダックス見たじいちゃんの青春譜
反論もしつかりしあう無二の友
幸せの彩に埋めたい予定表
支え合う素材が活きる豆御飯

尼崎市 内 田 美也子

ほろ苦く土筆が醸す里の味
平和への尊さつる花の下
恙なく生きていますと花だより
物忘れこれも自慢の数のうち
もう歳に勝てなくなつてどっこいしょ

尼崎市 田 辺 鹿 太

適量の酒と会話が脳に効く
仁丹の看板がある過疎の駅
歯を磨き眼鏡を拭いてからデート
率直な意見に耳がこそばゆい
深刻に考えるからけつまずく

川西市 米 原 雪 子

花見酒隣の宴へ酌をした
熱闘の球児に夏を期待する
花粉症デートの予定狂わせる
三代児童謡ハモるハイキング
見晴しの丘しんどさ忘れはしやいでる

三田市 久保田 千 代

桃さくら春の序曲がまだ続く
レシビにはない愛情が混ぜてある
亡き父の愛はたつぷり受けてある
憎む人ありわたくしは不幸せ
この人がこんな事まで知っている

三田市 北 野 哲 男

太っ腹晒したあとは妻の愚痴
匿名のご寄進きつと神だらう
返り血を屋台で拭いて帰途につく
閉店の責任感じる招き猫
火葬場になんで桜を植えとくねん

西宮市 西口 いわゑ

浮き沈みあつて人間らしくなり
ひびき合う相棒がいて生きられる
玉手箱あけるしぐさでおべんとう
流し雛海の女神に抱かれよ
はっきりの雲よいくさは嫌ですね

西宮市 山本 義子

初恋の話大事に鈴つける
ローカル旅こんなに浮かれいいかしら
ひとり旅トイレに立つの困ります
初夏の花しっかり自己を主張する
木曾民宿手造り箸は総ひのき

西宮市 長谷川 淳

通勤バス豊かな人が乗っている
急がずに行こうゴールが見えてきた
初恋の女網膜の隅にいる
台どこで亡母がいるよな音がした
生き別れ戦争孤児の親も近く

西宮市 牧 渕 富喜子

会う度にいさぎよくなる姉妹
心まで老いは静かにノックする
過信したつけが数値を乱れさす
目の隅を春だはるだと虫がとぶ
マンネリへ順次に開く蘭の花

西宮市 門谷 たず子

小雨降る春のドラマがはずまない
花冷えの心にたまる軽い悔い
合掌に母思ふ日が多くなる
車間距離可愛い姑になりたくて
つなぎ目に情けをためて老いふたり

西宮市 坪井 孝一

花時計眺める人に飾るひと
古時計僕に倣って遅刻する
二日酔犬は散歩の鼻鳴らす
クラス会明日のネクタイ赤にする
ダンスよりギターやろうよおとうさん

西宮市 秋元 てる

座り直す逃げ腰を見破られそうで
デモ参加銃弾飛んで来ない国
恐い物見たい補陀落渡海寺
ピンクピラちよつと覗いてから捨てる
一人暮らしの一〇六歳が火事で逝く

兵庫県 大谷 幸次郎

いい返事ゆつくり時間かけてくる
ハイハイの二つ返事がちと軽い
吾もまた点景となる舟を漕ぐ
笹舟を流すせせらぎ見当たらず
五月晴れ元気を貰う旅に出る

奈良市 天正千梢

むささびが夜中に飛んでる鞍馬山
ねむれぬ夜八十年を巻きもどし
ガイドブックの確認の旅に出る
知る人も少なくなった三勇士
身は覚悟内部告発にぎりしめ

生駒市 飛永ふりこ

おくれ毛に男を飲んだ跡があり
不揃いのリングを包む母の膝
あやふやに見えるがチャンス逸しない
ほんのりと父の影あり花簪
ほどのよいすきまがあつて盃和む

香芝市 大内朝子

爛漫の春がわたしを唆す
履歴書のついた卵を食べている
淋しい日リップサーピスかて嬉し
女から男になってゆく過程
だんだんとズボラになってゆく左脳

橿原市 安土理恵

連休は孫に合わせる目の高さ
クローン人間おもしろい奴も造つてや
黄信号走る男と待つ女
夫婦ごっこ止める潮時考える
理由ありの二人へ花の降りしきる

奈良県 渡辺富子

肩書をとったスーツへ花吹雪
手慰みのベンが射止めた直木賞
二度童子老いの樹海へ迷い込む
理性よどみ利権漁っているトツプ
生け贅の姿でオペを待つわたし

和歌山市 木本朱夏

昨日から明日へ桜咲き急ぐ
寂しそうだから一円玉拾う
懐しきひと尋ね来よ花明かり
彼の世より父母還りませ花吹雪
襟元をすこし緩める春の風

和歌山市 牛尾緑良

桜咲く夢を持つのも二三日
三寒四温はちほち動き出すとする
空爆の記憶平和の有り難み
影法師なんでお前がはしゃぐのか
ゆるやかに生きてるつもり茶の香り

和歌山市 福本英子

やつぱりと号外貰う手の震え
戻り寒計報が続く落ち椿
休日を避けてよかった花の宴
花粉症誘って罪な通り抜け
ボブサップ笑って赤ん坊泣かす

和歌山市 桜井千秀

対応のまずさで逃げた青い鳥
置いて来た自分に出会う花の下
昆虫の寝息が洩れる夜の森
ものまねの巧さも芸のうちらしい
公園に埋めたロマンも朽ちてくる

和歌山市 松原寿子

迷路にも青空がある安らぎよ
詰めの一歩むなく平和からそれる
わたし色へ溶くパレットへ夢を盛る
親指が主役あなたと文字メール
性格へ心の温度はかりかね

和歌山市 吉村さち子

春の冷えに花の命を狂わせる
埋めていた夢が競って咲きそろう
鰻重の松の財布は嫁が持ち
派手な服嫁の見立てと言っておく
言い負けぬためにしっかりと朝ごはん

和歌山市 青枝鉄治

ケイタイも車も持たぬのが自慢
偏差値がOK出さぬ志望校
風の子をみんな拉致して塾が混み
無い袖を振れとチラシに攻められる
ブライドもモラルも無視をする不況

和歌山市 田中みね

好き好んでぶらぶらしてる訳でない
新しい夢に向って六十路立つ
ピチピチの孫へ嫉妬の露天風呂
人様に言える悩みはまだ軽い
天衣無縫装う陰で湧く涙

和歌山市 福井桂香

喜びの季節へ新芽出揃うて
名もしらぬ輸入野菜のレシビくる
目には目をまた解決が遠くなる
戦争の世紀の坂がまだつづく
最前線咲いて散るならそれもよし

和歌山市 細川稚代

音もなく降る春雨に騙される
それなりの過去があるから言い出せず
二つ持ち一つ忘れてバスを降り
江戸小紋粋なドレスにリサイクル
こま切れに変わる気候に踊らされ

和歌山市 上地登美代

ちやはやとされねば咲けぬ薔薇の花
あれそれで掴みどころのない話
幸せな人なんだろういい笑顔
アニメの画像みているような戦闘機
進化した菌が人間怯やかす

和歌山市 松尾和香

大好きなお酒供えて彼岸入り
あいまいに書いた答に丸がつく
草萌える大地を踏んで生きている
心から笑えるくらし自然体
恙無い暮し支えるスニーカー

和歌山市 武本 碧

キャンバスへムンクの叫ぶ色探す
きっぱりと答えてからの不眠症
マンネリへ赤信号の声が飛ぶ
夕焼けへ我が世の春と鳴くからす
アトムとは三日違いの誕生日

海南市 三宅保州

出棺の合図に時計見る他人
開きたくない日もあろう自動ドア
金貸せぬわけは親友だからです
ハンドバッグの中身は見せてくれぬ妻
美男美女ばかりでつまらないドラマ

海南市 堂上泰女

新入児祝福してる野辺の花
選挙カー名前ばかりを連呼する
コーちゃんの愛の賛歌で若返る
神宿す桜花へ優し春の雨
私も鳶も満喫春の空

海南市 谷口義男

持ち付けぬ大金持てば妻おろろ
美しく老いる以外の欲は無い
自分史へ恥の数々晒し首
聴く耳を持った上司に憧れる
ミサイルの射程で暮らす恐怖心

和歌山県 中後清史

十代のハートが慈雨に飢えている
出会い系サイトへ鬼も組みこまれ
すがた見に鬼と仏が往き来する
人間の手はとどかない大宇宙
鉛筆を一〇〇〇号までは手放せん

鳥取市 岸本宏章

究極の愚かさだろう自爆テロ
学校に足りないものが塾にある
素うどんが一番好きなうどん通
ぬくぬくと飼われて猫が退化する
花時計いつも男が待たされる

鳥取市 岸本孝子

老いた身を嘆いてばかりいる愚か
三人になると話がまとまらぬ
負け戦 敵の笑顔が目にいたい
気付かず粗末にしてる近い人
春向きの顔に仕立てる美容院

鳥取市 倉 益 一 瑠

コロコロと感性を生むおもちゃ箱

あいまいな答え点点点と書く

ときどきは休んでほしいカレンダー

逆風へ生年月日盾にする

人間よりも人間臭い犬という

鳥取市 有 沢 せつ子

子供らは遊ぶ天才春休み

花冷えに灯油の缶も底をつく

四年住み閑静の良さを忘れがち

フラッシュへ作り笑いが難しい

戦争はダメと署名を強く書く

鳥取市 福 島 庸 二

ひとりでも賛同多い道選ぶ

情報の渦にマウスもカラ回り

母さんが元気でないと活気ない

ほんとうは助けが欲しいカラ元氣

受け止める心のダムを広くする

鳥取市 徳 田 ひろこ

真つ青な画布へ辛夷の花が咲く

一切を捨ててお友達が増えた

ウォッチング今ほがらかな散歩道

伸び切った螺子干している日向ほこ

唐突にレターナイフがこちら向く

鳥取市 武 田 帆 雀

言いたいこと山ほど貝が蓋をする

皆さんがいい顔してる股のぞき

焼酒と見られたくない難しさ

竹藪の泉がうまい竹コップ

考えを一步も退かぬ犬と猿

鳥取市 録 沢 風 花

春の色すつぱり包む菜種梅雨

五月には私にや々と春が来る

五月晴れ野良着は休む暇もない

心地よい風が脳波を揺りおこす

一陣の嵐に桜いさぎよい

鳥取市 植 田 一 京

以心伝心などじゃ駄目です言わなけりや

頑張り過ぎて嫌われぬようにする

欠点も時々お見せしておこう

歳などこれから花のつもりです

ついに愛冷めてお金を数えてる

鳥取市 美 田 旋 風

ピーポーに盆や正月などはない

同じ頃門灯消える両隣

デュエットで歌えば刺さる嫉妬の目

春風へ定位置に咲くクロッカス

カレンダーの印は妻の通院日

鳥取市 夏目 一 粹

戦場に鬼哭の群れがさまよえる
不覚にも影武者鬼になりきれず
カゴの鳥死なすようなら逃がしたれ
節約と母は仲良くやつて来た
助からないと思つても手を合わす

鳥取市 田中 瞳子

翼折り春を拒んでいる私
妥協して仮面の下を見極める
赤ちゃんをおんぶした人見なくなり
愛犬の十七回忌また涙
遅咲きの桜に我が身置きかえる

鳥取市 西村 黙光

喜寿の会 齒抜けになった旧友の顔
故郷が思い出させる盆踊り
方言が音頭取つてくるクラス会
俺貴様十九の春へ連れ戻る
歳月や禿げた頭に白い髪

鳥取市 山本 益子

ストレスを溜める暮らしと縁切ろう
ドクターの早い告知で生き延びる
リストラの愚痴が浮いてるネオン街
歩くことで元気をもらう老いの坂
脳天を少しアタック春の風

倉吉市 米田 幸子

飲むほどに大風呂敷を広げだす
何なりとおおせ下され受けて立つ
たよりない歩きにそつと肩を貸す
万能な人でないから温かい
あいまいな返事で今日も無事に暮れ

倉吉市 山本 玲子

タンポポの黄色い声に草萌える
集団で奇襲をかける雀蜂
近道におしゃべり雀待ち伏せる
知らずともすんだ噂に惑わされ
下腹を削るとMサイズになれる

倉吉市 野口 節子

リストラの鬼の涙を見てしまふ
躍進の椅子に嫉妬の目が刺さる
不用意に溜めた脂肪にうなされる
春の陽を浴びてつくしが唄い出す
白魚の指やんわりと嘘を注ぐ

倉吉市 牧野 芳光

リストラを笑いとばして鋏をとる
雑草の緑踏まれて濃くなる
ネクタイを外し見知らぬ町へ行く
澄んだ目に見える埴輪の目の穴だ
退屈な昼がたたずむ商店街

倉吉市 松本 よしえ

米子市 青戸 田鶴

触れられてすぐ目を伏せるおじぎ草
デュエットの曲はあなたの言うなりに
内緒には尾鰭どころか羽も生え
どん底で結んだ絆ゆるまない
神さまを担ぎ戦火がおさまらぬ

倉吉市 淡路 ゆり子

六時半寢床の中のラジオ体操
暖かなキッチン嫌う冬野菜
四世代仕切り続ける山の神
初鳴きや三日もすれば聞き惚れる
こくこくと息を弾ませ母乳飲む

米子市 木村 富美子

もつれ合う鬼と仏を抱いて住む
バランスかアンバランスかピカソの絵
筆箱が何時も締切りだと叫ぶ
飛びぬけて栄えた者もない家系
空っぽの頭をためすように闇

米子市 林 瑞枝

楚々としておんな同士も良い風情
桜吹雪の美女と仁王はよく似合う
羽根を休める蝶に優しきダムの水
旅人の願いを耳に野の地蔵
春の舞わたしに若さ呼び起す

葉桜になった桜にありがとう
透明になるまで話し合っている
リヤカーを引く要領で父を押す
一徹な兄思い出すコッペパン
モロッコの思い出詰めた旅靴

米子市 白根 ふみ

合格へわたしの務め宮まいり
空うごく棚からひらり春帽子
加齢とは物忘れとは腑甲斐ない
うら側を覗き熱意さめてくる
心中の鬼を宥めてから眠る

米子市 門脇 晶子

進んだら退くことも考える
栄転はうれしいけれど独り住む
栄えた頃は似合っておった鬼瓦
浄土への登山だったか父の世は
新緑が微笑むように皆をよぶ

米子市 澤田 千春

鳶職のバランスひよいと神の業
草原を緑の風と翔びたいな
ストレスを流す湯舟に首が浮く
大勢で進めば敵は近よぬ
無理のない歩幅で大地踏みしめる

米子市 中井 ゆき

根切り虫夜叉の顔してふみつぶす

青空だ進めすすめの旗をふる

繁栄は御先祖さまの後押しだ

青空も花も忘れて殺し合う

花前線私を置いてゆかないで

米子市 野坂 なみ

あんパンの味大口でかじる時

日時計と悠々くらす生き物も

ばあちゃんも春のマーチに乗って跳ぶ

うっかりと誓い破ったことがある

花野まで踊りきるのはむつかしい

鳥取県 近藤 春恵

インチキなラベルに主婦はだまされぬ

インチキにだまされません食べません

インチキはない自家産の野菜です

大砂丘月の雫がキラリ落ち

優しさに心の傷がうずき出す

鳥取県 下田 茂登子

少し位ホラも吹かんと生きられぬ

朝昼晩食うことばかり老い二人

乳飲み子と同じ可愛さ四十の子

言い訳をすれば赤糸切れそうで

お隣は挨拶先にしない女

鳥取県 田村 きみ子

初苺ほとけさまにも隣にも

少しだけ狂って見たい眉を引く

これからは背伸びはしないスケジュール

竹踏みは五分化粧は三分で

言い訳をすると思議に痒い鼻

鳥取県 土橋 はるお

爺ちゃんの瘤を返しに鬼が来た

春うららリユック背負って出たくなる

貯める気はないが財布が溢れだす

さわやかな美女さわやかな返事する

口遊びながら男が皿洗う

鳥取県 新家 完司

花の咲く所へ行こう春の旅

排ガスのせいかな黄砂か月おほろ

満開の桜の下のお葬式

花ふぶき受け幸せなほとけさま

葬式のついでに花見して帰る

鳥取県 林 露杖

辿り来て暫し忘我の花の下

花の下処々に小競合い

種子薯の芽が伸び畠荒れ放題

畑仕事挽がれた老いの腰摩り

風下に回り成り行き嗅いでいる

鳥取県 土橋 睦子

鳥取県 鳥羽 玲子

一切の無常を救う仏さま

アウトドア山菜採りに凝っている

代々の掟を守り輪に染まる

スランプに緑のエキス貰う山

地産地消 野菜溢れる道の駅

鳥取県 小谷 孝美

完治する決意へ鬼が近づけぬ

苦勞しただらう笑顔が美しい

人間もベットも老いて紙パンツ

満開の春へハートが飛び跳ねる

子離れがでさず伸びる芽摘んでいる

鳥取県 石谷 美恵子

出しゃばりの芽を見逃がさぬ花鉢

国民学校みんな痩せてた強かった

庭の花木はみんな貰ったものばかり

不都合な私はみんな塗りつぶす

妻の手が痒いところに届かない

鳥取県 西川 和子

開発にだんだん枯れてゆく泉

張替えた壁に画鋏も遠慮する

カーテンを替えて夜明も早くなる

役の字を一つはずして腰伸ばす

据え膳のあなたいつもお客さま

重くなる眼を叱り琴を弾く

生き蟹へほとけ心をもてあます

逃げられた百足へ恐怖続いている

灯明をあげて心を落ちつかす

口下手で打解けにくい性と知る

鳥取県 鳥羽 直市

わだかまりネオンの街に捨ててくる

こだわりはもうない茶髪美しい

おでん鍋大根踊り味が出る

嫌なこと忘れ前向き生きてゆく

ネクタイを結ばぬ首が太り出す

鳥取県 佐伯 やえ

れんぎょうが咲いて鬼門がはしやぎ出す

ありがたや花見のできるこの平和

仕事に自信つけたゴンタのいい笑顔

粗食に馴れて医者との縁が切れました

庭に井戸百年たてど絶えぬ水

鳥取県 乾 喜与志

黒龍江 水地獄を越えてきた

四十二度線くぐり抜け出た仏力や

知らぬ間に妻は独りでお浄土へ

黄水仙やっぱり笑顔むけている

やがてゆく道はがらになだらかに

鳥取県 平井 栄翁

ひい孫のベツトになった八十の爺
不景氣を飛ばす台風早く来い
思いきり伸びる休耕田の草
子の熱が下がって嬉し髪をとく
くたびれた肩をハンガー待っている

鳥取県 奥谷 彩子

小宇宙我が家五人と一匹で
日和見に定説もたぬ二枚舌
がまん節約総理の説も聞きあきた
亡夫の影さがして歩く草千里
さみしくてうっかり鬼と手をつなぐ

鳥取県 谷口 次男

健康は芋と鰯と麦めしだ
一二枚葉っぱをかじる健康法
大奥も顔負けでした社の仕組み
食い違う意見を吐けばテロリスト
政治家はそれから四年威張る癖

鳥取県 小谷 はるみ

初舞台踏んで脱皮の始まりだ
初めてを積み上げ人となってゆく
初孫を抱いて村中練り歩く
爆撃を見ながらご飯食べている
砂嵐神の怒りが始まった

鳥取県 太田 幸枝

六分咲き程度の幸にあまんじる
愛情を包んだように咲く牡丹
廃校と知らぬ桜が咲いている
宅配便ギユウとつめこむ親心
空爆を映画のように見る恐さ

松江市 津川 紫晃

責任のない口だけがよく喋り
足の指ちやはやされた事がない
花散ってそれから届く請求書
春の船 親の希望は積み残す
バラ一輪言えぬ心を置いてくる

松江市 銭山 昌枝

激流へ体当たりした後遺症
隙の無い人の死角を見てしまう
イニシャルに束縛されている指輪
喜んで下さる方の世話をする
地獄極楽見て来たような話する

出雲市 佐藤 治代

古傷を真綿で包み生きている
やわらかい所が少しずつしほむ
みみっちい話は止そう気が滅入る
遠慮して言ったつもりへ矢が刺さる
盗まれる物がないから鍵はせず

出雲市 小白金 房子

約束を果し紫陽花丸く咲く
四季おりの花を手向ける仏間の灯
牛飼って戻る畜舎へ星が降る
のんのんと草かむ牛の目がやさし
住みついた猫も権利の爪をとぐ

出雲市 富田 蘭水

大ぶりの白のボタンが別れ惜しむ
鬼一つひみつに飼って鏡みる
いい汗を野地蔵さんに見て貰う
花ばかり見とれ終電忘れてた
花吹雪さだめ知ってか風を呼ぶ

出雲市 吉岡 きみえ

艶歌にはむかぬ清楚なチューリップ
葬式がなくて和尚に髭がのび
お礼参り高野のお山へおじぎする
ひとり居に四角もまるも自由席
またひとつ溜息ついていたわたし

出雲市 青山 久子

思い出の雫に濡れるてんでまり
輪の中に居たくて嘘をついている
年金をちよいとつまんで化粧水
糞虫もわたしも風になうらぶら
いつの間にか孫が携帯持っている

出雲市 城 多喜

もう一度逢うと聞いたは空耳か
期待してまでも空振りしてしまふ
結局はひとりぼっちと納得す
風邪の菌右脳にまでも入り込む
ご近所に淋しい人が越して来た

出雲市 岸 桂子

酒に溺れる弱い男を見えています
プラスチックの診察券を持っている
門灯を消し一日のわたし消す
大吉に少し油断をしたようだ
当たらない天気予報の方が好き

島根県 多々納 テル子

香草の香りに脳波生きかえる
ワツと咲き自己主張する黄水仙
押し入れをガラツと明けて点検す
膝の上日差しを溜めて針を持つ
花冷えに重ね着をして莫産を敷く

岡山県 大石 あすなろ

母の手を握るとオーラ発光す
体力も強気も戻る七分粥
身勝手な構図ばかりを独裁者
定位置に握り鉢と薬箱
期間限定 春一番という嵐

広島県 藤 解 静 風

ひっそりと咲いて山ざくらは散った
母の忌の享年三十三とある

遺言も遺産も期待せぬように
かくしゃくと言うには歩幅ちいさすぎ
不倫でもしとるか眼鏡また替える

広島市 森 田 文

弱虫が通る釣橋よく揺れる
聞こえないのだらう返事してくれぬ
まだ何かあるらし正座崩さない
もしかしてわたしのせいか笑い過ぎ
エンピツを持てば人形描きはじめ

竹原市 時 広 一 路

宇宙から見たら私も宇宙人
すっぱりと過去再生紙は立派
脳からの放出少しずつ増える
竹工房竹いきいきと生きている
生命線伸ばしてくれる薬飲む

竹原市 森 井 菁 居

うっかりと讓歩弱みを握られる
楽勝をした幸運を過信する
片肌を脱ぎ男気を出すも良し
採血が平気になって病んでいる
力では勝てぬほめ殺しに限る

竹原市 三 宅 不 朽

さくらさくら塔の孤影が冴えてくる
いい話むごい話もある桜

我が息を吐き補聴器をたしかめる
税務署の桜よ見事すぎないか
なあ孫よゆつくり大人になるんだよ

竹原市 石 原 淑 子

木蓮の北に向かって咲く不思議
花の冷え心の円くならぬ鬱
心干す洗濯物を干しながら
ローンクを一息に消す五十七
桜さくら目裏染める薄ピンク

竹原市 古 谷 節 夫

百態の雲も平和が好きと言う
神さまを信じ人間信じよう
跪きお地藏さんとする会話
正直な人だ真つ赤な顔になる
花の種まいて明日を待ちわびる

竹原市 岩 本 笑 子

腰少しひねりガンダーラ仏静か
輪廻転生私はどこら辺かしら
ハウス物それでも花は天を向き
ネコになりたい寝てばかりいるうちの猫
終電車心のトゲがまだ抜けず

美祿市 安平次 弘道

直角に曲り挑発はぐらかし
信じてはいるが不安がふとよぎり
なれあいで見積る額が甘くなる
夢はもう沢山現実に戻る

熊本県 高野 宵草

キャッチャーのサインにほしいテレパシー
金婚のお互い先に逝きたがる
戦争をゲームのように観るこわさ
親も子もアテにしている保険金

熊本県 岩切 康子

放牧の牛あちこちに春の風
旅先から夜な夜な声を聞かされる
寝たきりへ絵も添え便り続けよう
引き上げてくれた温もり忘れない

熊本県 永田 俊子

さくら花お椀に浮かべている平和
散ってもさくら花屑というすてきな名
転ぶのは試金石もありがとう
イラク戦争砂漠に昇る赤い月

唐津市 久保 正剣

八方美人今日は敵の傍に居る
ライバルが光って見えてからのウツ
隠しごと今日から始まる角隠し
居酒屋のおやじに習うナンパ術

唐津市 井上 勝視

指切りが親の叱言を背なで聞く
ヒソヒソに期待する目と耳が寄る
洪々と条件をのむ左前
若き日のカサブタが浮く老いのシミ

唐津市 山口 高明

探知機を持つ手震える地雷原
元老の言う若僧は五十過ぎ
わたくしの原動力は顕示欲
食卓に座る倅せ十字切る

唐津市 宗水 笑

ミサイルの射程の中の花見酒
戦争は嫌だ少年兵の遺書
軍艦マーチあつと言う間の諭吉さん
青雲の夢が書棚で老いている

東かがわ市 神保 坊太郎

極楽は知らぬが地獄は二度三度
猫かぶりバレたか背中向けられる
あげ底でレベル合わせていた私
不発処理遠いあの日の怖い夢

東かがわ市 成重 放任

恋文もメールで送る現代っ子
瀬戸に住みあふれるほどの海の幸
草もちを供え彼岸の供養する
玄関の前で寛ぐ蛭族

東かがわ市 瀧井 勝

定年の暮らし大らか腹時計

開運の鍵は流した汗だろう

巨額負債 架橋誘致の夢いずこ

見栄張って煽てに乗って酒地獄

松山市 古手川 光

拉致された時と変わらぬ波の音

音立てぬように蕎麦食う人が増え

金の卵黒いダイヤの懐かしさ

本人の知らぬ弔辞で惜しまれる

松山市 高橋 宏臣

妥協する握手だ ほどほどに握る

呑み込んだ言葉相手は読んでいる

どうにでも取れる言葉に糸もつれ

いいたくはないがと自慢して帰り

松山市 丹下 美津子

土佐の花見 皿鉢料理の鯛がはね

勝って良し負けて絵になる高見盛

ぼつぼつと仕事もあつて道後の湯

介護する身指の先まで気を遣う

高知県 小澤 幸泉

戦場に祈り届かず今日を生き(イラク戦争反対)

翔んでみる所詮絵のなか家の中

空白は残さぬように書く日記

時々意識とぎれる昼下がり

高知県 赤川 菊野

次の世も亡夫と約束しています

老いたとは思ってないがこのおひざ

子のために浴びる火の粉は熱くない

マスゲーム一糸乱れぬチマチヨゴリ

高知市 北川 竹萌

妻傘寿 吾卒寿越え共元氣

九十年の経緯生かせて飯三度

横断歩道でお元氣ネと声くれる

茶摘みして加工の銘茶ばかり飲む

弘前市 蒔苗 果林

田舎よりひと月早い街の春

春の陽に五体隈無くいとしまれ

カップルと子等とデパート花盛り

遊技階 浄土に見える老いの椅子

弘前市 須郷 井蛙

年金の財布を狙う負担増

役員の苦労考え寄付を出し

まず幹事唄えば次が流れ出し

旅に出て嫁を時々解放す

弘前市 櫻庭 順風

即興の蔵子詩を詠むふくよかさ

即興の氏名を詠うしたたかさ

即興の履歴頷えるほろにがさ

素晴しい即興書家に酔うている

弘前市 一戸ツネ

春なのに古い河童の病み疲れ
因と果がメールの波で荒れてくる
死に神のメールに命さらわれる
駅前はおでんが匂う雑記帳

弘前市 岡本花匠

フルムーンきずなあざなう湯を巡り
葉ざくらの精気を貰う散歩道
葉草にと答えてくれた杉菜取り
くすり漬け止めると論す風みどり

東京都 後藤早智

お茶の間にずかずか戦争入り浸り
いつか見たドラマと同じワンシーン
戦争と平和誰もが軽く言い
三猿にいつしかなっていく無力

横浜市 菊地政勝

この辺でおいと呼ぶのは止めにする
初対面どんな笑顔をつくろうか
手さぐりで探しています明日の地図
候補者のつくり笑いがぎこちない

富士宮市 渥美弧秀

極楽へ近く点数が未だ足りぬ
子羊へやさしい瞳愛子様
鱗雲ひろがる空に魅せられて
居酒屋へ二次会誘うお愛想

静岡市 安本晃授

極限を生きた足跡消さずおく
カガシさえ稲の行く末案じ立つ
思い出がもつれて回る夜の雨
病む夜の命を刻む雨の音

富山市 舟渡杏花

地下たびのコハゼが土壇場でゆるむ
鰯のけむり仏間まで這うてくる
計算に弱い男と登る山
茶柱がすこしざわめく入試の日

愛知県 早川盛夫

旅はよし好きな時間に好きな酒
和解まだ当り障りのない会話
定年へチューブのように押し出され
特徴のある足音ですぐ分かり

京都府 丹後屋肇

義理チョコを貰ってからの虫歯痛
工場閉鎖跡地の桜咲き誇る
こつばりの音に落花の祇園道
露天湯に浸って仰ぐ御来光

亀岡市 井上森生

文明ももとは戦が織り成した
香港の肺炎騒ぎ次は何
世界には数多戦の種ばかり
石橋は決めた後から叩くべし

滋賀県 中 宗 明

期待した映画鑑賞あつけない
点滴をしつつ頑張る決算期
マイベツトひとり暮しを賑わせる
結んでは解いてはにかむ見合席

池田市 岡 本 吉太郎

新しい事よい事ばかりではないぞ
ほめられて気分の悪い人はない
ほめられて舞台に上りしくじりぬ
人生を豊かに暮す裏道知る

和泉市 西 岡 洛 醉

寂聴の法話に明日の夢を追ひ
鶴折って平和の手立てする積り
医の門を叩いて今日の生きる欲
脇役に徹した母を僕は好き

大阪市 本 間 満津子

花見の場所取り新入社員の新仕事
平和への犠牲空爆大き過ぎ
郵便受けなんべん見てもピラも無い
遠ざかる白いハンカチ目に残り

大阪市 清 水 絹 子

あと二キロ減らすに箸の四苦八苦
法事つづき見馴れた顔も御挨拶
進学の絵馬ヘリストラ告げられぬ
放物線描く鴉も春謳歌

大阪市 川 原 章 久

何気なくふらつと家出ホームレス
一病がつかず離れずだが元氣
先生も生徒もキレル新学期
最良の夫婦と易者ウソばかり

大阪市 中 田 あい子

アメリカで全力パワーの松井君
前髪を紫に染め姑おしやれ
タマちゃんの浮上ひたすら待ちつづけ
万全と思つた策にもろい箇処

大阪市 浦 田 綏 子

わが命地球と共にちぢみゆく
熊野古道自然の中で会う菩薩
デパ地下で一足早い季節買う
路のとう天ぶらにして味噌にして

大阪市 玉 置 英 子

二十歳若い娘が八十三
傍にビル大阪城が小さく見え
種千個から千本のかいわれ菜
枝豆の網は流しのごみ受けに

大阪市 渡 部 さと美

雨の日は鏡みがいて夢みよう
聞き役がしゃべってしまい悔い握り
柳ゆらゆらわたしの頭カキケコ
香水ブンブン着物力士とすれ違ふ

大阪市 川久保 睦子

バラサイト親の甘さがだめにする
手のひらに救い求めるEメール
自動ドアためらいもせずスーと開く
泣いている理由は聞かぬが老母のため

大阪市 松尾 柳右子

アトムならこの戦争をどう裁く
映画かと思間違えてる戦争だ
出先より一人見るには惜しい虹
父さんを疲れさせてる春休み

大阪市 安達 はじめ

火をつけておいて女は身をかわず
赤い傘梅雨のデートを待っている
ミサイルは全部日本に向いている
大事件忘れた頃にまた事件

大阪市 小泉 ひさ乃

公園のベンチで遇った花吹雪
朝市にとれとれの魚踊ってる
均等法ウーマンパワー溢れてる
片隅で雑草小さな花をつけ

大阪市 町田 達子

ラビちゃんと呼べば振り向く兎さん
孫からの手紙くるのも久し振り
惜しいなとアメリカンキルト展を逃がす
絵画展好きであちこち行きました

大阪市 榎本 舞夢

竹の子のえぐみたのしむ舌つづみ
街中で声弾んでる春休み
ウインドー一杯春が飾られる
土手に出て子守りする背に春の風

大阪市 寺井 東雲

元氣でる百葉の長に助けられ
カラオケは軍歌以外は唄えない
くどくどと化粧した甲斐ある美人
解け初めにつこり笑う雪だるま

交野市 山川 日出子

イラク戦デイズニールランド荷の検査
死神がバクダン持つてバグダッド
フセインを知らせた人に賞金を
フセインの像を落したイラク人

河内長野市 植村 喜代

すぐ四月太陽だつて春の顔
お水取りやっぱり寒いバースデー
ちよつと出ないとデパート様変り
娘が二人孫が二人と言える幸

河内長野市 水谷 正子

ご開帳京都の寺にある事情
古寺巡礼 暇金あれど足不良
アバウトな戦で人の命散る
幸運がちよつと笑つてすれ違ふ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

足を棒に反戦の列歩いてる
押し切られた正論が肩そびやかす

延命の装置いらんと友眠る

星条旗の星のひとつになる総理

岸和田市 井 伊 東 吉

フセインもブッシュも神の加護願う

変わりばえない顔触れ地方選

春盛り彩りを増す園芸店

ゴルフの日頼りにされる晴れ男

岸和田市 原 さよ子

戦中を生きて平和な世を願う

願望のサクラが咲いて出た笑顔

土壇場で一肌脱いだ母の愛

お喋りのように挨拶うまく出ず

吹田市 早 川 棲 世

ローマ燦々道ゆく修道尼も陽気(旅の思案 その五)

どん兵衛がうまいぞパリの屋根の下

反戦を主張する国武器を売る

過去捨てて来た旅にいてワイン佳し

吹田市 岩 屋 美 明

低金利以来上らぬ血糖値

虫眼鏡で象さがしてる広辞苑

○×が好きで飾りのない暮し

一抜けた後は息合う会議室

吹田市 大 谷 篤 子

一人だけお洒落して来た四月馬鹿
指相撲の頃から兄を越えられず

指先でペンキ塗りとて触れてみる

友達の約束反故に孫の守

吹田市 野 下 之 男

大国のエゴが勝手に歩いてる

傲慢と傲慢 出合い火花散る

肩書も家の中では休んでる

嫁はんに花を持たせるクッキング

大東市 児 玉 蛙

やりかけて明日明日とお茶にする

やってやると誓ってベルト締め直し

足元の抜かり気付かぬ有頂天

古い靴歩いた道を覚えてる

大東市 南 原 正 和

朝電車 食う 塗る かけるヤングギャル

屋台店肩寄せ合って生きている

五十年勝負引き分け共白髪

よちよちの孫のあとからよちよちと

高槻市 傍 島 克 治

愛という名で鬱憤を晴らす鞭

約束破り前科重ねるこの小指

短足ゆえに歩数が多い万歩計

母の日も父の日もなし老い二人

高槻市 生田 義一

修理より新品安いバーゲン店
合併名覚えられない馴染めない
今日もまたシャッター開かぬ商店街
入院日検査検査で疲れ果て

高槻市 井上 照子

春が来た世界平和も早く来い
パソコンに挑んで眼科門たたく
採血の結果一万歩かねば
ベルが鳴るゴメンネ只今入浴中

高槻市 左右田 泰雄

遊ぶ子を目で追いながら立ち話
くもの巣を蜘蛛ごと叩く竹ぼうき
犯人のようなパスポートの写真
歴史だなあの出合いから五十年

豊中市 岸田 知香子

参道に溢れる春の香荒神さん
脱いで着て汗ばむ春の荒神さん
右左屋台参道品定め
植木市足止めさせた春の花

豊中市 安藤 寿美子

クローバー萌えてる四つ葉あるかしら
夢少し入れて脳みそやわからかに
包丁を研ぐところからつぽに
お花見は毎年他所の紅枝垂れ

豊中市 江見 見清

つまらない意地でボタンをかけ違う
疲れても孫のお供に志願する
後ろ手でドアを開けたぞ何かある
創業の遺志が息子で験される

寝屋川市 太田 とし子

骨董屋私の歳が売ってある
縁日にはしゃいで買った鮎ン玉
あいまいに教えた道に雨が降る
春風がペラペラめくるカレンダー

東大阪市 北村 賢子

家路を急ぐテールランプが抜いてゆく
開戦の主旨をあいまいには出来ぬ
春ウラハラひらひら蝶になるころ
母さんが笑っていればしあわせだ

枚方市 森本 節子

気楽に観る最良の力士休場で
花咲けど娘婿逝くさかさ事
飯盛霊園さくらの花とうらはらに
ひとり見る川辺の桜極まれり

枚方市 宮川 珠笑

穴あいた靴下洗ってから捨てる
戌年で寅の妻には逆らえず
暖房代嵩む早起きしかられる
長生きへ笑い袋をたくわえる

枚方市 安達 忠央

雨やどり まだころざしなかなばなり
ころざしエロも果たす役があり
今宵ただころざすのは旨い酒
うしろから見ればまだまだ美しい

枚方市 二宮 山久

満開の桜へ小鳥のランデブー
桜舞う今日は花見のコップ酒
戦争は終結せぬまま花見会
お隣の息子夫婦の草をひく

藤井寺市 中島 志洋

近道を行けば別れが早くなる
梅雨明けをじっと待ってる海の家
法螺吹きを調子づかせる聞き上手
心の憂さ晴らすお酒を梯子する

藤井寺市 楠 昭子

一言が祟り左遷の辞令くる
始めまして新入社員しおらしい
ごたごたが好きで喧嘩を売りに行く
歩け歩けとわたしの杖はよく歩く

守口市 井上 桂作

美しさ競う花には刺があり
度忘れを治す薬を置き忘れ
気のままに正論通す頑固者
結論は時が解決してくれる

八尾市 村上 ミツ子

声だして読むと見えないものも見え
同じテレビでお笑いも戦争も
言わない方が効果的だということも
正論が大手を振って歩けない

八尾市 高杉 千歩

戦争の闇深くして桜散る
年金を大事に遣うパンの耳
新札と香囊袋欠かせない
玄関もトイレも部屋も花ざかり

八尾市 宮西 弥生

花便り合格便り舞う出費
少子化の背にのしかかる荷の重さ
花びらが舞う人生の裏おもて
いつまでの炎か今日を燃えつくす

相生市 中塚 礎石

点滴に合わせて上げるお題目
無色にはなれずいろんな旗を振り
押し売りの声を留守居が聞き流す
仏飯を下げ晩飯に足す独り

尼崎市 山田 耕治

賞状が掛かった部屋で待たされる
ちらと見た友のおしゃれが気に掛かり
凶引いて顔見合わせている二人
雨の音聞いていますと書く手紙

尼崎市 軸丸勝巳

おぼろなる恩人見舞う里帰り(掃部 4句)

歛の音網曳く声もない故郷

喘ぎつつ語るに友は吸入器

新札に替えて仏に無沙汰詫び

伊丹市 山崎君子

サクラ咲く受験やつれの頬ゆるむ

散る桜七つボタンの彼憶う

シクラメン最後の蕾夢残し

浮き沈み八十年を生きぬいて

川西市 西内朋月

お茶の間で戦の模様見ていれる

飲めぬのにつきあいをしてくれる友

秀才の友の計を知る死亡欄

いい知恵が出ず鉛筆を削っている

神戸市 池田善守

長風呂に一声くれるひとがいる

今日もまた昨日と同じありがたや

同じ石に二度もつまずくめぐりあい

腹脂肪また増えたねとズボン言う

神戸市 山口美穂

弱肉強食 地球をアメリカが食べる

次々に話とんでく長電話

桃満開 お庭の春をひとり占め

忘れ上手を誰も誉めてはくれません

神戸市 木村貴代子

浮き沈みあつて世の中回つてゐる

内定の電話に母も最敬礼

バイトした経験ビラは皆もらう

橋ひとつアジアにかける奨学金

西宮市 井上松煙

おにぎりや鯉と分け合い春うらら

春風 花の命に不粋なり

ボランティア見られてないとか精がない

杖になり梃子にもなつて二人連れ

西宮市 亀岡哲子

男前ばかりでドラマつまらない

生きてきて皆優等生のクラス会

木洩れ日を浮かべ一人のティーカップ

幸せはさくら穴場の側に住む

西宮市 刈田泰司

指なめて辞書ひかないでお父さん

十指まだ動く幸せ軍手干す

指先まで比べてはしゃぐ主婦の旅

透析の暦がめぐる冬の指

西宮市 菊池トミエ

海亀の子は一斉に沖に出る

砂浜で名も無い奇麗な貝拾う

良く眠るまさか居眠り症候群

灰皿にされて湯のみが不平言う

姫路市 古川 奮 水

難関の新生活へファンファーレ

キャンパスのなかに見付けた国訛り

昼バスで東海道の花見する

霞ヶ関カーテン下ろし静かなり

檀原市 居 谷 真理子

仕舞風呂今日一日の人の恩

もう今はしみじみと聴くビートルズ

不機嫌な下戸にすすめる花林糖

二人来て硫黄の匂いに染まる宿

大和郡山市 坊 農 柳 弘

大道に恥じぬ気概の米作り

晴耕雨読あじさい寺でする写経

柿の葉のみどり眩しい雨宿り

環境美化地球に誓うリサイクル

和歌山市 古久保 和 子

免許更新 身分証明ぐらいいには

にんげんの臭いむんむん古本屋

新しい枕に首が定まらぬ

団体さんが通る濁点まき散らし

和歌山市 榎 原 公 子

上手気も嘘つけもなくすもも咲く

ITが勝者の顔で唆す

手引書のページあかんべし給うな

争いは嫌い武蔵は遠慮する

和歌山市 山 口 三千子

人事と思った古希に追いつかれ

終着へ蛇行しながら行く余生

途中下車出来ず明日の米を研ぐ

古希となり自問自答の回想譜

和歌山市 宮 本 三喜夫

桜散る無情の雨を恨みます

本心でものを言えない立場です

ヤット慣れこれからの時配置替え

騙しあう世界には駄目平和なし

鳥取県 石 尾 かつ乃

飲み仲間財布の中身比べ合い

老いてまだ捨てたらあかん好奇心

折り返し点から転ぶ事しばし

得手勝手 人間様の花の四季

鳥取県 黒 田 くに子

採用通知はずんだ足が宙を舞う

働き蜂のお酒大目に見てあげる

涙つば涸れない母の苦労性

ブランコの夢ははるかな沖へこぐ

鳥取県 国 森 武 子

魔術師のような指先和紙の花

古い家障子張りかえ生き返り

力ある恩師の言葉忘れない

酒好きの墓に時々酒ビール

鳥取県 西原 艶子

憎しみへ地球戦火に荒される
ほんものの命が軽く壊される
戦場の生々しさがくる茶の間
戦争の余波が灯油へ押し寄せる

鳥取県 吉田 孔美子

しみりとベットの通夜をした話
ベット医は夫の病院より近い
嫁さんが身籠るベット一大事
燃える恋三万円で処理された

鳥取県 羽津川 公乃

最後かも知れぬ記念樹夫と選る
何か変 脳が冬眠したまんま
笑い過ぎ悲しくなつてまた笑う
いい返事欲しくて世辞のありつたけ

鳥取県 村上 信子

窓あけて助けてくれる神を待つ
じゅんじゅんに子等が巣立つて部屋があき
味噌汁のうまさ亡母には追いつけぬ
厚化粧とれば貧しい顔になり

鳥取県 原 みさを

元気でさえあれば話せるまた逢える
来年は見ぬかも知れぬ花の雨
地球儀の向こう側にも飛火する
四十人の盗賊つれてそろい踏み

鳥取県 上田 俊路

わたくしの後ろで散っていくさくら
左遷地の桜に明かす胸の内
介護するわが子忘れた母を抱く
ジョークではなくバツサリと首切られ

鳥取県 岩崎 みさ江

千年の命を和紙に教えられ
反論の思いに動くのど仏
花こぶし一挙にはずす冬構え
母の皺わたしが彫ったかもしれぬ

鳥取県 西沖 彰雄

花一杯ころ美人の住む家か
満開の桜仏間の障子開け
明日は明日今日恙なし缶ビール
弱音吐く吐けば少しは気が楽に

鳥取市 富山 檳榔樹

ちっけな善との出会いに満足す
ぶきつちよで野暮だと言われ孤独感
野良着脱ぎ湯上がり妻悩ましい
揺さぶつて心の染みが浮く思い

鳥取市 杉本 孝男

名門の誇りが鼻についてくる
長生きに午後の昼寝が葉なり
虫けらもきらり輝き生きている
ひたむきさプロより球児好きになる

鳥取市 春 木 圭一郎

心配性だから友達多くいる
生き物はみんな心配性なのだ
心配はいらぬ保険に入つとる
心配が創意工夫を加速する

鳥取市 福 田 登 美

学校のチャイムに心洗われる
重い荷があるから心張っている
友達と笑えば胸も腹も空く
明日もまた気負わず生きる歯を磨く

鳥取市 加 藤 茶 人

戦争かゲームかテレビ見る茶の間
愛なんて三日で冷める金が好き
道ばたの花に四季あり日本好き
夢のある暮しは夢のまままで終え

鳥取市 宮 脇 道 子

愛冷めて憎悪に返る芥子の花
土に還る花びらも友探してる
老いた母 老いた娘と手をつなぐ
携帯を首にかけると子の電話

鳥取市 田 村 邦 昭

疑った眼はいつまでも開いたまま
つらかった雪を絵にして生きている
権力を手にしてからの無愛想
老いらくの坂には妻の手の温み

鳥取市 中 村 金 祥

野っ原を駆けて元氣だ塾嫌い
ガン告知するもしないも地獄です
アメリカが言えばイエスと言うばかり
曖昧な神に翻弄されている

鳥取市 前 田 一 枝

老木も野花のように生きて行く
ウグイスも梅の小枝で春うたう
草取りに母子草だけ取り残す
のし袋封も切らずに捨てていた

倉吉市 山 中 康 子

桜見が人の嵐に酔っている
飯づくりバトン渡した手がさみし
不器用の情こまやかな人間味
つむじ風おさまりそうな時間待ち

倉吉市 猪 川 由美子

自信作に酔うてはやおら酒を酌み
考え事は兎に角食べてからにする
過去の恋冷凍室にギューギューだ
コマーシャルに釣られて新種飲み比べ

倉吉市 最 上 和 枝

三姉妹咲いて妹が先に嫁く
冬眠の蛙どつきり鍬の音
七彩に踊る野菜に匂が無い
甘党の因果歯痛に攻められる

米子市 木村 春枝

一日をパン一切れが始動させ
逝く春を惜しみ静かな花見会
土蔵跡栄枯盛衰知る大樹
胸の奥本音呑み込む苦勞人

米子市 光井 玲子

私にはアンバランスの宝石よ
パソコンが走り置き去りにされている
進む世にとにかくにも縫りつく
動かない空気ストレス溜まり出す

米子市 永井 三津子

夫忘れ花咲かせてる立ち話
挫折のたび母の手紙を読み返す
春うららまだまだ女化粧する
拗ねた振り孫の小さな反抗期

島根県 伊藤 寿美

相槌が下手で仲間に入れない
取り敢えず棚から落ちたもの拾う
赤い服着て楽しみを買いに行く
誤解されぬように扉は開けておく

島根県 榊原 秀子

八分咲きそんな桜に夢を抱き
今年の私シャッター頼む花の下
たこ焼に呼び止められて買った土手
咲きました梅桃桜春です

島根県 森 茂美

卯酒なんだかんだと言つて飲み
学校へ行く気もないし職もない
人体は精密機械注油する
反戦デモ俺もひと役戦中派

島根県 安食 友子

気紛れな本がどっさり古机
ノーマークで歩くわたしは世捨て人
テレビシーン花火ではない閃光が
不戦敗かあかあ烏笑うなよ

出雲市 石倉 芙佐子

主婦してゐるなどと言つて関白殿
ひよんな所に御縁があつた根無し草
柄杓星掬えぬこともうんとある
冷凍魚言いたいこともあつたらに

出雲市 板垣 夢酔

芽がでたと内心叫び水をやる
色づいた奮祝つて蝶が舞う
異動時期椅子を揺すつてチャンス待つ
猪やまめ おいしかったと宿のお湯

出雲市 小玉 満江

うつむいて反省をするシクラメン
散らかした言葉を拾う一人ぼち
戦争へ外地勤務の子を案じ
モンペはく女が見せた底力

出雲市 伊藤 玲子

哀しくて剥く芋の皮厚くなる
まだ用があつて生かされ菜を洗う
お祈りをする手奇麗に洗つておく
よいいな事言わぬさっぱりした背骨

出雲市 岡 あきら

反骨の虫もだんだん老いてくる
日に一度鏡に会つて確かめる
朝やけの空真つ二つ飛行機雲
フセインも肴になつて花の下

出雲市 竹 治 ちかし

平凡な暮らしの中で見る戦
想い出を妻と共有して老いる
幸せはこれかと思う床の中
犯してはならぬ互いの予定表

出雲市 久 谷 まこと

手探りで歩いた事もある八十路
褒め言葉浮かれすぎないように聞く
右左見ては言いたい言葉呑む
一言が胸にささった苦いお茶

松江市 小 川 注 湖

酒一合人生語りはじめます
マンシヨンのお隣さんは夜遅い
噂話人傷つけて飛んで行く
裸婦像の尻も端整彫つてある

松江市 三 島 湊 丘

挫けない陽はまた昇るのを信じ
ベースダウンしろと右脳が拗ねている
もう泣かぬ泣いても誰も差し伸べぬ
免疫ができ中傷も馬耳東風

松江市 佐野木 みえ

土に輪を大きく書いた孤独な日
怪しいな後姿に影がある
橋のない川へ鮭の子放流す
二百年しだれ桜も息をつぐ

松江市 川 本 畔

夢の中遠くとおくで鳴る電話
病み上がり手には受話器が重すぎる
耳打ちの噂も聞いて花見かな
ほどほどに屈伸しては生きている

岡山県 小 林 妻 子

馴れ合うと真つ暗闇の穴の底
アワダチソウお前は不法入国者
借りものの命尻尾など生やし
酒吞まぬ大工の裏話はずむ

岡山県 山 本 玉 恵

終点が必ずあるを忘れてた
死ぬまでは女でいたい欲つぱり
二の足を踏むなと風が背を押す
良い顔で通したひと日にくたびれる

岡山県 福原悦子

こぼれ種命ひとつが生きている
洗濯機家族が泡で洗われる
勝ち負けは言わない母が居てくれる
遠距離もいとわず送る里の味

岡山市 井上柳五郎

毒舌でいつも周りを傷つける
妻好みに矯正された定年後
菓子箱が動きもめごとけりがつき
マスコミの評価が決める流行語

岡山市 川端柳子

いまだきの女になれぬからなやみ
モダニズム犬の着替えに手間が入り
凭れると折れそうな樹に遅い春
お出掛けはいずこ装い晴れ晴れと

倉敷市 井上富子

ふんわりと木綿の味のする田舎
せせらぎが唄う優雅な春の歌
DNA頑固を継いでいる次男
集団自殺みんなで死ねば恐くない

広島県 福島万年

アンチ巨人もゴジラに送る大声援
電柱が狭い歩道にでんと立つ
耳しいの母を話の真ん中に
頂きます合掌の手が揃う朝

竹原市 正畑半覚

十二時間勤務くらいは当たり前
まっすぐにすすめば青い鳥が待つ
人生を逃げると鬼が追ってくる
愛されている人間を信じてる



(つづき)

川崎市 浦野昭志

病んでからはじめて学ぶ食事法
旅立った師の厳しさを懐かしむ
ほろ酔いの約束重くのしかかる

日高市 根岸方子

国債が我が家に欲しい春四月
汚れ役あなたの愛があればこそ
無投票停滞続く前ぶれか

原稿募集

8月号掲載の同人の原稿を募ります。テーマは「戦争と私」。終戦後58回目の夏を迎えるようになって、イラク戦争での市民の姿に当時が甦ります。広く戦争にまつわるエッセーのご応募をお待ちしています。
締切は6月15日 400字詰原稿用紙一枚半(二枚(600字(800字) 本社事務所宛
ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

自選集

橘 高 薫 風

春の風首は載つてゐるだけのよう
イラク燃ゆ赤いネクタイのモーゼ
雪の浅間嬌恋村や軽井沢
老いぬれば狼の尾を巻くごとし
魂魄を天地に分ち香華かな

小 林 由多香

喜寿という節目新たな欲が湧く
妥協点見出だす腹のさぐり合い
考えておくと言うから脈がある
父という仕事の鬼に支えられ
太陽のぬくもりもうふとん干す

斉 藤 昴

しつとりと土と親しむ足の裏
いい村だ野球の子等の声弾む
ガラス細工 一途にいのち吹き込んで
宝石の姿で飯が炊き上がる
桜剪定木登り上手だと言われ

田 口 虹 汀

聴雨堂出ればお山は雨となり
吉野ヶ里までは小雨で済んだけど
水府さんの孫の披講を山で聴き
年嵩で僕が貰った竹細工
カルシウム渡せば僕の役は済み

竹 内 紫 鏑

巧拙を問わず空襲の絵を募り
石綿を炉に巻く技師の不面目(発がん性判明)
グライNDERの火花で鋼種告げる芸
割箸は死なず砕いて手漉き紙
立ち上げてやり孝行をするメール

田 中 正 坊

ニーハオと天安門に迎えられ(北京再訪)
侵略の古傷うずく記念館
頭垂れたたずむ無名烈士の碑
迎春花 故宮の空は晴れ渡り
輪タクで胡同めぐり春うらら

玉置重人

なんべんもめがねさがしているマンガ
三猿と決めて男の色褪せる
ハードルを見事に越えた春の絵馬
花吹雪おでんたこ焼き缶ビール
歳ですねん歳ですねんと身をかわす

恒松町紅

子育ての母が浮かんだ無人駅
あの頃はもう還らない無人駅
無人駅 闇米乗せたのは昔
亡妻の面影よぎる無人駅
戦友の声聞く今は無人駅

遠山可住

自動車が筆筒に代るお嫁入り
安心をボトルにつめて水が売れ
アイロンの余熱わたしもそんな歳
年金にすまぬが長生き面白し
仏さま二人のいのちいましばし

土橋螢

一年に一度は咲いて散るさくら
快調に煩惱だけが走りだす
人間の盾になりたい血が流れ
日本一の味噌汁を吸っている
花が散るときに笑ってさようなら

西田柳宏子

アルバムに歳をとらないママが好き
いつまでも見守り叱る亡父遺影
末っ子が昨日の怒り抱き続け
叱られることには馴れた口応え
怒りまだ消えず青筋二本出る

仁部四郎

リアリスト兼ニヒリスト独り酒
現実をうまく読んでるニヒリスト
新聞を二紙三時間ニヒリスト
新聞の投書は読まぬニヒリスト
ネクタイを吉凶揃えニヒリスト

野村太茂津

青葉若葉の林から出る破戒僧
作戦を見抜いたらしい目が光る
孫に肩揉ませ君が代叩き込む
昔々黄砂の向こう砂嵐
散らかった部屋でなければ落ち着けぬ

波多野五楽庵

恥ろうて雪のペールの赤椿
雪抱いて彼岸桜のいま少し
ジンクスに逆らい夜の爪を截る
過去と会う少しひしゃげた窓ガラス
最後の芸は土下座するよりほかにない

みどりを吸うて明日のスタミナ老いの夢

藤井明朗

個人の身勝手は和平を妨げる

善徳を積んで不況を押し返そう

大国に押されフセイン悔い残す

再会を約し別れの花吹雪

藤村ノ女

昂りが少なくなつた老いの坂

女かなこんがりやいている卒寿

コンピニで足りる食事も寂しいな

おでんことととても優しい顔になる

雨の日を老婆ゆつくり豆を炊く

芳地狸村

さい銭に偲ぶ地宮の柩あと(定陵)

衛兵の交代劇に見る誇り(北京4句)

皮だけの北京ダックに味がある

無灯火の自転車こわい夜の街

夢を見る天安門の点灯飾

宮口笛生

入院五日 白内障の休肝日

白内障手術ばかりの四人部屋

病室で食う三食の味けなさ

良く見える手術医学に感謝する

退院の早速うまい酒をのむ

叛かれた失意羽ばたく夜光虫

森下愛論

春の彩花の心と戯れる

人間の怖さへ自信ない座禅

湯の花を入れて私を浮かばせる

かたくなに自問自答の孤独感

八木千代

そのたびに冬を破つて椿咲く

ストーブよカイロよ世話になりました

柔らかく暦をめくる風いでいる

どの風も凌ぎこの世は花曇り

向こう岸も桜小さな橋渡る

八十田洞庵

馬酔木の花可憐の中に秘めた毒

野草にも原野が纏う晴着あり

花筏大川のパフォーマンスか

分別が欲しい魔性の声高よ

シナリオはその日のために抱いている

両川洋々

春や春政治不信はいつ解ける

ベアゼロでいいさ首だけつなれば

亡命も神は見えて見ぬ振りをされ

自爆テロこれも愛国心ですか

僕だけがムンクの叫び声を聞く

阿 萬 萬 的

隠しても駄目よと妻の目が笑う
無為無策ごろりと昼寝の癖がつき
口数が減つてうとうと老夫婦
プライドもはやけて八十路坂半ば
自分と自分を試されました波の音

石 川 侃 流 洞

金將軍の叩く手おちよくる音がする
フセイン宮殿の炭小屋核が見付からず
発泡酒別にけちつたわけでなし
迂回路開通旧道車の音が消え
チワワに洋服着せてお伴に連れ歩き

板 尾 岳 人

ひよつとしてひよつとするかも知れぬ恋
雨降れば雨に似合つた恋をして
我が恋は相合傘で少しだけ
土砂降りへ掴みそこねた恋少し
ブランコに揺られて奪う恋ありき

奥 田 み つ 子

掬つてもすくつても灰汁きりがいい
浮き雲に明日を託してみるとする
たのしきもの苦しきものよ ひ・と・り
ひらひらと散つた昨日はもう追わず
胸底に今も消えない人が棲む

河 井 庸 佑

父の日も暮しのリズム変えぬ父
よく喋る男寡黙になる無気味
灯を点し亡母に悩みを打明ける
むずかしい石を打たれて読み切れぬ
名作を辿つてしのお桜桃忌

川 島 諷 云 児

極楽はまだまだ遠い旅まくら
逆転もある人生を信じよう
愚痴なんてよそうよ男廃るから
生きていることの楽しさ難しさ
一日を閉じる日記は悔いばかり

木 村 あ き ら

生き残るために火中の栗拾う
花びらが野点茶碗の中に浮く
闘志満々スタートラインにある男
紫陽花が一際映える雨の午後
片袖の机で定年やつてくる

工 藤 吟 笑

ローン背に今開店のテープ切る
石屋さん観音様を尻に敷く
近道をするとか伏兵待っている
欲のない願いで神の目にとまり
来てやつた貰うてやつたで仲がよい

黒川紫香

おじぎした相手を少し振り返る
熱引いた朝のお粥がまた旨い
ちよこまかと客の私を覗きに來
早立ちへみそ汁熱いてんこもり
人生にいろいろあってもう九十五

小西雄々

バツカスの誘いへ期待する愚か
人かばって人格を練るいい予感
悔恨へその都度練ったキリギリス
戦争のニュース弾きず疼きだす
花回廊凍蝶舞って疑似演技

河内天笑

春が来てさくらが咲いて散りにけり
古稀の顔これかと鏡のぞきこみ
喫煙所棕櫚の葉つばがけむたそう
わたくしも猫も金魚もやや太め
しまいまで聞いてあげます負け惜しみ

訂正とお詫び

5月号に自選集月原宵明氏の句が間違つて、川柳塔
P7上段に掲載されました。訂正してお詫びいたし
ます。

編集部

太田市制施行五十五周年記念

第13回「太平記の里」全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市行政管理公社・同市川柳協会
後援 太田市教育委員会・社全日本川柳協会ほか
日時 11月30日(日) 9時30分から 締切11時30分
会場 太田市福祉会館(TEL0276-4518291)
東武鉄道伊勢崎線太田駅南口下車徒歩10分

第一部(当日参加者)

課題及び選者・各題2句詠とし表現方法自由(但し新作

「好き勝手」今川 乱魚・「人間」川俣 喜猿

「登る」竹本瓢太郎・「秘密」荻原 柳絮

「途中」成田 弧舟・「リング」田中寿々夢

「子供」太田紀伊子・「荷物」てじま晩秋

特別課題「世話」羽田桐柳

参加費 3000円(昼食・記念品・発表誌共)

第二部(郵送での参加者)

宿題 「叱る」選者Ⅱ斎藤大雄(北海道) 大野風柳(新潟)

関 水華(神奈川県) 西来みわ(東京) 橘高薫風(大阪)

磯野いさむ(大阪) 山本翠公(大阪) 小松原爽介(兵庫)

吉岡龍城(熊本)

応募方法 2句詠・参加費1000円を添えて郵送。

第一部、第二部の特選句中、最優秀句の句碑建立。

前夜祭(5000円) 出席・宿泊の方はお申込み下さい。

締切 9月30日(火) 当日消印有効

投句・申込・問合せ 〒373-0851 群馬県太田市飯田町818

「太平記の里」川柳大会係(TEL0276-4518291)

水煙抄

奥田みつ子選

八尾市 松葉君江

わんぱくに人の痛みを叩きこむ
不可能と知りつつ夢を追いかける
荒波をいくつ越えたか丸い背な
率直に言つて信頼とりもどす
豊かさに馴れてやさしさ忘れられ
ゆつくりとねじ巻き戻す露天風呂

泉佐野市 備後 三代子

佇めば天の桜に地のさくら
ライトアップ消して夜桜吾のもの
春風に老境の身の置きどころ
お浄土はこんなところか花吹雪
花よりはだんご花見の京御膳
母よりも姑に似てきて苦笑い

大阪市 尾崎黄紅

いたずらな神が扉を少し開け
製本は明治書棚の守り神

刺ぬきにきてくれる友ありがたし
地団駄を踏んで確かに負けました
男一匹そんな啖呵はもう吐けず
ふるさとの土塀にボクの十二歳

宇部市 高山清子

二度童子母は無心に童歌
例えばの話でチクリ傷に触れ
欠席の電話へ咳を二度三度
寝たきりの母へ桜の小枝見せ
立て板に水 嘘のつなぎ目解らない
空しさは喜びわかつ夫遺影

岡山県 国米さくゑ

身に余るお言葉妻の手に分ける
合掌を解けば欲しがる手に戻る
どん底で拾うほんとの人間愛
行くあてのある倅せな靴の艶
太陽と仲良し鍬がよく遊ぶ

鳥取県 西垣 美知子

精一杯生きる両手を陽にかざす
三面鏡若い若いとふいて見る
腰低く暮していけと亡母の声
澄みきった水です笑顔だけ映す
香たいて亡母と対話の部屋にいる

東京都 やまぐち 珠美

しあわせに慣れてわずかに悲を求め
清潔な街が指紋を切りはなす
絶対を約束させて友が減る
かなしみに慣れてほのかな幸を得る
連れだつて重き靴曳く男たち

北九州市 岡田 幸生

これからが本番余生光らせる
娘を持たぬ淋しさふつと洩らす妻
一の矢二の矢妻の舌鋒侮れず
蜜の無い花をくすぐる蝶の舞
ヤング向きセンスで老舗甦る

藤井寺市 若松 雅枝

木蓮が咲いたと里の母が招ぶ
頑固さを貫く父の正義感
労わつて夫婦の絆深めあう
誤解とけ月も明るさ増してくる
煮魚を食べさす姑へ遅桜

日立市 加藤 権悟
父さんと言われたことのないピエロ
来た道を独り影法師と語る

望郷の酌めば山河は遥かなり
肩書きを捨てると丸くなる風だ
ペンペン草だつていのちの歌がある

岐阜市 平野 あずま

地球病み神のカルテが届かない
副作用怖い薬も宗教も
晩学のペンに替え芯詰めてある
アンコールしても聞こえぬ亡妻の歌
美人から注がれ盃はしやぎ出す

鳥取県 山下 節子

自分史の中に汚点が見えかくれ
隠してもびつたり当る母の勘
変身しても若さは戻らない
運命を変えたガラスの靴もある
続柄の中に気になる人が居る

大阪市 三浦 千津子

いい話株分けにして昨日今日
号令を心にかけて春立つ日
不揃いの子ですがみんな親思い
雛褒めて五目ちらしを持て成され
納弁の祝辞真心を戴く

花言葉 意中の人は馬の耳

唐津市 坂本 兵八郎

カラオケと風が妨害する花見

活花の若宗匠のきれいな手

初恋の押し花と遇うコンサイス

古木でも季節が来れば花も咲く

高知市 小川 てるみ

ときめいた昔を煽る春の風

ふるりの風が癒した挫折感

泣き切ってやっと女の喪が明ける

風穴をあけて心をリフレッシュ

土壇場で女が見せる底力

南国市 小原 圭二

仏壇に妻の好みの菓子がある

いさぎよく実も残さずに散る桜

包装紙でいねいにとるプレゼント

戦いのニュースに今日も春あらし

遠来の友を迎えて吟醸酒

今治市 塩路 よしみ

胸の鈴鳴らぬが乳房豊かなり

染み込んだ指の先まで藍の自負

歩道橋傘を斜めに譲り合い

芸のない妻にもあったいい笑い

虚も実も人生 生きるいろは坂

言えば良い言われて嬉し有難う

おだてにはすぐ乗りそうな軽い足

潤いと光が見えてくる画帳

追加した肥料分だけ花が増え

さりげなく動いた小鼻見届ける

今治市 野村 清美

残り火を誘うた風の好奇心

ペランダの青空ウツを吸い上げる

シャボン玉浮いた心を弾かれる

だんだんと子供になって行く余生

ひたすらに流れて海へたどりつく

愛媛県 花岡 順子

悲しみがあふれて心見失う

ああ言えばこう言い夫婦やってます

丸を書く癖が終生直らない

小さな花だけと思いの丈を咲く

簡単なノーと言う字をまだ書けぬ

島根県 松本 聖子

マイペース今日の運勢何とでる

水たまりゆがんだ顔が笑ってる

運だめし精一杯に押してみる

満天の光った星に聞いてみる

無言だがでも頼りたい息子です

鳥取市 山宮 愛恵

車座のジョークに笑い盛り上がり
春だから少し遠出を試みよう
人情の鍵は何時でも開けたまま
介護する爪だやさしく切っておく
ハードルの高い方から切り崩す

鳥取市 永原 昌鼓

笑うたび増える皺なら本望だ
イエローカード切られ胃袋慌て出す
心地よい言葉信じていた迂闊
飛躍するチャンスへ羽根を整える
古稀過ぎて自分の道をまだ探る

倉吉市 森川 あらた

振り向いてはしくて駄々をこねてみる
どしゃぶりの雨がこころを湿らせる
大声で叫ぶうっぶん吹き飛ばす
甘い物食べ過ぎ脳がとけている
口閉じる軽く見られてなるものか

米子市 足立 由美子

成長の暦に生きている童話
戦争を生中継で見せられる
引力に時に逆らいたく思う
間引かれた方が根性もっている
少しずつ過去を破って捨てている

鳥取県 澤 裕子

やわらかい笑顔に油断してしまう
臆病で雑魚の群れから飛び出せぬ
人生の節目に灰汁が浮いてくる
ストレスを癒してくれるわらべ歌
頂点に立って足もとと見失う

鳥取県 前坂 なお美

わくわくと引いたおみくじだったのに
睨んだら睨み返して仲なおり
結局はひとり相撲をとっていた
怒るより笑って許す処世術
なによりも無事な暮しを感謝する

鳥取県 平尾 菜美

吊橋を渡り山場を手に入れる
笑う日に備え水際歩いてる
ストレスを投げてる父は河川敷
手も足も出せぬ炎に耐えている
昇華せぬ夢が受けてる紙つぶて

鳥取県 奥田 保子

しあわせな時間止まってくれないか
しあわせは笑いについて回るとか
チャレンジは若さを保つ秘訣かも
雑草に生き抜く力教えられ
ロボットに近い人間多くなる

(裕子改め)

鳥取県 細田裕花

奈良市 乾春雄

平和だね我が子のようにペット抱き

山野草もてはやされて生きにくい

雑草の我慢強さが子に欲しい

ここ一番頼みの鬼が頼りない

飛びさりの笑顔で記念写真とる

鳥取県 福西茶子

奈良県 藤村重之

名水を飲んで堪忍袋締め

神々の怒号か海が荒れ狂う

茶でとおす下戸の二次会三次会

喜びの証目尻の皺の数

おぼろ月ベール菜の花にも着せて

和歌山市 内田結実

奈良県 江波正純

修正の自画像元氣取り戻す

母と子の距離に肩書邪魔になる

茶柱を飲み干し店子掛け合いに

フルツトマトお前も妥協したんだな

双生児ひと呼吸して名前呼び

田辺市 大峠可動

神戸市 山田婦美子

優しさは誰も語らず春の湖

一族の絆を解けば白と黒

偶さかの夢は無口で亡母のうた

灯で癒す男の傷も女の傷も

第一巻の終りと書いた遺書を持つ

夢を追う胸のトレモロ鳴りやまず

年金の小さな傘に老い二人

履きなれた靴が嵌った落し穴

産声が明日の扉をひろく開け

くすりより効いた寄せ書き抱きしめる

長持唄流れ旧家のお嫁入り

身の丈に合った穴掘り生きている

紙風船孫と一緒に跳んでいる

泣き顔のピエロの芸に癒される

おだやかに暮したあとの笑い皺

山笑い絵筆右脳をノックする

身の丈の暮らしの丈が削られる

まだ席を譲られるのになれてない

新車買うカタログの美女ついて来ず

羅針盤自前で持たぬ日本丸

生きていてくれて嬉しい母卒寿

いつまでも母は理想の中に住み

長生きも悲しく辛い老母を見る

明日あると思うからこそ生きられる

中心をずらして丸くなりきれず

神戸市 山 口 光 久

つり橋の上で風向き読んでいる
真綿より軽いプライド足枷に
自分史の憚るところメツキする
寡黙だがパンチのきいた父の皺
今日の愚痴三日月さんは理解する

神戸市 田 中 章 子

子を思う心子どもに教えられ
今になり亡父に聞きたいことばかり
殺し合う兵士みんなに母はいる
行けるだけ行こう青春切符手に
ユビキタス子らに教わることばかり

大阪市 升 成 好

メモ書きに小言も入れて妻の旅
片言の不満聞き出すママの膝
公園の隅語らいは恋模様
心配な顔も小出しに聞き上手
たんぽぽの絮は風待つチャンス待つ

大阪狭山市 羽田野 洋 介

色褪せた亡父の日記に本音聴く
自宅ではマナーを守る愛煙家
ブランドも人格までは飾れない
この世相反面教師多過ぎる
メールでは妻の顔色読み取れず

河内長野市 石 堂 潤 子

兄ちゃんが結び目握る縄電車
落武者の如く恋猫戻り来る
負けたなと思う拍手はサイレント
お隣の芝は覗かぬ天邪鬼
六分目の器で楽な息をする

堺 市 藤 井 一 二 三

天満橋もうこぼれそう通り抜け
河内弁も京都訛りも通り抜け
鍵握る男は笑顔絶やさない
思い出の村は優しい彩になり
花散らしの雨も風情の一つなり

吹田市 木 村 無 禄

腹黒でなくて良かった内視鏡
今年また一期一会の春に会う
痩せたくて痩せてる訳でない私
宝石に果敢なき愛を確かめる
閑居して夢幻に身を委ね

八尾市 平 川 幸 枝

開け放つしほんだ脳に春の風
銀座街 染井吉野は地味に咲く
木の瘤の小さなさくらみつけた
一年生明日を溜めてるほんのくぼ
食べ頃の豆腐みずから浮いてくる

京都市 清水英旺

一步二歩左に寄つて選挙する
都会慣れたタマちゃんの伸びたひげ
雨だけがショパンの世界奏でてる
NOWARの叫び砂漠にうずもれる
バス待ちの客の背に降る花吹雪

綾部市 藤田芳郎

年金も惚けも資格ができました
人斬った舌で愛だの神だのと
番組が終つて孫と斬り結ぶ
若返るチャンス還暦喜寿卒寿
セールスに居候だと言つておく

京都府 前上英一

栄転に應える椅子が硬すぎる
竿竹に妻のうつ干す梅雨晴れ間
親切が過ぎて居心地悪くなる
バーゲンの床に淑女の面が落ち
切り返す言葉さりと目的を射る

横浜市 近藤道子

映画ではない戦争を見るこわざ
さくら散る一つの悔いを残し散る
春の宵散ったさくらの悲鳴聞く
わっと散るさくらに男死ぬロマン
母逝つて小さな家ががらんどろ

横浜市 巖田かず枝

眠れない夜は眠らぬことにする
悪口は陰で言わないことにする
戦争はやめて花見にしませんか
断りもなしに増えてくしみと皺
成功の陰に運呼ぶ努力あり

横浜市 芦田鈴美

親父の背まだライバルを認めない
東京ドーム投げ込み広さ確かめる
穏やかに論し逸り気包み込む
手探りの竿が大物釣り上げる
飲むほどに獲物大きくなつてくる

東京都 井上つよし

趣味の木に小さな欲の芽が育ち
リハビリも花見がてらの松葉杖
闇米で命繋いで今日がある
壁に貼る禁酒 字ばかりうまくなり
華やかに旅の最後を飾りたい

秋田県 湊修水

義理あつて乗らねばならぬ石の舟
雪消えて老いの心に花が咲く
天国と言われてみればそのような
老い二人手漕ぎの舟で卒寿越し
年金の蝦蟇口欠伸ばかりする

岡山市 大森 純子

札幌市 三浦 強一

無事の民危めて何の民主化ぞ

テレビ切る今日はタカ派の解説者

かすみ草バラは近くて遠い人

ばら香るたとえその名がナズナでも

神戸市 両川 無限

鳥取県 平木 公子

いつの日か笑って母に謝ろう

だんだんと笑い袋が減ってゆく

優しさに触れると鬼がうろたえる

定年を節に魂うら返す

横浜市 川島 良子

怖いのは人間ですか神ですか

平穏な時間はながく続かない

ウォーキング只今脂肪燃焼中

親を看る話になると皆無口

高知県 桑名 孝雄

ダービーのロマン駿馬の揃い踏み

ゲートインすれば闘う貌になる

七十余年無事これ名馬褒めてやろ

馬なりで鞭は入れないゴール前

出雲市 加藤 スズコ

すれ違い会釈に犬も尻尾振る

ひたむきに追う夢がある今が好き

川一つ渡れば明日が見えて来る

最初はグー ジャンケンポンに老い元氣

まだ望みあるからげんこ飛んでくる

ふるさとに母健在の糸電話

犬の死へ天寿全うだと話す

風呂敷の柔軟性を見習おう

鳥取県 平木 公子

コウノトリ笑い袋も持って来た

雑草も視点変えれば美しい

雑草と折合いつける野菜畑

添えられた手書きのカード温かい

岸和田市 雪本 珠子

花晶今日はひととき蝶になる

最近猫が私のセラピスト

割り切ったつもりが余韻残ってる

旅先で心の空気入れ替える

池田市 多田 契子

勇気なくそこその場に居る私

シャンソンを気取らず唱える歳になり

雛祭りトーンダウンの男の子

拾う神在ると信じて今日も暮れ

八尾市 中島 春江

年寄の歩け歩けに山笑う

山里の静寂白き花辛夷

栄螺壺焼のの字に抜ける浜出店

遠足の列を呑み込む大仏殿

アルゼンチン 松井 美稚子

手から落ち本の音まで夢になる
片意地を磨り潰す日の胡麻の味
講演にねむりぐすりが入ってる
遠近のずれた眼鏡で思慕に酔う

高知県 近 森 功

思い出の続きを読んでいる枕
歩きぶり俺の真似する影法師
老松の白寿祝つてはさみ入れ
イラク戦テレビゲームのように見る

高知県 貞 岡 佐紀子

だんだんと疎遠になった針の穴
ブライドが星の数ほど星条旗
好奇心残り時間を神に聞く
いらいらを投げるとこだまして返る

高知県 百 田 幸

肩の荷をおろして足の萎えを知り
器用さはないが真面目に生きた道
交換をしたい部品もある体
毒舌に混った愛にホロリとし

愛媛県 黒 田 茂 代

お天気が変わり予定も向きを変え
永遠が無いからこの世いとおしい
ペーソスが包むひとりの夕御飯
同じ物見てもあなたは詩人の目

愛媛県 宮 本 末 子

嫁ぎゆくまでの父と子花まつり
今なれば返せたはずの父母の恩
平和とは花に呼ばれて呑むビール
菜畑にいればふわふわ空は青

府中市 馬 場 利 子

鯉のぼり隣の幸せ乗って来る
福の種まいて余生を生きのびる
花祭りわたし今日だけ仏教徒
星空の笑いがほしいひとりぼち

倉敷市 撰 喜 子

花から花蝶の生き方真似ている
おさがりの服に輝くランドセル
脇道にそれ人生の裏を知る
規格外そんな野菜に味がある

松江市 松 浦 登志子

安らかな死を願つてもところてん
山のかげ時を待つてるお月さん
深呼吸して輪の中へもぐりこむ
祖母の指みどりに染めて春を食べ

出雲市 荒 木 英 子

亡母が好く土手のよもぎが真つ盛り
日脚のび空の蒼さに弾む足
晴天に土手の散歩にうつ晴らす
晩学に励む心を弾ませる

安来市 原 煩悩児

嫁が来て春の輝き招き入れ
人間は愚か戦争繰り返す
妻と行く心経の旅京の街
いじらしくかばい合うてる嫁姑

島根県 菅 田 かつ子

踏まれても可憐な姿いぬふぐり
さようなら手をふるように散る桜
選挙カー当選からの無表情
部屋まるく掃いてさつさと花を見に

島根県 武 島 ちよえ

飾らない言葉の中にある温み
とりどりの花からパワー貰い受け
ひとつずつこなし心を軽くする
線一本きっちり引いてお付き合い

島根県 福 間 博 利

隅々がまだわからない処世術
うしろ姿見ないでおこう決算期
ほどほどに螺子がゆるんできた二人
旧交をあためました病院で

島根県 持 田 多輝子

運命を分けあう人を信じてる
親にさえ見せぬ涙を知る枕
孤独でも生きる支えの花手桶
紅引いて心の孤独そつと拭く

鳥取市 横 田 春 名

花の咲く音を心は語り合う
こっそりと憂い埋める場所探す
陰口を聞く耳ピンと立ってくる
薄幸な手本残して友は逝く

鳥取市 大 坪 天 涯

のびのびとハローワークで語る夢
一匹の悪魔が味方してくれる
運不運どこかにあった別れ道
切り札として溜めている良い言葉

鳥取市 森 美智代

春うらら舟漕ぎながら猫と居る
親類を近くに欲しい欲しくない
揺れながら渡った雨の長い橋
運不運 完走出来る日もあるよ

鳥取市 西 尾 敬之介

遊び惚け群を離れて迷い鳩
境内で落した硬貨拾えない
春眠をむさぼる子猫薄目あげ
点滴のリズム落して消えてゆく

鳥取市 河 田 のり代

六十余年花の下では昨日事
心溶け愚痴も悩みも花と散る
やつと来て花より団子気にかかる
ふみはずす浮かれた足に酔いがさめ

鳥取県 岡村孝明

不渡りを竹馬の友に助けられ
次の世へ先祖へ詫びてダム認め
合併の癌は役場の位置らしい
赤い糸歳を重ねて締め直す

倉吉市 青砥菊枝

沈丁花主なき庭に競い合う
春先の雨は亡父の涙かも
くすぶったままのけんかが眠らせぬ
不況などどこ吹く風のベットさま

倉吉市 前田喜美子

学歴も盾とならない不況風
華の喜寿人生ゲームまだ中途
少子化にはどめ下さい鬼子母神
錠剤を食後に飲んで今日も無事

倉吉市 大下智子

いつだってダムが助けてくれた水
ライバルがいないと力出てこない
良い返事が弾んですぐわかる
春近い山も畑も笑ってる

倉吉市 酒井美美子

ビール酒どちらでもいいけど夜が長い
ぬれねずみ着いた途端に雨上る
夕立の過ぎてこだわり持つて行き
初孫のこれからの世が案じられ

米子市 小塩智加恵

年金が待たれる四月祝う春
騙すより騙されてよし家訓です
へそくりを数える妻の笑顔よし
好みより高倉健の飲むビール

鳥取県 藤山弘子

赤い糸長すぎるのか結ばれぬ
もつれ糸なかなかとけぬこともある
迷ったら正面少しそれてみる
正面の視線しっかり受けとめる

鳥取県 岩崎和子

字が書ける指が動いた弾む朝
いい顔だ痛みの去った鏡前
生きている螺旋階段あえぎつつ
真白なカンバスに塗る心いろいろ

鳥取県 蔵本悦子

春よ春機嫌そこねて雪が舞う
整えて一気に春の顔になる
満開のサクラの下で脱皮する
一番に近い地球が遠くなる

鳥取県 吉田弘子

監督を透かしてみれば唯の人
カラフルに化粧直しの春の山
節高の指に隠れている涙
何もかもご破算にして姑介護

鳥取県 竹 森 富久江

人生の追ひ込みに余波まだ起こり

筋道がさわやかな風つれてくる

二馬力で越える峠の知恵ぶくろ

余念なく庭に踞める丸い背な

鳥取県 池 澤 大 鯨

草に寝る心のゆとり友がいる

草花の謙虚な姿芯通り

隙間さえあれば萌え出る草の意地

雑草のごとく生き雑草となる

鳥取県 西 原 真 一

安いお茶上手に入れて飲んでいる

友人がいない不安をラジオ消す

まじめすぎ心の痛みまで受ける

気を強くトラの湯のみに変えてみる

鳥取県 植 田 照 子

調子良く見えているけど犬と猿

母が居る錯覚誰も居ない家

夕立や布団取り込む他人の家

ろう梅も桃も芽ぶいて雛飾る

和歌山市 喜 田 准 一

忌憚ない意見が過ぎたわだかまり

句読点打ち損なっている余生

野良に出て励む男の広い肩

軽く言う医者診立てが気に掛り

和歌山県 森 下 順 子

靴下に男のおしゃれ覗かせる

履いているうちにぴったり赤い靴

私からあなたへ気持だけ包む

内祝い出来る仕合せかみしめる

和歌山県 辻 内 次 根

春の風皆と仲良くしたくなる

貧しさを寒く感じたことがない

一万円出ると言うからお呪い

積み残す今日を悔いてる昼の月

和歌山県 村 中 悦 男

タンポポの満開に遇う試歩の道

ライバル心持った魚は先ず釣られ

根まわしが効いて互いのほくそ笑み

どの母も子供に戦死させたくない

神戸市 木 村 忠 義

春と書くことで希望がわいてくる

いい花見ころの中もさくら咲く

老いたのか逃げるが勝ちをよく使う

うどん食う音は平和だなどと思う

神戸市 伊 勢 田 毅

消去法 候補者みんな消えてゆく

ひよつとして鷹かも知れぬ孫あやす

正論を吐く部下がいて苦労する

試着室妻の思案が長過ぎる

尼崎市 河津 正治

兵庫県 安達 厚

ノーベル賞夢見る卵腫が光る
平凡を神に祈った縁結び
磨かれた芸 人形に乗り移り
ドジ踏んで川の深さに身を晒す

伊丹市 延寿庵 野 龜

泪の数だけ人間強くなる
ひそやかに積んだ努力で自信つく
あみだ籤線の行方の運不運
鼻先でふっと消してゐる軽い嘘

川西市 井 本 清 山

ガン予防数すりゃどれか当りそう
緑茶飲み納豆食べて古い元氣
自作自演で今日のドラマを描く老後
忙しい人ほど早く来る返事

三田市 石 原 歳 子

お馴染みの顔触れ今日もかしましい
果物を眺めていると丸くなる
しゃがみこみ野道の花に虫めがね
美しい落葉もやがて土になる

姫路市 服 部 一 典

遠くなる耳亡妻の声近くなる
サングラス相手の顔をハッキリ見る
老いひとり人様の春樂しそう
大丈夫言つてほしくて血の検査

生きるのは楽しむためと思う日々
スーツより野良着でいたい老いの日々
人柄は不運な時につくられる
余生ですお役に立てば何なりと

大阪市 寺 井 弘 子

満開の桜に恥じる誤字の絵馬
ピカピカの夢でふくらむランドセル
反省は説法聞いたその日だけ
年相応に写った写真氣に入らず

大阪市 池 上 清 治

志いずこ大卒フリーター
孫のパスお礼詣りは三世代
合格の知らせ聞き手も甲高い
大吉のみくじ一年持ち歩く

大阪市 井 丸 昌 紀

幸せと言いつつそつと指隠す
十一を数えられぬと泣く息子
四月馬鹿少し本音も混じってる
君にだけ話すと言われ後ずさり

和泉市 千 葉 武

輝いた瞳に嘘を見抜かれる
あの世まで仮の姿で踊ろうか
買わないで得した気分株下落
毒少し飲んで妻の座守り抜く

和泉市 小坂 凡 英

その節は 聞いて溶けだすわだかまり
こだわりを捨てよと和尚繰り返す

日本列島桜桜で平和なり

ピアノひく孫へ気にするDNA

和泉市 横山 捷也

ほほえみを返す老女に女の香

沈丁花妻のベッドに窓を開け

ネジ少しゆるめ長生きするつもり

ハイヒールはいて娘に戻る保母

泉佐野市 稲葉 洋

お茶飲んでいくさのテレビ視る時代

大本営に似た情報の心理戦

携帯も免許も無いが生きている

エンドマーク アップになつてくるフィルム

柏原市 永浜 加津子

ピカピカの鰯に出会う幸もある

桐箱のへその緒抱いて母のこと

三叉路の魔力にかかり迷い道

菜を洗う桶に花びら春の夕

柏原市 伴 洋子

女々しさが男のランク下げていく

ランク付け親の資産がものを言う

厚かましい奴だがどこか憎めない

みゆき節さすがと思うファン層

交野市 田岡 九好

ぬるま湯に首までつかっている不安

きつちりと駐車禁止の前に止め

お茶の間で戦争を見る気の咎め

ぶつ切りのうどんのように言う首相

河内長野市 大西 文次

親の代から引き継いだ好奇心

浅学非才ととてもととても引き受ける

新緑が気にしてくれている余生

眠る子に抱き癖つけた里の母

河内長野市 木太久 正一

百歳を元気でいたい夢があり

古時計平和の春の甲子園

木蓮のいつもと違う散歩道

大発見家の近くの土筆摘み

岸和田市 森 元 ふみよ

短い亡母の手紙は詩の心

今となり逃がした恋の無限大

自分だけ解る符合の日記書く

狂言を通して観たい歳となり

岸和田市 亀井 皎月

ごさぶりが逃げきり陰で大笑す

妻からは料理習えとせめられる

蝸牛何時か大樹の頂きに

これでもかこれでまだかと株下落

堺市 萩野像山

豊中市 藤井則彦

春風に迷うことなく散る桜
わがミスと分かれば腹も立ちません
愛尽くし極めた母のデスマスク
くどくどと言った小言は効き目ない

堺市 河盛龍三

看貫へ乗るたび誓うダイエツト
燕の子我も我もと開く口
開いてた心気付かず通り過ぎ
年の功役に立ってる祭り事

吹田市 須磨活恵

チロチロと燃えて女をまだ捨てず
鬼の面外してしばし花の宴
花の下俤せそうな紙コップ
道ひとつ変えてうれしい風に逢う

吹田市 木下敏子

雑草に負けられません右の腕
いつまでも変らぬ友と春の詩
八起きめの優しい顔に見せた意地
庇いあいゆつくり登る古稀の坂

吹田市 二宮栄子

退院の嫁の一言泣かされる
長い留守仏に詫びる般若経
添寝の児案じ楽やら淋しくも
朝一番待てずに児等の声を聞く

いつの間に見事なダンスなさる妻
門灯に最敬礼の午前様
お見事ね分らないけど褒めておく
テロリスト良心までは砕けまい

富田林市 稲川恵勇

リストラの波に呑みたいぶし銀
恥をかきつづけて世間すこし見え
卒業の寄せ書き夢がふきこぼれ
歳重ね野心の牙も丸くなり

寝屋川市 岡本 勲

いるだけで楽しい人と桜餅
ちっぽけな夢を追いつつ老いを生き
牛歩でもいいさ近道などしない
月の雫に濡れて歩いた頃の夢

羽曳野市 森下一知

二の職へ握り直した妻の手を
手加減を覚えて汗を見失う
しくじりの場面ばかりがよみがえる
風呂が沸く文化の音がピーと鳴る

羽曳野市 永田章司

ライバルが心にもない世辞を言う
相談をかけてもらえる友をもち
ラッキーと一人つぶやきほくそ笑む
年金が物価動向直視させ

羽曳野市 吉村 久仁雄

隠し持つ野心仁王に見透かされ
生き様に静かに深く税の枷
人の機微の玉虫色を読み切れず
浮かぶ瀬を捨ててくつろぐ路地の花

羽曳野市 福田 悦子

赤飯を供えて亡母の誕生日

六月のおしゃれは傘の色と柄

長靴がはきたい孫へ雨の音

流行の波には乗らぬマイペース

東大阪市 田中 美弥子

サンフラワーで何年ぶりのさと帰り

澄み切った故郷の風に癒される

母はもう居ぬ故里のたたずまい

過疎にひとり母似のおばに会えました

東大阪市 今岡 真人

美しい言葉の裏にある野心

ストレスを消す羊羹を厚く切る

山の氣をもらって今日も生きのびる

傷心の子を待つ広い母の海

枚方市 二宮 紫鳳

ただたどしい孫の歩みにつくしんぼ

ブランコをこいで幼き日に還り

嫁迎えやとわかった姑心

お隣の息子夫婦においた距離

枚方市 大昇 隆広

あたふたとしかもアッサリ散る桜
グメンネで皆許し合う町の隅
崩れゆく敦煌仏が時を笑む
深呼吸の美味さに焦がれた山へ

藤井寺市 伊藤 アヤ子

受けとめて心かよわす夫婦道

ガラス越し吾子を見守る四つの目

噴水の音だけがする春休み

深呼吸すればためらい消えてゆく

箕面市 寺井 柳童

耳すまし酒のつぶやき聞く杜氏

退職の別れを惜しむ出会いの地

古時計マーチになつてリバイバル

マスクにも花粉肺炎砂嵐

八尾市 田中 トシエ

人生は長い短いシャツ洗う

定年後父は二階へ転勤す

ライバルがくれた真つ赤なバラの花

方言の対話の中に嘘はない

八尾市 西川 義明

老夫婦まあるくなった朝の顔

フルムーン湯上り妻の目は二十歳

振り向いて鏡に映すランドセル

夢と欲持っているから明日を待つ

草津市 久保和友
宮本武蔵の生家見てきた花の雨

小次郎のつばめはいない滝しぶき
生きのびた私 桜前線追いかける
クルド族とトルコで飲んだ旅もある

新潟県 高野不二

まだ母の思い出を言う三回忌
健康法信じて朝の水を呑む
揚げ足を取って国会今日も暮れ
酒煙草消費税なら納めてる

横浜市 秋元和可

戦争が信じられない花吹雪
春うらら油断している影法師
良妻の仮面を外すマイタイム
名刹を巡り心が洗われる

横浜市 金森徳三

老人と自覚をさせる季の移り
おいお茶 路で呼んでる販売機
年金の値下げ真綿でしまる首
あこがれの国大孫は下宿する

横浜市 長島亜希子

ポットさえ機種が違って使えない
花の下歩く相手は選ばない
同じものの食べているのに痩せられぬ
脳検査 歳相応で異常なし

横浜市 平達也
待った春 早速散歩車椅子

夫婦でもしゃべり過ぎないこと悟る
聞くだけの名酒を飲んで夢の酔い
通院日残り桜を車窓から

東京都 清原悦子

太陽に心の裏を照らされる
祭典の時だけ平和見えてくる
お茶の間で父が無邪気な顔になる
着飾ると何故か無口になってゆく

武蔵野市 亀井円女

今は唯きれいに枯れる事ばかり
まだ八十路夢はたつぷり涙もね
トランペットに老婆を嵌めたニニロツン
ほっこりとやさしい嫁のTEL嬉し

秋田県 秋野宏

孫一人爺の筋金抜いて去る
溪谷に言葉はいらぬ春の景
夢だけは宇宙サイズで持って生き
カボチャにも主食務めた過去がある

青森県 福士トキ

雪女 寝姿見せる庭の隅
雪礫何処へ投げたらいいですか
フキのとう摘んで今夜の酒の友
嘘一つついてみたい四月馬鹿

横浜市 布山嘉信

鳥取県 竹信照彦

花吹雪 諸行無常の舞を見せ
我が怒りコラム代弁してくれる
平凡をかみしめ花の種を蒔く

高槻市 安田忠子

飛行雲真赤な夕陽に吸いこまれ
やわらかい陽射しをうけて姑とお茶
昇格を蹴って気楽に平社員

八尾市 寺川はじむ

自信家の話半分聞いておく
ピカピカの夢を背負って春を待つ
騒がれてメジャーの笑顔するゴジラ

大阪府 高木道子

咲き誇る花に鉢が迷わされ
戦争はどちら勝つてもつらい春
晴耕も雨読もすごく疲れます

愛媛県 安野案山子

道沿いに咲いた善意のチューリップ
失恋の肩を濡らして春の雨
若者の指が飛ばしているメール

松江市 山根邦代

美容室出ればうきうき軽い足
ストレスを孫の笑顔にすくわれる
春の芽に出合い自然にありがとう

本当の戦争なのにコマージュラル
腰痛もおきる草取り春畑
あしたする事をメモして眠る春

尼崎市 古川正子

八分咲き桜トンネル娘と歩く
くち下手で褒める言葉のむつかしさ
紫陽花の日増しに伸びて対話する

堺市 柿花和夫

母さんも友達づくり入園式
入園式帰りは母の前に行く
戦車より駱駝が似合う砂漠道

尼崎市 桑原東園

今だから話すとビール注ぎ足して
ライバルの業績褒める通夜の席
連休の団地まばらに朝が来る

松江市 松本知恵子

幸せな顔で行き交う花の下
ふるさとで少女になつてすみれ摘む
嘘三つこぶしの白に戻れない

高槻市 執行稲子

履歴書に超健康を足して置く
またしても毒舌の鬼喉に住む
今更に千と千尋の画面追う

宜野湾市 杉谷 一栄
絵手紙をきつと下さるころ待ち

岩田 帶曾 孫健やかいい便り
急ぐことないと弱った足に言う

唐津市 岩崎 實

ともなわぬ体にしたきこと多し
しばらくは妻の寝息に合わせおり
掘りたての竹の子庭師庭に置く

香川県 向山 治延

れんげ田で寝ころがってるランドセル
歳聞かれ思わずなせる我が白髪
五月晴れ棚田の田植過疎の老い

尾道市 光吉 裕

乗るよりも押す役を選ぶ車椅子
ストレスを潰してぱっと晴らす闇
自己流の健康法で身の保全

府中市 岩本 雅代

土筆取り休耕田は花盛り
藪椿ボトリと落ちて悔い残す
四世代幸せ声が塀を越え

出雲市 梅 ミツエ

桜見て大きな声でありがとう
老いてなお指折り数え枕元
青い空鳥がよろこび舞っている

出雲市 川島 和歌子

嵐吹く春の足音窓に聞く
寺の鐘おにぎり美味い桜土手
隙間風カーテン揺れて覗く月

鳥取県 毛利 幸

歳重ね相性少しずれてくる
世の夫婦お互い合わせ生きている
後少しときめき欲しい六十路坂

鳥取市 岡田 信恵

優しさがにじみ出ている母の顔
言葉こそ人の心を傷つける
一言の優しい言葉友の愛

鳥取市 谷岡 清子

何事も笑ってすます耳となる
今日は今日忘れて明日の糧とする
イラクの子純な瞳がつきささる

鳥取市 山口 千代子

身の丈に合わぬ恋も縁の紅の糸
二つの命一つに束ね五十年
恋の歌唄う一時若返り

鳥取市 近藤 秋星

春哀し花と一緒に駆けて逃げ
菜の花を前に桜を背なに飲み
花見客狙い無粋な選挙カー

米子市 池尾保子

雑念を洗い流してひとり住む
嫁しゅうと互いにゆずり結ばれる
退院の幸せ配るお赤飯

米子市 猪森 スミエ

バランスは塩酢砂糖の匙加減
栄転でまた故郷が遠くなる
妖怪で町が栄えるVサイン

鳥取県 山岡久枝

旬の味春を彩り木の芽和え
新緑の心やさしくする匂い
ピンチ抜けしかと両手を合わせおり

鳥取県 橋谷静江

生き様を見せておきます子や孫に
目が見えぬ姑の弱さを胸で受け
庭に咲く椿へちよつとティータイム

和歌山市 橋爪 佐一

老いてから嘘をつく手も品が切れ
嘸めばかむほどに鰻のような妻
摺りガラスのおかげで夫婦円満に

和歌山市 根田 よしこ

青春を返してくれた桜貝
かたばみにしぶとさ学び生きていく
撃たれるな上手く逃げよとテレビ見る

奈良市 成橋邦柳

ひっそりと名もない花に春見つけ
シルバー席譲られ嬉しまた淋し
肩書きの付かぬ名刺の人となる

奈良市 田中賢治

ラブレター料金不足舞い戻り
仲良しの犬も子供で孫倒す
偽物は本物よりも数で勝ち

奈良市 中島公市

働けない身体になって生きる欲
歩行訓練共に苦行の友と我
介護され明るく生きる人の知恵

生駒市 小西 稔

春の日の眠いまなこに光る花
世の中のうまい話はおとし穴
一言で永いつきあい穴があき

奈良県 南海 美知夫

白黒でない灰色で答えとく
黒潮に乗って日本へ海の幸
わが影を追って目的地はすぐだ

篠山市 谷田 多美子

新酒とろり亡夫冥土で飲んでいる
桜花咲いて新酒に酔うて豊かなり
結び目の瘤すり切れた縄電車

三田市 辻 開子

姉は去り私の胸に姉がいる
せがまれて孫としりとりボケ防止
孫曾孫米寿祝いの豪華宴

兵庫県 黒崎 美紗子

宅配便思いもよらぬ温い花
花咲いてともに喜びわかちあい
上向いて歩くと自信ついてくる

兵庫県 岩本 美緒子

機械音痴なのにパソコン友となり
反戦で反米で無い老いおんな
公平にニュース見てます戦中派

大阪府 中村 忠敬

パラシュート開かぬ夢を見て寝汗
愛情で心のドアを開けさせた
儀式です枕許には川柳誌

大阪府 平井 露芳

手袋をはいて散歩は大手振り
防寒から日除け帽子の衣替え
雪国の土が見えたら春ですね

大阪府 辻本 登季子

戦中派カルチャースクールエブリディー

菜の花が食卓かざる春の宵

浮浪者の犬がオシャレな服着てる

河内長野市 内海 綾乃

子供達外で元気な声しない
寢床の中味噌の匂いで眼がさめる
我が家から桜見物最高です

岸和田市 堤 楯代

戦争が見えるチャンネル避けている
食べさせる二人羽織のもどかしさ
世話女房車ばかりはお客様

岸和田市 坂口 英雄

星条旗 星反戦の数に見え
よく笑う人には鬼も近寄れず
宝のように初孫抱いて娘来る

堺市 奥 時雄

まあ飲もう兄はいつでもそうだった
登校の顔ぶれ変り春となる
酔うほどに世界を論ず立ち飲み屋

摂津市 望月 遊美

頼り無い母の子頼もしく育ち
敗戦で異国へ財産置いたまま
戦争ゲーム化安全地帯で無責任

高石市 小島 百恵

新成人桜吹雪で送り出す

お花見のカラオケ誰も聞いてない

人生の乗り継ぎ切符買う貯金

高石市 小島 一輝

不揃いがふたつ並んで支えあう
窓際でリストラされる部下を見る
二番手がゆっくりほぐす力こぶ

高槻市 大崎 侑子

若作り後ろ姿は気にもせず
三面鏡背なの丸さに老いを見る
紙屑と思うに夫メモと言う

高槻市 浅田 憲夫

音痴だが一杯呑むと流暢に
茶目つ気で冷やかしたこと本気にし
居酒屋で同じ訛りが盛り上る

富田林市 古田 千華

桃色のおとめ椿は春謳う
それぞれの肩書とれて同期会
うち明けたうす桃色にほほ染めて

寝屋川市 中川 恵香

待ち合わせ春と一緒にカフェテラス
入学と卒業大人も繰り返す
道ばたの花も生き生き春の息

羽曳野市 濱口 フジ

口あけて桜吹雪を食べてみる
花の下見ながら食べる桜餅
花見来て思わず歌うさくらさくら

議員さん政治より金マジですか

枚方市 小川 良吉

悪夢消す朝の光で歩き出す

晩節を考え歩きこけました

枚方市 莊司 弘之

カタツムリ初志貫徹の這い進み

六十路過ぎまだ回り道歩いてる

志半ばで次の志

藤井寺市 鈴木 いさお

年金にベアとボーナスあったらな

ご利用は計画的にと白々し

万札も崩せば急ぎ足で去り

藤井寺市 喜島 芳江

辛い時親をやめたい時もある

取れるだけ取ってチョッピリ戻し税

惜しみつつ日めくりめくり明日を待つ

藤井寺市 吉田 喜代子

怒られた事がないのも不幸かも

祝い事嬉し寒しの懐手

大和路に金魚夏呼ぶセリの声

藤井寺市 西村 栄一

子の彩に溶けて老いなど忘れてる

いい夢をどうぞと温い羽根ブトン

住みついた虫にやさしい庭の土

藤井寺市 俣野 登志子

大阪府 桑田 ゆきの

夜更け道前行く一人なお恐い
料理より器を誉めて客帰る

受験子に背丈越された父の顔
イラク戦対岸の火事とも言えず

贅沢も節約もせずマイペース

老い母の菜食主義にある気骨

藤井寺市 増井 ヨシ枝

大阪府 藤井 郁代

人数の足りぬ時だけ呼びにくる

老人の知恵が役立ち嬉しくて

残されて彼岸の墓参梯子する

結び目も力加減で緩め合う

淋しくて素敵な笑顔についていく

家の内波風立てぬ魔法掛け

八尾市 脇 俊子

大阪府 野田 栄呼

喉越しを通るやさしさ知る歳に

ブッシュさん殺人罪になぜならぬ

一人居は声のする方すり寄って

西空に弥生満月万歩計

ささくれた心のトゲを土にうめ

ラーメンは肥るとスープ残す孫

八尾市 笹倉 ひろし

大阪府 東 文江

リストラと何でも省く世を恨み

老顔に生きるよろこびかくせない

顔見えず開くメールの黒い罨

しかられるけれどばあちゃん大好きや

少子化が名遊園地消して行く

うれしいな太陽あびて畑仕事

大阪府 小栢 こずえ

静岡県 中西 雅

距離おいて静かに見てるひな納め

メモしてもまた問い正す予定表

憎まれた姑の介護をする笑顔

タラップを降りる人抱く血の絆

こもりがちの友を連れだす春の野辺

三猿に撤した家族輪が大きい

大阪府 畑 中 節子

横浜市 石原 三郎

波しぶき歌声はずむ舟下り

青い鳥家にいるのに気がつかぬ

会席に揺り鉢で出るところ汁

ぶつかってご免一言気が和む

鍬始め庭の草引く春日和

花の下孤独楽しむワンカップ

(浦野昭志・根岸方子さんの句は49頁に掲載しています)

麻生路郎物語

(18)

— キング喫茶店 —

東 野 大 八

庶民大衆の誤れる川柳観を正し、純正川柳の啓蒙を目指し『川柳雑誌』は巻を重ねた。

句席における熱っぽい路郎の川柳講演は、東に西にの川柳行脚をもつて拡大され、川柳一筋に燃焼する路郎の川柳メモは、昭和四年以降過密の度を加え、昭和六年以降戦争まで山雨楼メモは真黒に塗り潰されている。

〔昭和五年〕 〓筆者注・主要メモのみに限定した〓

○二柳子、緑雨と改号・山雨楼同人参加。

○裏日本から函館へ川柳行脚・第二回海峡親善大会出席。三太郎、錦浪らと帰途白河、東京、横浜に寄り多くの柳人と歓談。西念寺の柳雨忘に出席。

○十一月十四日河盛芦村翁逝去、行年65歳—水府いわく「関西川柳社創設当時奮った人、文字の美しい謹厳な士であった」半文銭か

らも「僕も寂しい」との便りがあつた。

○十二月十六日三太郎来訪、徹宵痛飲。

〔昭和六年〕 —堺市立六民病院事務長

—文学を軽んじ馬で裾野ゆく—

—恋の罫あめの眼だらうか眼だらうか

—酒とろりとろり大空のころかも

—十二月うれしい風も少し吹け

○四月中入院・病気は私の肉体的慰安也

○「川柳のぞき」出版・路郎選句鳥平画

○八月三日付朝日新聞「天声人語」に川柳の句を全段でもつて紹介される

○十月四日京都川柳社創立二十周年記念大会に出席。畝傍、飛鳥に遊ぶ

○松丘町二・三好革郎同人辞退

〔昭和七年〕 純喫茶キング開店（玉出本通り三）

○新年号巻頭に「われ子規たらん」と題し—

代抱負を語らんとしたところ、タイトルをみて妻が愕いてとめた。葎乃女史本社新春句会で「情熱の句に就いて」処女講演

○神戸新年句会で講演「爆弾を抱えて来る」根本紋太氏社規により客員名簿より抜く

○四月金沢の産業観光博記念大会出席

○「川柳漫画行進曲」弘文堂より発刊

○関東・関西を一行四十名で行脚

○川柳百号記念「川柳の夕」朝日会館で開催

講演三太郎・水府・路郎・聴衆一千余人

○六月号より武玉川研究論議。省一・東魚・秋農屋

秋農屋

○関東川柳団歓迎大会で挨拶し「詩としての川柳の向上。事物にとらわれた川柳を遂うことを排し、生活感をとり入れた、自分の将来の指針はそれだ」と叫ぶ

○九日青田代議士秘書を兼務（二年後辞任）

○七月六日浅井五葉逝く

〔昭和八年〕

○一月号川柳雑誌創刊十周年記念特集・二三〇頁の豪華版。光頭会支部（永田里十九）川維奉

天支部（江戸みつる）八東支部（平塚乱笑）

野山支部（野山修二）玉造支部（清水白柳子）

今治支部（渡辺晩重）今里支部（吉田水車）

いづれも新設

○六厘坊25回忌記念大会（道頓堀クラブ）

○八月「喫茶新聞」毎月一回発行・麻生幸一

郎(路郎)主宰(洋飲機関新聞)これは路郎が同業組合の副組合長および大阪府料飲業組合連合会役員の立場で企画された

○十月川維東京句会開催(浅草並木俱樂部)剣花坊、久良伎、三面子百五十人出席

○九月二十六日愚院、乱耽句集「潮騒」刊行記念句会(端の坊)不朽洞発行

○十一月川維同人社友会で従来の社友制を廃し一列同人とし、旧社友を社務進行上評議員と称し、旧同人を理事と称することにした。

(理事・翠夢・紀太・草葉・水車・かおる・里十九・二南・翠人・新水・閑生・雅幽・万よし)編集局緑雨・丹路・町二・山雨楼・鶴峰・霞乃・乱耽

○路郎先生玉出洋飲食同業組合の組合長に推薦さる。また玉出衛生組合評議員当選

○「俺に似よ俺に似るなと子进行」文芸春秋一月号川柳名吟の中に選ばれる

〔昭和九年〕川維事務所住吉区平野町西之町八三・橋本緑雨方に移す

○大毎にさかんに随筆を寄す

○一月きやり十五周年記念号に「川柳作家十五戒」を寄稿す多説多作せよ、選者を選べ、右顧左眄するな、技巧に走るな、自惚れ禁物、器用で作句するな、努力を忘れるな、句なき作家となるな、自己を掘り下げよ、句の非凡を目ざせ、句で争え、句を捨てよ、識者を怖

れよ、生命ある句を創れ、一句を遺せ

○新居浜支部(越智虹子)大鉄支部(植山九太)伯耆支部(湯原美笑)畿川第二支部(尾添好郎)いずれも新設

○JOBKから「満洲建国祭に因んだ放送座談会」に出席。(大阪市財界代表等)

○三月九日鮮満地方へ川柳行脚・京城・平壤・安東・奉天・新京・ハルビン・鞍山・大連・撫順・熱河を巡歴・三月二十九日帰阪

○四月きやり創立十五周年記念大会出席・四国支部聯合川柳大会(今迄)出席

○六月BKから「川柳披露と合評」の放送路郎、草葉、乱耽、新水、豆秋、山雨楼・水府雲雀、小太郎、舟人、夢路、文久等が出席

○十一月川維事務所移転、大阪市天王寺区上汐町一の五一増位打柳方「たまむし」(通巻81号で終刊)川維と合流。「漫画と川柳」富永興文堂から出版

〔昭和十年〕路郎四十八歳

○三男一歩学童に上る。四男洋死去

○山雨楼東京鉄道工務局へ転勤

○四月大阪朝日に「川柳の親心」執筆。近刊の「大阪人物誌」に私が両親にともなわれて大阪に出たように書いてあるが:

○二月号から日本名所名物川柳連載・雀郎選しげを画。十一月号にとんで四国の巻に五健選ならびに画

○一月前総務橋本緑雨祝賀の夕功労章授与

○行人会支部(平井春光)十三支部(浅野牧人)開設

○三月二十六日満洲凌源の岩崎柳路夫妻帰国。四月七日歓迎句会、南紀白浜に招待

○三月路郎主幹大阪時事新報広告部長として入社さる

○森東魚株式会社間組入社

○七月路郎指導で阪大川柳会から「大川端」刊行。(不朽洞版)BKから全国中継で「川柳の夕」放送。久良岐、三面子、水府、雀郎、路郎らが講演

○十月東京支部開設。福田山雨楼支部長

○十二月川維京阪神支部連合忘年川柳大会を日本橋クラブで開く。一八〇名出席。講演「歳晩の味」路郎。「柳樹の精神」山雨楼

翌年の昭和十一年(路郎四十九歳)には、路郎の川柳一筋の生涯にとって画期的な一大転換を示す「川柳職業人宣言」が行われるのであるが次回にそれを詳記することにする。

ともあれ以上のごとき川柳日誌が、山雨楼メモに詳記されているが、年毎に綴られたそのメモは、前記要約の量を大幅に越えている。

路郎自らの執筆もあるが、山雨楼の筆蹟によるものがほとんどのようである。

こうしたメモを通覧していくと、路郎の川

柳生活がかなり明確にみてとれる。その事件の中から葭乃書簡をひらいてみよう。

「父芦村は岸の里の家で、昭和五年十一月十四日私の母の三十三回忌の日に亡くなりました。それから私達は、玉出本通りへ移ってキング喫茶店を開業しました。これは決して家計の足しではなかったのです。世間を知る為の私の修業の場所と路郎が決めたことです。」

人間嫌いの私が客に接することの難しさは川柳家の誰でもがよく知っていられる筈。店をあける前には、何杯かの洋酒をあふてからにします。勿論、女給も二、三人は雇っていました。が、まずお客の先手をうって、いい気分になっておかないと話のやりとりがスムーズにいかないのです。

業者が配達してくる洋菓子ほとんどが子供のおやつになってしまいますし、洋酒の消耗もばかにはならず、こんな営業ぶりでは、路郎のプラスになるどころではありません。路郎にすれば、とにかく世間知らずの私を、はちばち教育してこうという腹づもりであり、そのための思いつきであったのです。このおかげで私も世間の裏をちよつぱりのぞき大人の嘘のいやらしさも知らされました。この喫茶店は七年程でやめました。

この店のおかげで、少しは無駄口もきける

様になっていった私は、店をたたんだら、またもとの木阿弥で、一言も口を利かぬ、そして声をたてて笑わぬ葭乃になってしまいました。生来の根性というものは、どうしてもなおらぬものだどハッキリわかりました。

私は昔から四方八方からのサービスづくめで育ってきたので、路郎はそれをため直すために苦勞をしたことでしょう。私はおかげで世間の裏というものを、世間の苦勞というものも、チョッピリ覗いたかの様でございます。

「どうしてあんなにのんびりした気持ちになれるのだろう」

と思うたのが路郎が私へ対する興味の第一歩でありました。私は食いけ一本の娘で、身を飾ることも知らぬ女でありましたから、人からプロポーズされる様な条件は何一つ持っていなかったのです。唯一本抜けたようなのんびりさがあつた事は事実です。烈しい性格の路郎には、心をほぐす中和剤であつたでしょうが、また派手に喧嘩のできる相手ではありませんでした。

路郎は「福寿草」の序文の終りに

「彼の女の生活は私を防波堤として、港の中の静かな日日に安住し切っていて、社会に対する抗議とか公憤とか云うものを持ち合わせない。従つて句の上にもそうした厳しさ、激しさと云うものはない」

と書いています。実際私は幼いときから、誰かに寄りそうて生きていました。そのため、何くそ、という気概は少しもありませんでした。ですから私には内助の功などは棄にしたくもないのです。うるさくもない代りに、痒いところに手の届くような世話もやかないと云う不甲斐ない女に生れついでるのでございます。拙宅に「鬼灯の赤きは人のためならず 井泉水」の軸がございます」(葭乃書簡)

路郎の鮮満の旅は、宿屋住いをして執筆したルポである。鮮満ところどころにまとめられ好評だったが、この旅で、満州鉄道の優待バスを贈った大島濤明は、つぎのような一幕のエピソードを川雑(路郎古稀特集号)に寄せている。

「先生は朝鮮經由満州に來られたが国境の安東税関で所持品の検査があり、その姓が麻生とあるので、安東警察に連絡され、厳重な取調べがあつたそうである。その頃日本では社会主義の取調べが厳しく、当時の社会主義者の大物級に麻生久という人があり常に私服警官が尾行する程の要注意人物であつた。安東の警察でも先生の姓が麻生だし、容貌も教授風ということで、神経を失らせて所持品は勿論、身体検査まで行つたそうである。そのため、折角の鉄道無賃に役立つバスの使用が全く不能となつてしまつた」

愛染帖

波多野五楽庵選

京都府 都倉 求芽
あの人の部屋に指紋いっばいつてくる
チャンス失った落かけのチョコレート

和歌山市 桜井 千秀
神隠しされたか返らない筈
打ちやすいボールで打診するあなた

海南市 三宅 保州
逆回りしたくはないか観覧車
お手頃なお値段ですという極

松原市 小池 しげお
遅咲きの人と一緒に通り抜け
うぬばれをたくさん持って波に乗り

東京都 やまぐち珠美
廃屋が豊かな闇と切りむすぶ
千人の吐息溶かして傾く町

弘前市 高瀬 霜石
花の名を毎日妻に聞くのだが
ふんざりがつけば第二の誕生日

四条驛市 吉岡 修

心まで凍ったことばでの別れ
羽衣を脱いでみたいと言う油断

和歌山市 木本 朱夏

カキケコに形に連れが枯れている
春塵を集めもの憂い昨日今日

弘前市 斉藤 劔

路の臺 忘れ上手にしてくれる
はは逝った時刻のままの古時計

富田林市 池 森子

春雷や亡父の祈りを束にして
一点はプライド白は白として

松江市 川本 畔

言い訳はよそう五月の風の中
臘月ひとつ嘘だと知っている

弘前市 宮崎ヒサ子

一行の付箋にびしやり叩かれる
振り出しに戻った土のやわらかさ

愛媛県 中居 善信

爪を研ぐ事を忘れた二日酔い
誘蛾灯お前も俺も淋しがり

和歌山市 福井 桂香

シグナルは黄しのび込んでくる油断
沸点にとどく涙は容赦なく

鳥取県 西原 艶子

紙ふうせんのように浮いてる宵の月
いつもどこかで地図塗り替える音がする

和歌山市 武本 碧

過ぎた日をリサイクルして生き延びる
地図通り行っても乗れぬ父の貨車

大阪府 神夏磯典子

あいまいにしたら私が消えてゆく

交野市 田岡 九好

このような生き方もある時雨かな

茨木市 藤井 正雄

どうにでもなれの形で出る欠伸

弘前市 福士 慕情

折り畳む傘の滴を切れぬまま

高知県 桑名 孝雄

周平を読んで静かに老いてゆく

奈良市 米田 恭昌

ブームの果てにたまごっちの悲しい骸

札幌市 三浦 強一

終の駅までは車窓の雪月花

横浜府 長島亜希子

幸せでしたか遺影に訊いてみる

青森県 西谷 大吾

老いるとは寂しさばかり悔いばかり

尼崎市 春城 年代

春日浴び夢の下絵を考える

唐津市 仁部 四郎

中立を貫く長男また五歳

弘前市 高橋 岳水

長生きの耳目汚している政治

弘前市 一戸 ツネ

今更に名残りを惜しむ棺の蓋

横浜市 秋元 和可

西宮市 西口いわゑ
夕ざくら ひらひら天へ続く道

鳥取市 岸本 宏章
薄味にかえて一病飼い馴らす

大阪市 前 たもつ
笑うのが薬という本読んでいる

海南市 谷口 義男
言い訳はしない自分が蒔いた種

松江市 津川 紫晃
計算をしてある派手な捨て台詞

米子市 林 瑞枝
レストハウスで森の探検して見よう

池田市 栗田 久子
聞くだけは聞こうと言ってくれただけ

西宮市 門谷たず子
ミニトマトほどの愛ならさし上げる

八尾市 吉村 一風
ぱつと灯が心に点きたいいい便り

堺市 桜沢 千世
立ったまま座ったままで過ぎた駅

和歌山市 福本 英子
風邪の間に往つてしまった花筏

尼崎市 長浜 澄子
すぐ泣ける泪にだけは御用心

八尾市 宮崎シマ子
七人の敵へ味方も同じ数

横浜市 川島 良子
現実を甘く見過ぎた転び癖

尼崎市 田辺 鹿太
山彦の返事が来ないもどかしさ

藤井寺市 太田扶美代
菜の花よ妙に情けがありすぎる

富田林市 中井 アキ
逢うて来た余韻はらはら花の雨

米子市 青戸 田鶴
白木蓮五日ばかりの美人かな

大和高田市 鍛原 千里
花結びほどくと長い過去がある

横浜市 芦田 鈴美
初七日の経から涙もろくなる

倉吉市 松本よしえ
点滴の頭かかえて物忘れ

岡山市 井上柳五郎
花束を受けた時から姑と嫁

綾部市 藤田 芳郎
金銭が絡んで丸い輪にならぬ

岡山県 山本 玉恵
包み切れぬ愛を小出しにしにひとり

大阪市 小泉ひさ乃
鳶の子が鷹に育つて帰らない

弘前市 中山 雅城
写メールに孫と桜とランドセル

和歌山市 上地登美代
方程式解けないままの思案坂

八尾市 篠原いつふみ
家計簿の赤鉛筆がよく折れる

尼崎市 内田美也子
葉桜になつて人間らしくなる

八尾市 村上ミツ子
切り取った記事がどんな色あせる

大阪市 板東 倫子
人間不信 仏の顔もして居れず

八尾市 高杉 千歩
B 29 知っているから反戦歌

アルゼンチン 松井美稚子
相槌も同じ話に耐えている

京都府 丹後屋 肇
弁当食う鴨川ベリが無常観

和歌山市 榎原 公子
斬り口をしたたる血とも涙とも

和歌山市 喜田 准一
予告なく妻のミサイル飛んで来る

高槻市 乙倉 武史
綺麗でも造花悩みをたんと持つ

枚方市 海老池 洋
妻はフォルテ僕はピアノの定年後

倉吉市 山中 康子
うす笑い四方八方くすぶらす

寝屋川市 森 茜
ふつふつと萌えだす思惟をあたたためる

鳥取市 夏目 一粋
我武者羅に生きて節目は不文律

弘前市 櫻庭 順風
七言絶句 李白の貌で詠んでいる

姫路市 服部 一典
塾通い親の希望がのしかかる

米子市 白根 ふみ
平熱になると何でもないことだ

富田林市 片岡智恵子
無器用な夫残して逝けませぬ

鳥取市 春木圭一郎
お迎えがあれば素直に行くつもり

西宮市 坪井 孝一
バリウムが美味しくなつて気味悪い

高石市 小島 百恵
暇だからお金の事を考える

堺市 山本 半銭
出遅れたジョーク疊んで什舞い込む

大阪市 町田 達子
桜咲くと毎年夢にくる亡姉で

米子市 中井 ゆき
花一杯咲かせ一人の誕生日

松原市 玉置 重人
ありがとうたくさん聞いた春の絵馬

西宮市 牧瀬富喜子
春の名画 景色の中で褪せて見え

羽曳野市 吉川 寿美
わたしにも炎えた日もありカンナの朱

岡山県 大石あすなろ
詰め込んだはずの記憶が逃げてゆく

唐津市 田口 虹汀
この世では添えぬ縁の比翼塚

羽曳野市 酒井 一壺
程々の毒を飲まねば生きられぬ

鳥取市 徳田ひろこ
白無垢もリバーシブルになつていた

和歌山市 山口三千子
毒古を聞き流さねば生きられず

奈良県 渡辺 富子
音無しの構えて妻の愚痴を聞く

堺市 和田つづや
生きてこそ人間 死んでなるものか

米子市 澤田 千春
ひらがなの丸さで生きる余生かな

鳥取県 谷口 次男
説明の言葉が何故かきこえない

出雲市 園山多賀子
閑話休題 戦火のニュース疎ましい

熊本県 高野 寛草
豪快でちつともらしくない医師だ

美祿市 安平次弘道
拾つては困る女の言葉尻

鳥取市 武田 帆雀
じつとして居れば無難な鬼の道

松江市 安食 友子
すんなりと領きました怪しい媚

大阪市 川原 章久
回る回る何時まで続く火の車

東かがわ市 木村あきら
大海の夢捨て切れぬ水中花

三田市 北野 哲男
耐一杯そろつと右脳が起きて来る

箕面市 出口セツ子
わたくしもゴミも敬遠されている

鳥取県 西原 真一
気が沈むバツと恋でもしてみよう

大阪府 澤田 和重
留守電にさよならだけが入れている

宇部市 平田 実男
会長にされてしまった独楽ネズミ

香川県 川崎ひかり
夫婦とも無職であくびばかりする

倉吉市 野口 節子
愛されて分を忘れているベツト

愛媛県 黒田 茂代
中心線崩して楽な三枚目

倉吉市 淡路ゆり子
神々もかつては戦好きだった

日立市 加藤 権悟
タンポポの吹かれて風のボヘミアン

竹原市 正畑 半覚
人生に勝つ鬼になる神になる

東大阪市 北村 賢子
携帯フォン持っていないけど生きられる

吹田市 岩屋 美明
忘れぬ気楽に生きてます

羽曳野市 吉村久仁雄
妻にだけ苦労背負わす結果論

横浜市 金森 徳三
物納の田畑も春の陽がそそぐ

東京都 播本 充子
越天楽を聞くNASAモデルの枕

鳥取県 土橋はるお
関節にしばし錆止め吹きつける

弘前市 蒔田 果林
戦争の敵も味方も人

藤井寺市 中島 志洋
足元の穴に気付かぬ有頂天

倉吉市 米田 幸子
地獄まで持ってゆく気で貯めた金

誹風柳多留二四篇研究 55

粕谷長生・山田昭夫
伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・橋本秀信

清 博美・佐藤 要人

427 糸ほし大紋でさんまを二ツ買い

粕谷 烏帽子・大紋で武士の正月風景ではないかと思う。

句は、正月の用意も整い、烏帽子・大紋もある。だが内情は火の車なので、鯛を買うゆとりが無く、秋刀魚で間に合わせざるを得ない。普段は一人前で秋刀魚一本だが、正月なので特別に二本にしているのが、ささやかな贅沢だ、というのである。

烏帽子大紋で鮭を二タ切し買ひ 新三 18
大イ紋を着ぬと三河屋万左衛門 田草 43
大紋を脱と千助萬右衛門 七三 5
大イ紋に万さいつねのはかまなり

安六 12

大紋をぬくとふだんの万右衛門 安八に 2

糸ほし着々商人の来るまつの内 明六 鶴 3

山田 三河万歳であらう。彼等は木賃宿に泊っており、その食事に秋刀魚(類句では鮭)を買ったというのである。

大野 同。才蔵の分と二玉買ったのであらう。清 同。磯稿、三河万歳の句を何句も引用しておきながら、万歳に気がつかぬとは……残念。

佐藤 同。

428 御后を芥の中でさがし出し

粕谷 『伊勢物語』より取材。「芥」は芥川ではなく、文字通り「ちり・ごみ」であらう。もちろん、芥(川)のきかせがあり、登場人

物は業平と二条の後である。

句は、業平が二条の后を芥の中から「掃き溜めに鶴」のように探し出した、というのである。

山田 芥を「ちり・ごみ」とし、「掃き溜めに鶴」とは、おそるべき発想で、ただ嘩然とするのみ。

これは業平が二条の后を「からうじて盗み出て、」芥川まで逃げて来たが、結局「御兄堀川の大匠、太郎国経の大綱言」により探し出され、連れ戻された事を、『伊勢物語』巻六を詠んだものである。

ついでに言えば、二条の后つまり藤原高子は長良の娘で、「掃き溜め」どころが大変な名家の出。ただ彼女は入内後(業平の話は后になる前の話、東光寺の僧と通じて皇后を廃されたというから、かなり発展家ではあったようだ。

助兵衛ときさを原でとかまへる

安八 梅 4

伊吹 やはり『伊勢物語』の芥川を暗示させるための「芥」で前説賛。

小栗 同。磯稿のようによませようとするのが、作者のたくらみだらうが。

橋本 同右。後に皇后となる女性をいくらなんでも掃き溜めの鶴とは形容すまい。この句の

主語は業平ではなく、二人を追っかけて芥川にやってきた追手である。

清 諸説の通り。

佐藤 同。

429 何となくくいハよし原のはばあ

粕谷 「吉原の婆あ」は「吉原の遣手婆あ」の事。悪評ばかり聞くので、直接の知り合いではなくても、何とはなしに憎たらしくなつて来るのである。

清 吉原に遊ぶ男達の遣り手に対する感覚である。

佐藤 同。

430 元服の仕着せ松坂こへたなり

粕谷 まつさかは、「松坂木綿」で、つまりは「伊勢縞」のこと。①伊勢国松坂あたりで産する縞もめん。近世、商家の使用人の仕着せなどに用いた。②転じて、商家の奉公人。(国語大辞典)

江戸商家の奉公人「丁稚」が元服して手代となつたことを句にしたもの。元服すると丁稚の着る「松坂縞(伊勢縞)」から離れることを言っている。それが「伊勢音頭」の文句

取りになつてゐるらしい。

松坂をこへた今年のしきせもの 明七宮1

奉公も松坂しまをこへてから 安七天2

松坂をこへた仕きせの勤メかた

昔翁明元91

奉公も松坂縞を越てけり 武一三18

山田 前田金五郎先生によると、これは「伊勢音頭」でなく「伊勢踊」の文句取です。

『季刊古川柳』91号

伊勢踊は「近世初期、伊勢に起り諸国に流行した踊。これはどこ踊、松坂越えて伊勢踊……」などという歌に合わせて踊る」(岩波古語辞典)とある。

実は小生も疑問を持ち、その一端を『季刊古川柳』90号「松坂縞を越え」(雑考)に投稿した拙文への先生のご指摘です。

小栗 賛。「元服してから着る仕着せは、松坂縞を越えた形」の意ですか?

橋本 山田説賛。小栗兄の疑問は。左の句でわかる。

いせ嶋の内ハまんまを尊トかり 初6

清・佐藤 同。

431 ほうそつてひいどろかほんとうに成

粕谷 「ビードロを逆さに吊す」という成語

があり、美人の形容。美貌のたとえ。「びいどろを倒さにつるしたやう」ともいう(『諺苑』「故事ことわざの事典」)。「辞彙」は「ビードロ」だけで「美女の異称」としている。

「本当になる」は「本真物になる」で、本句の場合は「本当の美人になる」の意である。

句は、「ビードロ」と形容のあつた美人が痲痺に罹りわずかのあばたが出来た。それがかつて彼女の美しさを引き立てている、というのである。

うすいもハかわひらしいのうちへ入レ

よく見れハ四ツ五ツある美しさ 天八幸1

小栗 痲痺であたら美人が不美人になつてしまつたの意。「びいどろを逆さにつるしたやう」なのが美人なら、正しくつるしたのは不美人という理屈をこねた句。「ほんとうに」は「逆さ」ではない正しい状態のこと。

虫よけの札本とふに乳母か張リ

—逆さではなく正しい向きに。 明七仁4

ほんとふに成てくれなとかなしそつ

—茶臼ではなく正常位で。 明七松4

橋本 小栗説賛。例句適切。

清・佐藤 同。

苗香のむ

政岡日枝子選

春はいい胸の扉がボンと開く
破っても破っても明日がかけぬ
雑学の点線と交わる時
自己証明 背なべタンと黄カード
夢はまだ半熟卵を抱いたまま
老いてゆく手順の中のわらべ唄
語尾あげて親離れする滑走路
さくらと椿散り方がありそれぞれに
木の芽あえもう三年がたちました
縦横の線の深さがありがたい
花曇りメトロノームが気に障る
夜桜の何処へ落ちつく人の波
桜さくら突つ伏したまま眠りたい
深い読み相手を傷つけないように
ありのまま書く鉛筆のいい匂い
南無地藏 椿の花がよく似合う
公園の桜わが家を染めにくる
蜜蜂は花のアドレス持っている
年金が下がる老後の急な坂

大和高田市	鍛原	千里
米子市	青戸	田鶴
樺原市	居合真理子	
弘前市	一戸	ツネ
富田林市	池	森子
藤井寺市	太田扶美代	
富田林市	中井	アキ
藤井寺市	高田美代子	
八尾市	高杉	千歩
米子市	野坂	なみ
和歌山市	福井	桂香
三田市	久保田千代	
横浜市	保田	絹子
大阪市	神夏磯典子	
吹田市	山本希久子	
米子市	中井	ゆき
羽曳野市	徳山みつこ	
今治市	塩路よしみ	
大阪市	三浦千津子	

スキップを試すだあれも居ないから
紙の鶴その日その日の首の折れ
相好を崩すさくらの下の鬼
貰われるベットと歩くさくら道
ほがらかの奥に涙の涸れた跡
なんだこんな坂越えた若き日ふり返る
化粧した後はメールをうちまくり
年寄りの証 鮎玉持ち歩く
補聴器をつける自分がいとおいし
二世帯の渡り廊下が軋みだす
みどり児をさらわれそうな臘月
梅干にレモンゆつくり母になる
恋の花 渡り廊下で咲きました
ストレスを溜めて小さなダムが病む
ご覚悟を一運托生なういさ
米を研ぐ戦争ニュース聞きながら
大切な命だ少しづつ燃やす
カルテには書けぬ痛みを妻は抱く
左遷地ですっかり生きる流し難
耐えなよと川がゆつくり慰める
掛け替えた仮面もずれる春うらら
行進曲で往こう明日はきつと晴れ
夢つめた壺がセピアになつていく
一つ嘘つく嘘の積み重ね
何しても人の口から出る噂

鳥取県	岩崎みさ江
藤井寺市	鴨谷瑠美子
米子市	白根 ふみ
鳥取県	石谷美恵子
鳥取県	西川 和子
鳥取県	佐伯 やえ
東大阪市	北村 賢子
東京都	岸野あやめ
東大阪市	笠井 欣子
横浜市	秋元 和可
鳥取市	福田 登美
東京都	播本 充子
寝屋川市	平松かすみ
米子市	木村富美子
大阪市	津守 柳伸
八尾市	村上ミツ子
藤井寺市	楠 昭子
羽曳野市	吉川 寿美
八尾市	宮崎シマ子
松江市	安食 友子
和歌山市	森下 順子
東京都	やまぐち珠美
大阪市	川久保睦子
神戸市	田中 章子
東京都	清原 悦子

片耳で噂話を軽くきく

希望捨てないよう告げている画鋏

これでいい春には春の靴を履く

あいまいな風の誘いがじれったい

散らかった私の部屋に夢が満ち

正解であっても式が書いてない

鬼の首取ったなあいつよくはしゃぐ

仏壇の香をたいては詫言っている

湯たんぽの温もり母を抱いている

お手振りを教えましょうか六ヶ月

根菜もわたしに負けず臺が立ち

若嫁にピザの出勤でもてなされ

子が好む回転寿司に目が回る

コンマ以下にも以上にもなる白髪染

いんちきの一つくらいはやってきた

結び目をゆるめセンスをさぐりあい

情報があるたび母の血はさわぐ

無器用で嘘の隠せぬ白が好き

二十本残す定期歯科検診

レトルト利用 後めたさはもう持たぬ

片目ずつ二人の食べる目玉焼き

仲良しこっこダムの向こうの三軒家

織り傷の袖の中に亡母がいる

風見鶏春の嵐に羽ばたける

歩きたい道がすすい寄ってくる

和歌山市 吉村さち子

鳥取市 徳田ひろこ

弘前市 宮崎ヒサ子

香芝市 大内 朝子

八尾市 生嶋ますみ

堺市 志田 千代

鳥取市 永原 昌鼓

米子市 門脇 昂子

和歌山市 福本 英子

和歌山市 榎原 公子

大阪府 星野さくら

鳥取市 岸本 孝子

大阪府 松尾柳右子

尼崎市 春城 年代

倉吉市 米田 幸子

豊中市 櫻谷 郁子

倉吉市 山中 康子

倉吉市 淡路ゆり子

横浜市 川島 良子

大阪府 本間満津子

橿原市 安土 理恵

米子市 林 瑞枝

堺市 桜沢 千世

米子市 木村 春枝

米子市 澤田 千春

人生に地図などいらぬマイウエイ

携帯が釣り竿男対女

狂う世をしばし静めて花の宴

満開の花を明日が脅かす

婆シヤツを脱ぎ春風とランデブー

私もやがて分別されるゴミ

旅カバン胸の蜜が舞いあがる

適量の毒のくすりが効いてきた

笑うしかない しくじりを溜めている

遠い山見つめていたい孤独な日

裏話ちよろちよろ転び出る仲間

蹴いた石へごめんね言っておく

フルムーン妻の笑顔がよみがえる

散る花が舞う連立の選挙カー

ひたむきに押ししたり引いたり二人

年金が余生を癒す宝箱

千里さんの句―ストレスが溜まる一方の冬の間も、素晴らしい生き方を

しているからこそ、このような春の情景に出逢えたのでしょう。リズムカ

ルでやさしい言葉の句仕立ての中に、本当の心の豊かさが窺える。田鶴さ

んの句―自分の内にある俗念と願望とから来る迷いでしょうか。上五を重

ねる事によって、心の葛藤の深さがより一層わかる。人間は常に迷っている

という事を教えられる句である。真理子さんの句―変えて点が線になる

喜び、さらりと詠んではあるが、この点を持つのはたやすいが、持続さ

せるのは難し、これも技術の一つでしょう。眼が入り魂が入るとなれば

い欣びになります。ツネさんの句―黙っていてもカードが喋るとは面白い

時勢ではあるが、イエローカードまでが私達の中に入ってくるのでは面白い

和歌山市 武本 碧

和歌山市 桜井 千秀

尼崎市 内田美也子

神戸市 山田婦美子

横浜市 芦田 鈴美

出雲市 團山多賀子

八尾市 井尻 民

米子市 池尾 保子

寝屋川市 森 茜

鳥取市 西原 艶子

岡山県 山本 玉恵

今治市 野村 清美

八尾市 田中トシエ

愛媛県 宮本 末子

出雲市 石倉美佐子

大阪府 畑中 節子

自然

川端 柳子選



自然死でいいと遺言しておこう
不自然な音で父ちゃん葱刻む
盆栽へ自然の景にする苦勞
自ずから人柄が出るゴミ袋
路地裏で自然の風が通り過ぎ
愛憎にもまれ自然につく丸味
春野紀行自然の息吹浴びてくる
自然に出る親の躰が身を助く
なるようになってる神の思し召し
ありがとう自然に言える児を褒める
大自然室と思う花の下
春の日へ自然は笑い忘れない
自然とも演技ともみえ魔性かも
ほろ苦いゴーヤで貰う自然治療
争いも自然に終えていた夫婦
濡れ落葉自然に還る自負がある
濡れ落葉自然淘汰という掟
自然美をこわさぬように薄化粧
生きていく力自然が先生だ
ナチュラルな髪は毛消えた日本人
自然の美 歌いあげてる童歌
ライバルへ自然な顔が作れない

早智 伊津志 あずき 充子 悦子 修 比サ子 宗明 理恵 栄也子 美也子 茂代 修 登美代 愛論 孝雄 武史 雄々 孝美 たもつ 春雄 善信

開発の声を押し切る自然保護
橋架けて島の自然が渴きたす
無理せず自然に老いを受け止める
人間の英知及ばぬ地のマゲマ
逆らわず神に授かる子沢山
クーラーを避けて自然の夏扇
自然治療にまかせた時間の長いこと
不自然な声で指示する留守電話
医療費は自然治療した分もと
癒されて人は自然に丸うなる
自然満喫野山の春が呼んでる
自然保護あまりに気付くのが遅い
大自然割って竹の子顔出した
五風十雨父となり母となる自然
帰るたび自然が瘦せてゆく故郷
住
花は咲くのに往つた人もう帰らない
人の手を掛けると病んでくる自然
故郷の自然とはなしをしに帰る
大自然羊の群れとゆく雲よ
太陽に抱かれるいのちしたたかに
人
自然葬に程良い森だなあ妻よ
地
優しさが自然ににじむいい笑顔
天
大自然太古を抱いたまま眠り
軸
夢追えば心に春の贈り物
一知 たち子 ミツ子 高明 勝明 倫子 英二 圭世 棲子 郁子 妻子 庸佑 典子 俊子 岳水 彩子 ちかし 権悟 たず子 可住 島 順子 (花) 久保正剣

サイズ

北村 賢子選



はち切れるはずじゃなかった試着室
必勝へビッグサイズの飯茶碗
葉書サイズ桁を数えて観る絵画
小さめのサイズで和む落し蓋
身のほどを悟る女のしサイズ
ブラジャーのサイズに母は面映ゆい
樹齢千年幹のサイズを手で計る
脇役が主役のサイズ左右する
ピッタリのサイズでバズルはめ込まれ
年金の箱のサイズがちいさすぎ
人を見る自分サイズでしか見えず
しサイズ玄關番の男物
ワンサイズ落とせば楽に着こなせる
体脂肪スリサイズがみな同じ
エコノミーサイズに合わせ座る椅子
心のサイズ変えるつもり般若経
話すたび逃した魚大きなり
掛時計部屋のサイズに合って鳴る
父の靴呑みこむような子のサイズ
ほいていさんの腹をうっかり笑えない
息止めてサイズ計って貰う頸
ししの希望を抱いてMサイズ
輝夫 美明 慕情 沁丘 柳弘 柳子 富子 四郎 愛論 朝子 棲世 恭昌 扶美代 倫子 あずき ツネ いたふみ 比サ子 志華子 典子 正雄 妻子

マタニティーサイズいっぱい満ちている
ひとサイズ大きな靴持ち歩く
三人を育てた母はSサイズ
持っている財布のサイズ規格です
お気に入り服のサイズがそっぽ向く
いきいきが脳のサイズを引き延ばす
不揃いのサイズも和む子沢山
ほどほどのサイズが無駄を省いてる
人間の心が計れないサイズ
ちちははに大きな恩が返せない
引き際で男のサイズ見えてくる
男いっぴき大中小の疵がある
ぶうーんと風のサイズの自己主張
伸び盛り明日のサイズがあてがわれ
履いて見てにつこり笑う孫の靴

佳

敏子 千里 隆盛 武史 栄呼 遠野 一粹
シマ子 美代子 圭二 霜石 順風 雅城

サイズでは計り知れない父の井戸
招き猫大きく目でんと座らせる
小さな絵に大きな視野を描き入れる
それぞれのサイズで暮らす笑顔なり
フリーサイズのズボンで父はどんと生き
たもつ

寿美 一風 岳水 天涯 保州

人

身の丈に合わせた穴でよいものを
生きるとは小型で足る貸金庫
地 天

保州 充子

いつだってキングサイズの母の愛
軸 村上ミツ子

信頼と愛ヒッタリのペアリング

けが

徳岡 本丸選



先頭に立つのはよそう怪我の元
忌憚なく言えば大怪我してしま
い
遠い日のけがが今日つくり上げ
とりあえずけがを治してからのこと
湯治場へ着いたとたんけがをする
他人だから怪我は浅いと言つとける
けがが動けないのによく喋る
けがをした友を置いては逃げられぬ
ふりむかすための包帯指に巻く
あの時のけがの功名あなた得る
ボクだって小指のけがは数知れず
古傷にさわるぬように口喧嘩
不器用に生きて絶えないかすり傷
力士ではないけががには泣いている
落馬した傷がときどき疼き出す
血のでないけがで長年悩んでる
けがをした小指の爪が自己主張
怪我をして野獣になった雄の猫
能面の下に消せないけががある
修羅のけがが治ればきつと強くなる
けが重ね図太く生きる術を知る
半世紀過ぎて被爆のけがが消えず

水笑 一風 天修 猿杵 一花 美代子 シマ子 康子 孝雄 高栄 岳水 彰雄 志代 照彦 紫螢 一粹 孝美 伊津志

佳

ご破算にしたいと思う傷を抱く
母だけが知っているけがの跡を見せ
まん中を歩いていてもけがをする
こんなけがが笑いとばして耐えている
無傷では築けなかった金字塔
地球儀を回せばけがの跡だらけ
ベテランになると上手に怪我をする
父越えたときから手傷多くなり
それなりに咲かせて花の怪我おわる

重人 あずま 千里 郁子 清史 鐘造 霜石 三宅保州

人

地球儀を回せばけがの跡だらけ
ベテランになると上手に怪我をする
父越えたときから手傷多くなり
それなりに咲かせて花の怪我おわる

鐘造 霜石

天

父越えたときから手傷多くなり
それなりに咲かせて花の怪我おわる

三宅保州

初歩教室

題——チャンス

三宅保州

当社の祖師麻生路郎先生は、その名著「川柳とは何か」(昭和三十年初版、平成十年復刻版発行)の序文において次のように述べておられます。

「(川柳は)短いと云うことが、必ずしも、作り易いと云う理由にも、つまらないと云う理由にもならないことである。」「私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。」「句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸である。」「私にとって川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためである。」

この祖師のけだし名言を、私たちは常に念頭に置いて、心して川柳をたしなみたいものです。

【同想句】

結婚のチャンスつかめず早や四十(真一)

結婚のチャンス逃した色男

アヤ子

チャンスらしいチャンスも無くて未だ独り

いさお

結婚のチャンス生かせぬまま通過(仲真一)

【抽象的な句】

さりげなくチャンス伺う胸の底

ゆきの

長年の苦勞報いるチャンス来る

敬之介

このチャンス逃せば二度とないチャンス

芳江

チャンスだと勧められても氣乗りせぬ

武

汗と知恵一氣に發揮するチャンス

公市

幸せはじつとこらえてチャンス待つ

稔

追い風が吹いてチャンスをものにす

准一

七句ともそれなりに整っています

が、抽象

的であることが難だと思えます

が、抽象

は得てして場景が見えにくく、訴える力も弱

い傾向になり勝ちです

もう少し具体的に作

ればきつと良くなる句ばかりです

【添削句】(原は原句、添は添削句)

原 チャンス来て 逃すまいぞと

力みすぎ

勝 久

五・七・五ごとに一字空けるのは不要で

す。

原 チャンスにも転んではかり老いの坂

嘉彦

淋しすぎませんか、もう少し前向きに、

添 老いたりといえどもチャンス待っている

中八章字、組み替えると中七になります。

九好

原 四十路坂これが最後のチャンスかも 喜子

四十路は動く傾向。この句も前向きに

添 中年にとつてはまたとないチャンス

原 会合で帰るチャンスを待つばかり 郁代

帰りたい理由を詠みましょう。

添 宴会の下戸は抜け出すチャンス待ち

原 折角のチャンス雨にてノーゲーム 忠子

添 折角のチャンス逃したノーゲーム

原 チャンス待ちハンクライダー春の風 節子

添 ハンクライダーも私も風を待っている

原 ワンマンの亭主チャンスを見て意見 美恵子

亭主はあまり使わないように。

添 機嫌良いときの夫を見てねだる

原 生ゴミをカラスがチャンスねらつて

添 ゴミの日のチャンスを知っているカラス 文江

原 今ならばチャンス迷わずいとめたる こそえ

添 折角のチャンスを逃す若かった

原 度々のチャンスを逃す心の目 栄呼

「心の目」がわかりにくい。

添 再三のチャンス逃している焦り

原 出遅れてチャンスいつも逃してる 登志子

添 出遅れていつも逃しているチャンス

原 ためらつてチャンスを逃してばかりいる

中八章字、組み替えると中七になります。

九好

添 ためらつて逃してばかりいるチャンス
原 ひっこみ思案またひとつ見逃している

大 鯰

リズムが引つかかりませんか

添 思案している間にチャンス逃げて行く

原 勇気だし一歩ふみ出すこれチャンス 智加恵

添 一歩踏み出すとチャンスに近くなる

原 渡り鳥チャンス到来喜んでる 綾 乃

添 渡り鳥は飛び立つチャンス知っている

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 チャンスまだ来ぬ娘へ親の気もめる

ヨシ枝

娘と表現すれば親の立場とわかります。

添 チャンス来ぬことを気にしてない娘

原 匙加減余命のチャンス浮き沈み 賢 治

見つけはよいがチャンスの使い方に一工夫

原 虹が出る今がチャンスだ背を伸ばす 利 子

オーストリア的な添削をあえて……

添 虹が出た今がチャンスとプロポーズ

原 このチャンス飛んで柳にとび着くか と き

【飛んで」と「とび着く」が重複

添 このチャンス掴み柳にとび着くか

原 ウォーミングアップにチャンス信じて欠かさない

添 ウォーミングアップしながらチャンス待つ

原 一枚のキップにチャンスあったのか 和 友

添 一枚の切符にチャンス賭けている

原 ライバルの負傷を案じ騒ぐ胸 はじむ

原句では課題がチャンスとは言い切れない

添 ライバルの負傷案じているチャンス

原 蜘蛛が巣でチャンス待つてる春日影 英 旺

【春日影】は俳句の季語ですが川柳眼的に

添 万全の構えで蜘蛛は待つている

原 も一人の私がチャンス逃がしたか 道 子

添 もう一人の私にチャンス潰される

原 ライバルを風除けにチャンス待つている

添 ライバルを風除けにしてチャンス待つ

原 ワンチャンス生かしたからの今がある

添 ワンチャンス生かしたこそ今の今がある

原 今年こそチャンスをつかむ綱を張る 邦 柳

添 今年こそチャンスを掴む綱を張る

原 よちよちにシャッターチャンス身構える

添 よちよちへシャッターチャンス身構える

原 ありすぎるチャンスは心迷わせる 円 女

添 ありすぎるチャンスに心迷わされ

原 青春の謳歌にチャンス逃さまい 永 子

添 青春の謳歌にチャンス逃すまい

原 人生のカーブでめぐり逢うチャンス 敏 子

原 リストラでチャンスの神も厳探し つよし

原 そら今がチャンスだ電流背を走り 秋 星

荒削り(要推敲)ですが魅力的

原 バレンタイン今年もチャンス逃げてゆき

原 焦るなよチャンスは来ると子を諭す 弘 子

原 チャンスだと言われて虎の子を取られ 孝 明

原 よい機会ひとこと苦言をえて褒め 照 彦

原 井の中を飛び出すチャンス待つ蛙 昌 鼓

原 このチャンス言葉探しの旅に出る 千 華

【佳句】

毎日今がチャンスと謳歌する 益 子

身を縮めチャンス待つてるカメレオン フ ジ

タマちゃんに出逢いのチャンスあげたいな 弘 之

生きている今がチャンスの豪華船 清 子

掴みより逃したチャンス数知れず 佑 子

自販機のようにチャンスを選べたら 洋 介

チャンスの芽育てる人と枯らす人 章 司

孫が来てチャンスをくれた仲直り 美 弥 子

【今月の推せん句】

弟が離れた膝に姉座る 藤村重之

二の足を踏んでチャンスとすれ違い 升 成 好

【私の句】

最後まで手ぐすね引いている代打

最後

最後

秀句鑑賞

同人吟 芳 地 狸 村

— 5月号から —

要。それを万歩計で表現してる。穿ちの句。

公園に犬が読めない札を立て

林 昭三

まったくその通りで、立札に大語で書いていれば読めるのにと犬に同情する。飼主主に注意しているのでしょうか、ユーモアの句。

一枚のピラ女心を笑いてくる

西 口 いわゑ

一枚のピラと上の句の表現に、女心をうまく表わしている。何枚かあるピラに目も止めない女心が浮かんている。穿ちの句である。

どの顔も亡母に似てきた三面鏡

西山 幸

亡母の面影に作者の顔を置きかえた表現が、よく生きている

利き酒へ自慢の舌が主張する

武 本 碧

利き酒とはうらやましいですね。自慢の舌と自負されていらつしやるところを見ると、相当な酒豪でいらつしやいますね。うらやましい限りです。舌の主張が効いて面白い句。

気前よい軽い返事が頼りない

岸 本 宏 章

あつさりとは気軽に頼みごとを引受けてくれるおばあさんの返事が、あまりにも速いので、大丈夫かと心配が先にたつてくる。気軽い返事がこの句のいのちである。軽味の句。

すね。穿ち味の句。

フラフープ鍛えた腰が笑いだす

木 村 正 剛

若い時代にフラフープで腰をすいぶんと鍛えたはずが、歳をとると散歩するのに腰が先に駄目になってくる。それを笑いだすとうまくユーモアでまとめている。

カタカナ語増えて漢字が振つてある

三 好 専 平

漢字に片仮名が振つてあるのが一般的だが、片仮名の外国語がふえて、逆に漢字のルビが目につく。軽味の句。

ご主人を散歩さしてるブルドッグ

笠 井 欣 子

可愛らしい小犬は散歩に連れて行けるが、ブルドッグは逆に飼い主がお供をさせられる。下の句のブルドッグにユーモアがある。

ぼつくりと逆きたいための万歩計

井 尻 民

奈良の吉田寺がぼつくり寺で有名。ぼつくり往生を仏にお願いするにも丈夫な足が必

戦後の昭和二十三年ごろに、日立造船の同じ職場におられた竹内潮花先生のすすめで、川柳の道に入り以来五十有余年を過す。職場川柳句会で麻生路郎師の指導をうける。また川柳雑誌社、川柳塔社の諸先生にお世話になり今日に至る。現在は川柳教室を公民館など三方所で開き、岸和田川柳会の会長の役を務めています。

同人吟の秀句鑑賞の依頼があり、その選句に次の三点に留意しました。

一、五・七・五音字の定型、総棒が十七音字の句

一、軽味、ユーモア味、穿ち味の句

一、舌にころがせてリズムミカルな句

同人吟の選句に路郎先生の「人間陶治の詩」を、念頭において鑑賞しました。

いい話天眼鏡で覗き見る

新 家 完 司

井戸端会議でお母さん達が持ちよるいい話を、天眼鏡で覗くとどうひろがつてゆくのかたのしいですね。天眼鏡がうまく働いていま

一番で卒業したが職がない

中村金祥

不況時の就職戦線は非常にきびしい。大学を一番の成績でもなかなか就職が出来ずに困る、現在の世相を浮きぼりにしている。上の句の一番に軽い穿ち味がある。

辛酸をなめた男で味がある

米田幸子

いろいろの苦勞を背負つて来た男の顔には、男でもほれほれするところがある。作者の目には男の味とうつつているのでしよう。「味がある」の下五が光つてゐる。

ゆがんでも手書きの文は温かい

佐伯やえ

筆者は絵手紙の講師をしているので、この句の心情が理解出来ます。手書きの手紙には心が入っているので温かい。上の句の「ゆがんでも」がよく生きている。

爺ちゃんを何やかんやとあてにする

蘭田 猿杓

若い人から邪魔もの扱いになるお爺ちゃんより、頼られるお爺ちゃんが楽しいですね。中七のなんやかんやがよく効いています。

病院の横に住んでて病氣せず

江口 度

病院が傍にあつても、お世話にならずに達者でくらしているという面白い句。

出かかった愚痴飲みこんだ苦笑い

宮本 かりん

泣き言をお腹の中に終い、苦笑いして我慢している。「苦笑い」にこの句の命がある。

マネキンのイメージ消えた試着室

米原 雪子

流行の服をきたマネキンのスタイルを夢見て胸をわくわくさせて着替えたが、マネキンの夢が消えたのを「試着室」で句を締めた。

神様に聞きたいことのあるみくじ

海老池 洋

神社でおみくじを引いた吉兆の占いのことで、神様に聞きたいとはちよつと意表をつく面白い句。

ていねいな言葉で痛いところを突く

楠 昭子

ぞんざいな言葉で弱点を突かれても心に響くことはないが、ごまます言葉に弱いという句。

上げる人ないのに今日も編んでいる

赤川 菊野

世の中の雑音を気にせずに編物一すじに生きる生活が羨ましいですね。筆者などは毎日公民館の講義に追われ、ゆつくりしたくらしがほしいです。

ダンスでもいたしませんか仁王様

三宅 保州

ダンスと仁王様との組合わせにユーモラスな味が出てゐる。なかなか洒落たユーモア味の句。

一呼吸おいた返事に策がある

菊地 政勝

何ことも一呼吸おくといふ考えがうかぶことがある。急がば回れとよく言われているがその通りで軽味のきいた句。

老人の心の扉孫があげ

藪野 けい子

老人と孫のふれ合いを、心の扉を開くと上手にとらえていますね。孫とする会話がどれほど楽しいものか想像出来ます。

のみ込んだ言葉が喉でからんでる

吉村 一風

この句のように筆者も経験していますが、喉にからむとはうまい言いまわしでこの句を生かしている。

抜けてても銭勘定は合っている

原 さよ子

抜けててもとうまい表現です。歳をとるとだれしも抜けてないと思つていても、若い人から見れば銭勘定が危なっかしいと心配するが、銭勘定はしっかり合わせているというユーモアの句です。今の年よりは、しっかりとっていますよね。

秀句鑑賞

— 5月号から

小澤 幸 泉

迷うときウソを選んでしまう指

やまぐち 珠美

あれほどまでに迷いに迷って決断したとい
うのに。でも本当はウソなんかじゃないよね。
これでよかったと、そう指もいつてるよ。

苦も楽も同じ音色の古時計

稲葉 洋

気がついてみると、変わらずそこに居る古
時計。揺れ動く心と体そして周りを同じ音色
で見つづけている。苦楽も歳をとったかな。
春つらら少し女を立て直す

三浦 千津子

しばらく眠っていた宝物に、もう一度磨き
をかけて、いざ、ご出陣だね。

伸びる芽を摘んだ過保護に気がつかぬ

澤 裕子

言うは易く行は難いですね。信じましょ
う。しっかりと、芽は伸びていますから。

迷っても決めても妻の機が飛ぶ

藤田 芳郎

夫の顔が見てみたい。なかなかできないこ
とですね。実際の主導権は夫が握っている。
夫婦田満の秘訣はここにあり、ですか。

国籍を問うたら食べるものがない

芦田 鈴美

飽食の時代と言われている。この豊かさは
何処からやって来るのか。それは貧しさを映
し出す鏡なのかも知れないだろうか。

これほどに本積み上げていて無学

石堂 潤子

無知の知という言葉。そうです。まさに知
学に溢れています。情報化社会に生きる知恵
がいつばい詰っている本棚が見えるようです。

明日は見えないが日記書いている

岡本 勲

今日も生きている証の日記を書いている。
ここにこそ見えない明日がみえてくる。
「明日のことは明日自らが思い悩む」

失敗を重ねて気付く氣負い過ぎ

森下 一知

それほどには思ってもいなかったにと、そ
の時になつて思い知らされる。またそうせざるを得ない事情もある。時々失敗という休
憩所で一息することも必要だったのでは。

老人も愚痴はおあずけまず笑顔

藤井 郁代

老いは恵み。足らざるを嘆くより足りるを
数えよ。心の転換は自分も人も明るく豊かに
する。大いに笑顔の配達人たれ。

無駄遣いしてはストレスちよつと捨て

森下 順子

少しは残しておいた方がよいストレス。思
い切つて、でもちよつと遠慮がちに無駄遣
い。やはりいろいろ気になるのかな。

でこぼこの道もなければ通れない

前坂 なお美

でこぼこ道や曲がりくねった坂道、だから
人生なのかも知れない。生きることへの前向
きな、ひたむきさが伝わってくるよね。

雑魚だって明日の夢は持っている

山下 節子

そうなんだよな。もつと自信を持てよ。夢
がないなんてウソだ。一人ひとりが持っている。
さあ、雑魚たちよ、皆で見つけに行こう。

真つ直ぐに生きて周りを傷付けろ

安野 案山子

ほんとうに傷付いているのは作者なのかも知
れませんが。きつと「その時」が分かつて貰
えます。これからも、真つ直ぐに歩んで行つ
て下さい。心からのエールを送ります。

ある川柳愛好家

の死と手記

黒川 紫香

川柳は作らないが、好きでいつも私の句を批評したり、褒めたりしてくれたOさんが、忽然となくなったのが昨年春のことである。

それ以来忘れようとして忘れられなかった彼の残した原稿が見つかった。達筆な字で書かれた原稿に思わず目頭が熱くなる。

六年ほど前に私が兵庫県知事から高齢者文化功労賞を戴いた時、大新聞の朝刊に写真入りで掲載されたのを喜んで、第一番に電話で祝福してくれたのも彼だった。

常はもの静かで明るく振る舞っていたが、遺稿からはすでに死を覚悟していたのが窺われ頭が下がる思いである。

彼とは阪急時代に電鉄、ホテルを通じて職場を共にし、私よりも若い豊富な知識と優しさで指導してくれた大川英一さん（元新阪急ホテル施設部長参事）その人である。惜しくも昨年春、急逝された。

その往生はうたた寝をしていて、寝返りを

うたた寝の姿だったという。

以下に紹介するのは彼の遺稿（原文のまま）である

心臓ペースメーカー

大川 英一

その日、M大学のオープンカレッジの帰り道、甲東園の駅を出て「やくじんさんみち」を過ぎ、上ヶ原大地への緩い上り坂の途中で（徐脈による意識消失）で倒れた。

幸い後ろから来ておられた方の呼びかけで気付いたようで、その間ほんの2、3分のことだったと言われる。診察を受けた関西労災病院にその場でそのまま入院した。

あれこれ検査があつて十二日目「心臓カテーテル診療」をうけ、その結果と対策を告げられた。

洞不全症候群……左肩口にペースメーカーを植え込む。

大動脈弁狭窄症……固くなっている弁の取替えには開胸手術が必要とのことで見合わせ服薬による治療。

七日後の四月四日ペースメーカー植え込み手術を終えた。退院し帰宅した。翌日十四日あの日の坂を歩いた。戻りは桜を惜しんで関西学院の正面に通じる「学園花通り」に回り

道をした。

朝、目覚めると右手の指先でそつと触れてみる。いまや身体の一部のペースメーカーとのそんな対話が日課となつて十ヶ月が経つ。ふと夕刊の記事が目をつけた。

（呼吸が止まった夜、人生の三分の一を支えてペースメーカーは、使命を終えた心臓になお規則正しいリズムを送っていた。）

こんな歌が頭を過ぎた。

……空しく消えて魂は

故郷に還つたポケットに……

黒々とした深い木立の春日山を背にした高、畑の連隊の営門をくぐつたのは、五十九年前の今日、二月二十日朝だった。（終り）

第15回誌上川柳大会要項

課題 「海」一句詠（未発表作品）

選者 今川乱魚・森中恵美子・泉比呂史

千葉鉄男・菅原孝之助・石橋水絵

庄子比呂夫・雫石隆子

締切 6月30日（月）参加費、〇〇〇円

投句用紙 自由（〒住所・氏名・TEL）

投句先 981-104仙台市太白区中田6-20-1

川柳宮城野誌上川柳大会係

守 正徳宛

主 催 川柳宮城野社

同人特集

雨百句

平成八年〜平成十三年
同人吟から 編集部

落人のように吉野は雨となり

路郎

足摺の雨は遍路へ地から降る

薫風

また次の雨の日来ます古本屋

田中 叶

雨の日はゆっくり瘤をなぐさめる

木村 富美子

またひとつ吠えねば雨が上がらない

政岡 日枝子

雨天順延ゆっくり生きることにする

牛尾 緑良

小糠雨 心の殻が溶けてゆく

安藤 寿美子

捜し物互いに言わず雨期になる

春城 年代

聞き返すこと多くなる雨の日よ

青戸 田鶴

六月の雨から深くなる哀よ

矢内 寿恵子

棲みついた鬼出て行かぬまま梅雨に

福本 英子

羽繕い雨の止むのを待っている

黒田 能子

モノクロのビル街梅雨の画布によし

森下 愛論

梅雨晴れ間 僕も干そうか無為徒食

西岡 洛酔

雑草もパーマも伸びて雨期つづく

羽津川 公乃

約束へ誰の呪文か雨になる

石谷 美恵子

梅雨の間にググッと伸びた男の子

新家 完司

雨嬉し味噌舐め地蔵もあじさいも

米田 恭昌

基次郎の墓 檸檬が雨に濡れている

奥田 みつ子

雨垂れに鳴っているのは猫の皿

武田 帆雀

雨の日は出ますと怖い事故現場

山口 高明

猫会議終わると雨が降ってくる

小島 蘭幸

雨漏りの音で借金妥協する

板垣 夢酔

菜種梅雨 花のにおいの傘たたむ

山崎 君子

雨のち晴 いつも信じて生きている

あじさいに銀の雨ひき筆をおく

意地悪な雨 満開の日曜日

さよならが言えず燻るような雨

梅雨晴れにカッと脳みそ干してやる

梅雨までに河童は皿の掃除する

雨の日のポストのお口拭いてやり

梅雨明け三日 釜ゆでの刑に遭う

雨乞いの雨にもらった土砂崩れ

雨の窓いちにち人を恋しがる

雨に採るりんご^{こぞ}挙って泣きじゃくる

大雨が止むまで父の傘の中

六つ目で降りたら雨の降った跡

寒の雨一日 日記は雨一字

今日も雨 明日へ生きる傘を干す

フワフワを静める春の雨も良し

雨上がり伸びた新芽の自己主張

人も地も蘇らせた銀の雨

雨の日の身辺雑記辞書の冷え

菜種梅雨 友の大方病い持つ

神夏磯典子

高杉 千歩

宮口 笛生

増田 紗弓

大内 朝子

川原 章久

稲葉 冬葉

鈴木 公弘

内海 幸生

光井 玲子

蒔苗 果林

谷口 次男

松本 ただし

中田 あい子

片岡 智恵子

本間 満津子

福田 登美

山中 康子

木本 朱夏

秋元 てる

春雨は花粉もまぜて降ってくる

梅雨らしくつゆに見合った旅を組む

雨二日バイオリズムに出る乱れ

雨漏りの謎の回路が掴めない

戻り梅雨 地軸に滲みる音がする

あけぬ梅雨せめて阪神勝ってくれ

雨男晴れ女いてちょうどいい

長雨の竹の雫は竹のいろ

日和見な旗は慌てる俄雨

雨よ降れ安吾全集待っている

梅雨楽し登下校にある水たまり

梅雨明けて詩と音楽が躍り出す

登園拒否ベッドの中に雨が降る

一杯のコーヒー雨を褒めている

時計草 六月の雨降りやまず

梅雨の鬱リフレッシュする美容院

どうせ止む雨だ辛抱してあげる

小雨の庭暗がりにひよっと山頭火

大雨を降らせて誤解とけました

雨の日に葉書一枚ポストまで

菊池 トミエ

初山 隆盛

長浜 澄子

久保 正剣

亀岡 哲子

浅田 隆樹

井上 照子

山本 半銭

三宅 保州

結城 君子

早川 盛夫

渥美 弧秀

榎原 公子

最上 和枝

森本 節子

山門 タミ

土橋 螢

町田 達子

宮本 かりん

柿花 紀美女

雨乞いは洗車をするときすぐ叶う

花に雨 女は愛に鈴を振る

梅雨寒や赤いまんまの信号機

酸性雨告げる花とは思われず

ひたひたとわたしの雨期も近くなる

雷神が走っていつてどっと雨

雨のち雨六十路の坂の転び癖

梅雨じめり茶漬けさらさら立ち向かう

続く雨 雨読ばかりも肩が凝り

梅雨明けて竿竹売りは声高に

雨の日は雨のリズムで暮してゐる

雨降れば雨月と言って酒を酌み

雨上がり傘とはぐれるはしご酒

雨漏りがして恋の炎が消えてゆく

雨の雫落ちる間際が美しい

雨三日 春の財布もひと休み

借りた傘忘れぬように雨が降る

雨の唄 老いを幼き日に戻す

雨雲につつまみそうなビルが建つ

大谷 篤子

吉川 寿美

原 みさを

杉澤 汀

藤田 泰子

森 茜

山本 希久子

白根 ふみ

岡 あきら

井上 桂作

城 多喜

永田 俊子

加島 由一

高田 美代子

川端 一歩

清水 絹子

小野 克枝

川口 信子

前田 一枝

トタン板ジャズ奏でてる雨つづき

雨しとど敵と味方の数を読む

雨遍路お大師さまに励まされ

長靴を履く雨の日も晴れの日も

もう泣いて梅雨のはしりのような女

梅雨晴れの今日忙しい梅ラッキョ

雨雨雨 無聊をいやす墨を磨る

傘買った私のために雨が降る

雨靴は忘れられてる街の梅雨

枇杷食べたお皿に雨の音残る

俄雨ここで決心せよと降る

母上と書いた手紙が梅雨明けに

雨乞いをしようと花にけしかける

相田みつを展出て広重の雨に遭う

夫には酒の小言は通り雨

雨上がるつばやくように茗荷の芽

今日の雨ショートショートを読む秋思

紫の花を愛した雨女

染まるもの探して雨を身に纏う

松尾 柳右子

西出 楓楽

内田 美也子

高瀬 霜石

都倉 求芽

山口 美穂

江原 秀夫

榎本 舞夢

瀬戸 まさよ

江口 度

吉岡 修

吉岡 きみえ

後藤 早智

佐伯 やえ

緒方 美津子

伊藤 玲子

伊藤 寿美

石倉 芙佐子

千葉 風樹

■句集鑑賞

新家完司川柳集(四)

『平成十五年』を拝読して

小島 蘭 幸

平成十五年春、さも当然のように新家完司さんから第四句集『平成十五年』が送られて来た。『平成元年』を上梓されてから『平成五年』『平成十年』そして今回の『平成十五年』と五年ごとに上梓されている。これは凄いことだ。平明で深い句を理想とされている完司川柳は五年の歳月、節目を経てまたひとまわり大きくなられた。

『平成十五年』を開くと懐かしい作品が飛び込んできて嬉しくなった。

若葉キラキラこはましがいなくこの世
第3回井笠川柳会笠岡大会の課題「輝く」で私が天に頂いた作品である。この時の選評に私は次のように書いている：「青葉若葉の美しさに、この世に生まれて来て良かったという感謝の気持ちがふつふつと湧いてきたのであろう。豊かな感性に選をしていて思わず」

やりとさせられた作品である……。一方完司さんはこの作品の生まれたいきさつを次のように書いておられる：「笠岡はどんな街だろう、笠岡川柳大会とはどんな大会なのであろう、と考えながら新緑の道を車で走りました。その時に出来たのが入選句です」。佳句がひょいと生まれるのもまた、完司川柳なのだ。

盲導犬まつすく前を見て座る

平成十二年五月に開催された西尾葉七回忌川柳大会の課題「座る」の入選句だ。まつすく前を見て座るに盲導犬の使命感が良く出ていて、選者の泉比呂史氏が披露された時、心の中で思わず拍手をした記憶がある。完司川柳は披露を聞いたとたん、ワッこれは凄いと唸らせる作品も多い。

魔法使いが髪の毛を抜きに来る

運のいい人が病院から戻る

職務質問ひとつこなし午前二時

くそ暑いのも馬鹿な政治家どものせい

完司さんには、女性川柳作家のファンも多いと聞く。それは私には想像もつかない独特の川柳の世界があるのではないかと。私の妻も(川柳はつくらないけれど)完司川柳のファンである。「完司さんの川柳はシャイ！」とことあることに言っている。ニューヨーク

ヤンキースの松井選手を思わせる風貌の完司さんは、頑強な肉体と、こうと決めたら一歩も譲らない心の強さを持つておられる。

寒そうな仔犬の真似をして眠る

そしてこの作品のような、やさしさと繊細さを合わせ持つておられるのだ。

死にたくて来たが桜はまだ蕾

死ぬのは次にしようと呼から戻る

ゆうべは死にたかったが今朝は元氣

冬に死んだ人たちのため桜咲く

しあわせなときに死にたし今しあわせ

完司川柳には、深いところで死を見つめている作品も多い。死を見つめ、生を見つめ、人間を見つめている完司川柳。彼の句は、還暦を迎えられて更に奥へと突き進むものではないだろうか。

中尾漢介のいないこの世となりにけり

ともだちがいるこの世にもあの世にも

生まれつき駱駝大僧正の顔

無言電話きつと神様からだらう

枕元末期の水を置いて寝る

平明で深い句は、中尾漢介さんから新家完司さんへバトンが渡された気がしてならない。五年後の『平成二十年』にはどんな作品が掲載されるか今から楽しみである。

第6回 鳥取県川柳文芸大会

日時 7月13日(日) 午前10時開場
場所 新日本海新聞社5F

(J R鳥取駅南口歩3分)

題と選者 「怪物」 藤田 泰子選

「忍者」 永井 玲子選

「蹴る」 長谷川孝流選

「唸る」 牧野 芳光選

「煌めく」 石谷 忠良選

「謎」 山下 節子選

「シヨック」 中村 金祥選

「よろめく」 永原 昌鼓選

席題なし・各2句・11時30分締切

会費 2000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1000円(大会誌呈)

表彰 1句1点 総合点上位10人に呈賞

欠席投句 締切7月5日(当日消印有効)

用紙自由(事務局により清記)

宛先 〒689-1105

鳥取市東大路64 両川洋々方

第6回鳥取県川柳文芸大会

実行委員会事務局

主催 鳥取県川柳作家連盟

弓削川柳社創立55周年記念 岡山県芸術祭参加(申請中)

第55回 西日本川柳大会

と き 9月6日(土) 18:00~20:30 川柳まつり

9月7日(日) 川柳大会 9:00開場 11:00 投句締切

と こ ろ 久米南町文化センター J R弓削駅下車、津山方面へ徒歩10分

第 1 部 事前投句 締切り 6月30日(当日消印有効)

「夜明け」(熊本) 吉岡 龍城選 「民 宿」(松山) 塩見 草映選

「妥 協」(豊中) 橋高 薫風選 「訛」(西宮) 小松原爽介選

「飛 躍」(新津) 大野 風柳選

○応募方法 各題ごとにはがき大用紙に2句明記、氏名、雅号もそれぞれに記入し、
会費1,000円(郵便小為替)を同封大会宛送付

○投句先 〒709-3614 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川柳社 西日本川柳大会宛

第 2 部 大会当日並びに事前投句の入選句発表

「屋 台」(加古川) 泉 比呂史選 「卵」(堺) 梶川雄次郎選

「情 報」(鳥 取) 小林由多香選 「熱 い」(岡 山) 岡田 千茶選

「グルメ」(津 山) 小澤誌津子選 「伸びる」(久米南町) 長谷川紫光選

特別課題(当日)(久米南町) 恒弘 衛山選

○参加費 2,000円(昼食・発表誌呈)

○アトラクション 真庭郡湯原町「見明戸・豊年踊り」と餅投げ

○表 彰 第1部・第2部ともに総合成績で10位まで及び1、2部合点で3位まで。

○川 柳 祭(前夜祭) 久米南町内各団体の出店と出し物あり。

○宿 泊 津山市「ホテルアルファワン」(祭り閉会後お送りします)

○主 催 久米南町・同教育委員会・弓削川柳社、後援 岡山県 外申請中

第4回四万十川

川柳全国大会

雑 詠

(四万十川と限定せず) 二句一組
千円 何組でも可 (未発表作品)
一重投句は断わります

選 者

橘 高 薫 風

応募締切

6月30日(月)当日消印有効
所定の投句用紙は左記へ。

表 彰

原稿用紙可 (氏名・住所・電話)
大会賞ほか九賞 賞品多数

問い合わせ・投句先

〒787-0021 中村市京町1-17

幡多信用金庫川柳係宛

電話0880-34-2121 (内線204)

大会日時 8月23日(土) 13時から

会 場 幡多信用金庫本店会議室

住所・電話は前記、土佐くろしお

鉄道中村駅下車タクシィ5分

席 題

一題二句 締切12時 秀句3句

賞呈 (投句用紙は当日受付で配布)

○四万十川観光 (大会当日午前中)

希望者は投句時申込み1500円

主催 幡多信用金庫 後援多数

第16回 (通算47回)

全国鉄道川柳人連盟会津若松大会

日時 7月6日(日) 前夜祭 18時30分

7月7日(月) 9時受付開始

7月8日(火) 8時朝食後解散

会 場 「瀧の舞」 Ⅱ024-27-3322

会 費 2万2000円
会津若松市東山町湯本寺屋敷43

参加申込 6月10日厳守

(大会・懇親宴・宿泊一切)

宿 題 各題2句 投句締切12時

「地 図」 池永 龍生選

「鉄 道」 藤沢 岳豊選

「曇り後晴れ」 藤井比呂夢選

「音 流」 佐賀 龍峰選

「鏡 池」 酒井 路也選

「進 む」 野村 稲波選

「非常口」 山元 将生選

「城」 神保十三夜選

表彰 多数 (欠席投句拝辞)

問い合わせ

会津若松市西七日町1-33

長谷川竜太

TEL 0242-24-1362

第34回

奈良新聞川柳大会

日時 7月27日(日) 10時開場

会 場 奈良県文化会館小ホール

TEL 0742-23-8921

お 話 文芸評論家 嘉瀬井整夫氏

宿題と選者 各題2句 11時30分締切

「少 し」 福田 秋雄選

「カーテン」 大村美千子選

「塔」 芳野多佳子選

「帽子」 鶴本むねお選

「荷物」 杉森 節子選

「ひびく」 西村 茂選

「祈り」 田中 新一選

席 題 「」 黒川正之進選

会 費 3000円 (昼食・発表誌呈)

出席申し込み 7月18日まで

〒630-8686 奈良市三条町606

奈良新聞社文化事業部川柳係

TEL 0742-26-1335

FAX 0742-27-7810

欠席投句 7月18日締切り 500円

〒630-8261 奈良市北市中町7-1

主 催 奈良新聞社

本社 五月句会

五月六日(火) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大 阪

初夏を思わせる蒸し暑い夕刻、汗を拭きふき115名の参集を得て五月句会が開催された。堺番傘川柳会中田たつお氏から創立75周年記念川柳大会の案内があった。

お話は葉忌にちなんで昵懇だった岳人理事長から葉師の想い出話とその川柳に言及し、いつもにこやかで怒った顔は殆ど見たことがない、というお人柄をしみじみ偲んだ。

代表句としては、

人恋し人煩わし波の音

一步出すれば吾れ旅人となる心

温泉や座り羅漢に寝る羅漢 等々

父、母、妻には、

頭ほど光らぬ父でありにけり

木の芽あえ母すこやかに八十五

迎え傘の妻に教える水溜まり

さらに葉師を偲ぶ句十数句が挙がったが最後の一句に止め、割愛する。

釣り人も景色となった雨の滯

月間賞は寺川弘一さん(枚方市)に輝く。

(司会—玄也)(記名—月子・真理子)

(受付—森子・月子)(清記—尚士)

席題「葉」

田辺 鹿太選

思い出の松葉菜の文殊院

要領得て葉を入れる本の海

好きですと葉に書いて本返す

逢いたくて葉にそつと口つける

春女神小さな葉くれました

もつと先ごんどん読めという葉

葉忌の供養とろりと酌み交わす

読みさしの葉がたまよる春の鬱

思い出のしおりがたよるでも大事

光源氏葉の位置が動かない

氣に入ったページに愛の詩の葉

晩学の葉六法横に置く

古びたる和紙の葉にだぶるひと

一生を葉で終るクローバー

意味も無くはさんだ訳でない葉

ポロポロの葉に残る紅のあと

菜の花を挟んで閉じる旅の夜

清張の本の葉が落ち着かず

立ち読みの続きに葉入れておく

万札を葉代りにして忘れ

隠すところなくて葉にした写真

ひと息に読んで葉が欠伸する

押し花の葉に遠い人の棲む

春色の葉に書いた一行詩

大吉の葉を葉にして残す

大志の葉を財布を持ち歩く

愛読書亡父の手垢のある葉

柳 伸

雅 文

弘 風

桂 香

愛 論

洋

保 州

節 茜

孝 一

玄 也

澄 子

いわゑ

瑠 美子

保 子

直 樹

尚 士

遠 野

弘 一

朱 夏

修

ア キ

た もつ

泰 子

修

ル イ子

久 峰

波の音聞こえてきます葉の忌

しぶちんの土産葉と決めてはる

葉まで連休中は動かない

幸運の四つ葉葉にしています

少し顔出して世間をみる葉

佳

葉忌へまだお傍には行けません

忘れな草しおりに挟み返す本

自叙伝は葉はさます子に遺す

押し花の葉あなたが離れない

重石にも葉にもなる男です

人

空白のページを知っている葉

地

押し花の葉はのかに匂う思慕

天

いい男だった葉にしておこう

軸

思い出を閉じる葉はバラの絵に

兼題「おまけ」

加島 由一選

中味よりおまけ子どもの心ひく

待ち惚けおまけに雨が降って来た

グリコよりおまけの方が欲しかった

タンポポのおまけが付いて来た苗木

おまけから夢がふくらむ少年期

まけといて必ず言うてみたくなる

すっぽかされおまけに雨にまで降られ

美人にはついおまけして売っている

みつ子

月 子

昭 三

賢 子

瑠 美子

冬 葉

みつ子

楓 楽

典 子

義

民

富 美子

真理子

照 子

満 津子

房 子

鹿 太

朱 夏

哲 夫

寿 美

深 雪

兼題「ぶんぶん」

藤田 泰子選

ぶんぶんとアンパンマンが怒りだす
八つ当たりぶぶん怪我なとせぬように
ぶんぶんと怒つてみて二人きり(岩)和子
空腹へパンの匂いが風に乗り
ブンブンのばあちゃんまたも仏壇へ(志)千代
衣更え去年のままのナフタリン
ぶんぶんと天使のお尻が匂います
ぶんぶんと妻のふくれた顔可愛い
安物の香水鼻が曲りそう
満員の鼻へ男性化粧品
すぐにブンブン相変らずの坊ちゃんだ
言い訳を笑いこらえて聞く背中
ぶんぶんと怒るお方で御しやすい
ぶんぶんとその裏がわにある本音
交換の名刺ぶんぶん火の匂い
ノルマの靴ぶんぶん文句言う夜更け
少年の匂いぶんぶんさせて夏
ふて寝して天の岩戸が開かぬ朝
ぶんぶんと妻の匂いのして安堵
香水の匂いで君とすぐわかる
フェロモンならばぶんぶんしても許される
ぶんぶんとかサブランカの挑戦か
役人がぶんぶん匂う受け答え
菓子折りの名刺ぶんぶん匂う
石鹸の匂いをさせて独り住む
シャワー全開今日のぶんぶん皆流そ

満津子 螢
和子
かすみ
菜月
九好
弘風
柳安子
たつお
みつ子
由一
真理子
森子
理恵
ばつは
義
耕治
高栄
寿子
弘一
瑠美子
天笑
富美子
アキ
五月

ゼロ近い利子で両替手数料
最近の九条とてもきな臭い
ぶんぶんと石油が匂う星条旗
海の香がぶんぶん母の宅急便
香水の匂いに負けて途中下車
佳
ぶんぶんと花を咲かせている枯木
人間の罪がぶんぶんする干潟
新刊がぶんぶん新緑の図書館
ぶんぶんのあなたまだまだ脈がある
ポケットの小石ぶんぶん怒り出す
人
ブンブンはおよしトンビにさらわれる(志)千代
売り言葉買つたらきつと戦だな
地
ぶんぶんと出ては来たけど窓灯り
天
軸
葉忌の風ぶんぶんと花しようぶ
兼題「答え」 山本希久子選

一步
保州
ダン吉
倫子
月子
朝子
鹿太
扶美代
恵子
千里
美代子
とし子
章久
弘一
欣子
笛生
修
求芽
いわゑ

わたくしの前では夫イエスマン
三叉路で答えに迷うかたつむり
口答えしながら伸びる反抗期
ニワトリか王子か未だ模索中
にっこりとしてくれたのは答案で
信号と神の答えは待たばかり
時々聞こえぬ振りをしていいます
安物もきつちり答え出してくる
オーイハイ仲良く古橋を迎えます
いつもいつもハイと言うとは限らない
私の答え白菜真つ二つ
美しく咲いて答をくれたばら
結んでは聞く答の出ぬ介護
即答をさける女の猜疑心
行間に愛の答えが埋めてある
携帯の番号変えたのが答え
あつかりと解答くれたリトマス紙
振り向かぬ背中にもノーと書いてある
ゆつくりと眠りすかつといる答え
ピリオドの先に転がっている答え
水平線辺りで答え見えかくれ
頼るのは自分だけだという答え
どの医者も歳相応と言う答え
来年は柿も答えてくれるだろう
すり鉢の底に答えが書いてある
佳

伽羅
千里
保州
澄子
篤子
保子
文茜
舞夢
澄子
アキ
伽羅
柳伸
鐘造
柳弘
セツ子
桂香
寿美
月子
柳弘
かり子
みつ子
哲男
泰子
義
楓楽
洋
いわゑ

いいですねハイと答える園児たち
母方の血が即答をしてしまふ

舞夢
義

嫌いと言う答案用紙の中は雨

森子

母の木ゆする風の答を聞きたくて

俣子

紫陽花の色に答えを見失ふ

桂香

自我ひとつ同居へノーという母よ

兼題「跳ぶ」

河内 天笑選

跳んでます妻は陽気なブーメラン

潤子

現実を跳び越えられず五月病

希久子

いのち賭け愛ハードルを跳び越える

蕉子

水溜まりいちにのさんでまだ跳べる

俣子

跳ぶ夢がギブスの中で騒いでる

理恵

高跳びをするには目方重すぎる

義

跳ね人が跳んでねぶた祭がもり上がる

賢子

幻が因幡砂丘に跳ぶ兎

章久

連休に跳ぶ人達を運ぶ役

一步

クレジットカードと跳んだ後始末

富美子

大企業辞めてベンチャー立ち上げる

尚士

タイガース跳び箱一つまた一つ

柳弘

ふたりなら大波小波跳び越せる

泰子

もう夏を目指す球児の兎跳び

たつお

母の声現に聞いて跳び起さる

欣子

跳ぶことを何度夢見た車椅子

保州

コンビニで跳びはねている熟婦り

遠野

カメラ手に戦火を避けて跳びはねる

久峰

人間の目をくらませて蚤ジャンプ

保人

いちにさん一緒に跳んでから仲間

岳人

喜寿の恋跳んでごらんと煽られる

五月

いつかとお跳ぶと言いつつ鍋磨く

甚一

神様の許す範囲で跳ぶんだよ

正坊

時どきは跳んで若さを確かめる

由一

縄跳び百回続ける美女の体脂肪

柳伸

酒止めるそんなハードル跳ばせせん

弘風

跳ぶかまえ水をかけても無駄らしい

寿美子

カマキリも私も余生は跳べません

寿美子

毯つくも縄跳ぶも孫かつこよし

薫風

疑いが晴れてスキップしてかえる

泰子

フランスに急に留学無口な娘

住

借金をつっぱい背負い跳んでいる

日出子

ジャンプする蛙見ていたかたつむり

恵子

聞きわけのない恋の虫跳びはねる

みつ子

えらいもの見た心臓が跳びはねる

篤子

リハビリの一步私は跳んでいる

求芽

星条旗国連ひょいと跳び越える

ダン吉

ギャラリーの前で蛙は跳びたがる

楓楽

目に見えぬハードルを跳ぶ浮世なり

寺川弘一

川柳塔まつえ二〇〇号記念川柳大会

日時 六月二十九日(日)

開場十一時 開会十三時半

会場 松江テルサ四階(丁R松江駅前)

TEL〇八五二一三一五五五〇

会費 二千元(大会誌・記念品・昼食各自)

お話し 橋高薫風川柳塔社名誉主幹

兼題と選者(各句 席題なし 十二時半締切)

「フランス」 長谷川博子選

「湖」 金築 雨学選

「進む」 佐々木 裕選

「つなぐ」 原 章峰選

「栄える」 小林由多香選

「表紙」 河内 天笑選

事前投句「力ちから」 恒松町紅謝選

事前投句先 千六九〇一〇一五

松江市上乃木九一三三二

三島 松丘宛

締切り 六月十四日(土) 欠席投句拝辞

賞 氏名にはふりがなをお願いします

各題の天、地、人におくります

懇親会 会費三〇〇〇円(当日受付)

主催 川柳塔まつえ吟社

〇5月号P55 杉野十佐一賞川柳の課

題「心」が「空」に変更になりました

スペインの

こころホタ

早川 棲世

電車の中で唐突に、五十年前も昔に何かの会報で、スペインに川柳が都々逸に似た短詩型があるという記事を見たことを思い出した。会報の随想欄で、もちろん詩の名称や作例の二三が紹介されていたが、まったく忘れている。さいわい姪がスペイン語の勉強をしているので、電話で調べてくれるよう頼んだ。姪がスペイン人の先生に尋ねると、先生は多分ホタのことだろうと言い、小さい頃父親から聞いたと言つて一句口ずさんでくれたという。先生によると、スペインには民俗舞踊が実に多数存在し、芸術性も高い。地方によって特色があるが、アラゴン地方のホタはとくに有名で、歌曲に合わせて男女が踊る。スペインではフラメンコが代表的なように思われているが、スペイン人は自分の故郷の舞踊の方により懐かしさを感じるという。

姪が図書室から数冊の文献を借りてくれ

た。すべてスペイン語である、楽譜だけの本もあり、詩ばかり集めたものもある。踊りや曲にも興味はあるが、とりあえず歌詞を訳してみようと思ひ立った。スペイン語はまったく知らない。JOTAと書いてホタと読むことも、始めて知った。日本人が見ると、やたらに関係代名詞や定冠詞が多く、それも男性、女性、それに中性に分かれ、単数形と複数形がある。動詞は語尾が微妙に変化する。スペインの人はたいへんだらうなと思う。それに姪に借りた字典にはない言葉も何故かたくさんある。歌詞は四行詩の形式をとっているけれども、邦訳すると二行の分がち書きが座りよく思える。だがスペインの詩は、スペイン語の特徴を極限にまで活かしているので、日本語訳は至難なこととされている。それと知つての乱暴狼藉、多少でもスペインの心に入りたい思いからである。拙訳を示す。

情熱の国スペインだから当然愛の歌が中心になる。迫真的なものは、多いが省く。

あいつを通しちやいけないよ

夜の林の闇の中私に触れずまいだよ
あなたの窓辺のウロチョロうさぎ

はれた私は生殺し

家族愛の歌も多い。母親は特に敬愛される。

刈った生木の枝芽生えても

死んだ母さま戻らない
母をなめたら許しておかぬ

重罪いとわず血で守る

郷土愛や愛国心が強いのはうらやましい。

アラゴン人はお月さまお日さま

女の人は品がよく

そして私はアラゴン男

社会批判もあるし、悪党という分類もある。

坊主と商人同類だ

洗礼あるたび金が入る

貧しい生まれで醜男で

女房に敷かれりや神いらぬ

村の司祭の破れた法衣

小娘追つて藪の中

民衆の唄なのに難解なものもある。

Aunque no soy labrador,

a labrar me apostairá:

a echar un surco derecho

en el jardín de una niña.

直訳すれば(私は農夫でないけれど、お前が持っている庭のまっすぐな畝を耕そうと待っている)くらいにならうか、分類は愛の歌、ご賢察をお願いする。ホタについてさらに探索を深めたいが、実は昨年この姪と、妻も同行してスペインを旅した。このときホタのことを思い出しければと悔まれてならない。

夢の地獄

毎月24日締切・30日以内厳守

編集部

長柳会 (前月分) 加島 由一報

揺り籠の夢を知らない水子塚
 そわそわとし過ぎ夫婦と思われぬ
 百歳を元気に生きたる夢の人
 平行線辿る二人に巡る春
 そわそわと産声を待つ初孫を
 介護付きマンションを買う夢をみる
 されぎれの夢わたつみの亡兄を恋う
 夢を追う瞳にいつまでもある若さ
 瞳が合つてチワワ人気の時の運
 夢はぐれ人恋しくて降りる駅
 たわむれにみくじを引いて運だめし
 万馬券当つた夢にうなされる
 風向きが変つて運がこちら向く
 受験の日そわそわしてる母と祖母
 運勢は絶好調と言つたのに
 運悪くへそくりの金みつけれ
 玉の輿もうあと一步夢の中
 春ですねそわそわしてる旅籠
 幸運をはにかんでいるプチトマト

一 慧 幸 雄 正 一 和 子 武 男 正 子 けい 子 正 美 直 樹 菜 美 敬 二 天 けし 良 男 ひろし も こ 輝 子 史 富美子 潤 子

赤とんぼねえやに会つた夢をみる
 何しても夢みる思い早くこい
 三浪の春に家族の夢心地
 年金の夢は手頃なツアー旅

芳 野 輝 治 和 代 三 和子

サークル檸檬 (前月分) 西出
 輪郭はおぼろ 明日というページ
 離れられ 話の弾む昼下がり
 恋挑みハートにつけるコンタクト
 雛様が孫の若さに見えてくる
 いつまでも女でいたい雛飾り
 蝶つがい ちよつと油が切れました
 酔つてしか言えぬ事だが酔いつぶれ
 悩みあるようには見えぬ食べつぶり
 真実を言つてはならぬ時がある
 いかなごにすわ天敵や 雛の月
 生きている証が爪がよく伸びる
 果たせない約束をした花の下
 流し雛亀が迎えに来てくれる
 一本提げ父さん雛の客になる

希久子 みつ子 遠 野 あずき 光 久 義 子 哲 夫 千 代 正 坊 保 子 房 子 楓 楽 いわゑ たもつ

ローズ川柳会 (前月分) 山崎
 自分への手紙と思う古日記
 今まで生きたついでに孫の子も見よう
 生きたとはまさかまさかの事ばかり
 年金よまさか立ち消えするなけれ
 突然変異孫にまさかを期待する
 戦わず世界平和を祈りたい
 そんな事悩まないでと丸い月

君 子 報 君 子 藍 哲 子 トミエ 貴代子

三月やあじさい一片春が浮く
 無礼講素直にとつてひとり浮く
 玉手箱まさか白髪になろうとは
 わたくしの心を映す雨の彩
 戦争はまさかの人をペンが消す
 観梅に浮く人の群平和だな
 まさかクマちゃん生きて顔出す愛しい目

まさお 孝 一 雅 子 澄 子 いわゑ 義 子 君 子

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報
 お互いに呼吸を合わす夫婦独楽
 不況下に青息吐息小商人
 出番待つ舞台の袖で深呼吸
 菌車の呼吸が合わず伸びたバネ
 磯笛は海女の生きたる証かも
 左遷地の訛りになれた七年自
 少しずつ訛りが解けた里がえり
 居酒屋で同じ訛りが盛り上がる
 かたくなな心を開く国なまり
 ふるさとを背負い続ける国訛り
 ぶつたらばう嘘はつけない河内弁
 味方だと一目で判る国訛り
 履歴書は自問自答の自分史だ
 割烹着の白さは母の履歴書だ
 履歴書の一行毎に増す鱗
 過ぎた日は修羅も火毛もほのほのと
 ほのほのと思いをなぞる古日記
 ほのほのと枯れて二人の茶が和む
 市原悦子のむかしはなしにほのほのと
 手際よく暇は上手に使うもの

活 史 武 雄 泰 一 孝 一 砂 輝 守 五 月 晴 美 憲 夫 澄 子 秀 夫 萬 的 諷 云 児 稲 子 真 笑 比 呂 志 満 千 枝 子 満 蔵 女 きよえ 茂

暇やのに黄信号で走る癖
暇同士語り合おうか千切れ雲
忙中閑暇を巧みに生かす知恵
振り返る暇もなかった父の貨車
暇のある人には用事頼まない
落ち椿姿崩さぬ尊厳死
追いかけて欲しくてちよつと立ち止まる
二人目の医者ほ癌ではないと言う
春風がプラス思考を乗せてくる
藪椿ボトリと明日を暗示する

東大阪市川柳同好会 森下

仕事さえあればと願う青テント
他力本願こんな政治はお断り
もみじの手合わせて長い願い事
少子化がだんだんすすむ先の闇
だんだんと会話も減って共白髪
突きささる言葉に温い風がある
反論の言葉味方に欲しくなる
ありがとこの一言のもつ温み
まだ生きた言葉の一言にある力
美しい言葉で鬼を酔いつぶす
根性ひとつで浪速のジョーが甦る
地獄見た男 根性覗かせる
根性のある男だから嫁がせる
真四角な根性にある温かさ
北帰行冬の足音遠さがる
見つめれば和音を放つ花の精
かげ笛に陶醉してる春座敷

愛論報

治三郎 無禄 庸佑 百合子 重人 高栄 尚士 スミ子 石舟 恵美子
良子 柳弘 三重子 哲矢 賢子 朝子 猪太郎 湖風 弥生 美弥子 信治 萬度 章久 丹吉 ばつは とみを 萬的

雪解けの音符奏でる春の章
川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報 愛論

脇役で一生終えた亡父の靴
無記名に人の本心覗き見る
生き残るために火中の栗拾う
節くれたれども握る手が温い
最高の見せ場で引きたい終の幕
人生の航路教える母の海
啓蟄に心の虫も動き出す
胃カメラに信頼写す医師の顔
こだわりをなだめつつ寝る長い夜
美人ではないが愛嬌に魅せられる
赤ちゃんの笑顔を見れば氣も和む
瀬戸の島借景にしておらが春
二人して築いた積木ゆがない
考えるポーズで夢見るロダン像
物差が縮まってゆく古稀の春
花一輪手向けてありし遍路墓
日曜の日も目覚しは鳴っている
満面の孫の笑顔が福の神
岸和田川柳会 長谷川呂万報
赤ちゃんの握り拳にあった夢
握ってたへそくり舞台の孫に消え
握力を鍛えておこう選挙前
鉄パイプ握ってからの曲り角
少し脱ぎ少女は大人になって行く
脱ぎかけて慌てて纏う稲光り
ひかり かおり あきら 輝夫 賢 いさむ 放任 寿々女 八重子 勝 治延 くに子 よしみ 文太郎 貞月 吟笑 はつ恵 照女 由起子 笑司 蛙城 房枝 守

古い殻脱いで社名をカナにする
脱く若妻に固唾を呑んで叱られし
やり直す積もりでみんな脱いでいる
願をかけ茶髪も止めたリクルート
念願の夢が叶ったダイエツト
ぼつくりの昇天願う寺詣り
賃下げの貫徹願う経営者
ピンピンでぼつくりと逝くのが願
ストレスを除くと急によく喋る
除け者にされて反旗をひるがえす
掃除機も扱い慣れた老いの日々
躓いて除いた石に笑われる
除草剤まいて地球が気にかかる
除くには惜しいと選者怒らせる
ラブメール書いてまた押す削除キ
みつ江 弘子 路子 盛之 あい子 英雄 甚一 基 東吉 珠子 ゆい ダン吉 一脩 倅子

佳句地十選 (5月号から)

太陽がいくつも昇る春の夢
一番のいけずは先に逝った人
母がむく林檎は母の味がする
大根の味の深さを知る寒さ
妻や子にノルマは言えぬ力瘤
雛人形一年分の息を吸い
お利口な鏡は何も喋らない
ぎりぎりを守る女の土俵際
平均を燃やすと軽い灰ばかり
ためらいが出入りしている古筆筒
時 広 一 路 千代 半銭 静風 武庫坊 一壺 肇 一歩 奈美 哲矢 ヨシ恵

給料の安さだけは良い会社
 這い上がる努力空缶集めてる
 這えば立て笑顔で走る愛子さま
 一の字に大地這つてゐる蟻の列
 お願ひによつては裏へ回される
 難民は世界の地図を這い回り
 煩惱を除く写経の墨をする

城北川柳会

川久保睦子報

穰一
 ゆり子
 呂万
 狸村
 洋
 東雲
 さよ子

焼いものうまさ温さよ母の手よ
 会つた日もあつた別れの日があつた
 今年また蟻と背くらべして生きた
 頑張りがとつても好きな徳儀
 下積みがノーベル賞で湧出した
 魂が触れると明日へ湧くファイト
 鮎ひとつ策略だとは思えない
 あどけないパワーが跳ねるランドセル
 大海の色に染めたい井の蛙

典子
 あやめ
 とし子
 重人
 公一
 セツ子
 修
 志華子
 千里

海峡を越えて太鼓が響く初春
 雪の中樹液の鼓動響きます
 もう少し生きてみるかの三分粥
 夫婦春秋水の流れにそつと生き
 春の雨少し期待をかけてみる
 野良猫に春はまだかと聞いてみる
 春風と桜が祝うバースデー
 健康一番まだ元氣なり九十三
 二番煎じでもいいものはやはりいい
 順番でないから明日も生きたられる
 本番になると男の眼が光る
 百円で神を信じて風みどり
 信用は宝と思うかたつむり
 信念が女の意地かひな飾り
 信頼をされて悍馬の勇み足
 無事帰還だれも信じていた翼
 あなただけ信じて生きる大宇宙
 青信号信じて渡る羊たち
 渡り鳥自分を信じ迷わない

菁居
 民恵
 力
 節夫
 比呂子
 千枝
 史喜
 夏宏
 正風
 静覚
 半枝
 孝恵
 栄子
 敬朽
 不子
 厚子
 淑子
 一万路

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

桜散り思ひうかべる卒業を
 人生へ卒業はなく楽しもう
 就職も決つて晴れの卒業へ
 卒業の美辞麗句には歯が浮いた
 卒業のハードル確と踏んで飛ぶ
 学び舎を後に恩師へ感謝する
 卒業証書受ける笑顔に夢がある
 卒業へ風の海に權を漕ぐ
 卒業で出発駅がみな違ひ
 卒業という高い峰登りきる

鈴枝
 弘子
 静江
 和代
 豊枝
 智恵子
 久子
 公美枝
 正光
 雄々

和む輪へ珍珠一口ずつつく
 孫の目の高さになつて花火見る
 天命と素直に神に従ひてゆく
 縦結び解いてあげましょ老母の紐
 幾山河越えて昔の彩になる
 ボケ上手昔の事は口にせぬ
 ストレスを刻んで結ぶ良い仲間
 趣味ひとつとほしき命かきたてる

遠山 可住報

惠美
 純子
 多美子
 美智子
 八重子
 靖子
 とみ子
 つや子

竹原川柳会

時広

一路報

太鼓小太鼓響くのは夫婦
 よく響く呼名たつたと今になお
 夕焼けに傷心とむ鐘響く
 コン打ちの現場に響く夫の声
 響き合う二人の胸に灯がともる
 親の恩心に響く話聞く

幸子
 笑子
 汎美
 房子
 蘭幸
 幸子

海峽を越えて太鼓が響く初春
 雪の中樹液の鼓動響きます
 もう少し生きてみるかの三分粥
 夫婦春秋水の流れにそつと生き
 春の雨少し期待をかけてみる
 野良猫に春はまだかと聞いてみる
 春風と桜が祝うバースデー
 健康一番まだ元氣なり九十三
 二番煎じでもいいものはやはりいい
 順番でないから明日も生きたられる
 本番になると男の眼が光る
 百円で神を信じて風みどり
 信用は宝と思うかたつむり
 信念が女の意地かひな飾り
 信頼をされて悍馬の勇み足
 無事帰還だれも信じていた翼
 あなただけ信じて生きる大宇宙
 青信号信じて渡る羊たち
 渡り鳥自分を信じ迷わない

菁居
 民恵
 力
 節夫
 比呂子
 千枝
 史喜
 夏宏
 正風
 静覚
 半枝
 孝恵
 栄子
 敬朽
 不子
 厚子
 淑子
 一万路

少子化に加えハイミス増えている
 苦しいが何時も笑顔は絶やさない
 ランドセル夢満載し発車する
 今日はいうて別れて誰やつた
 畳の目一すじごとに日足のび
 友禪の雅にしばし立ちつくす
 窓際でリストラ策を練るピエロ
 これという策もないまま今日も暮れ
 コンビニの赤飯ひとりのバースデー
 ふくろ小路へニュースは告げる北帰行
 うなずきの合図判らぬ石頭
 未年やっぱり世間騒がしい
 豆はじけ鬼の準備も整つた
 結石が下りて晴ればれ春気分
 男の肚割つて見せるも策のうち
 金策の苦勞知らない二重あご
 その時に女が見せた馬鹿ちから
 人質にされて手がでぬ拉致家族
 鬼は人好き節分に逢いにくる
 なんのかんの言うけど日本の国が好き

政子
 東雲
 トヨ子
 あい子
 達子
 高栄
 柳弘
 春蘭
 千歩
 綏子
 はじめ
 久留美
 昭子
 正敏
 順三
 史風
 柳一
 ひさ乃
 倫子

待つ人があつた昔が華だつた
オーブン戦野球ムードに茶の間わき
結び目を解く指先に老いを知る
ムードなど感動うすい歳悲し
雑談のいやな話へ口結ぶ

勝つようにしつかり結ぶ靴の紐
熟年のムードが落着く影法師
昔から酒と踊りて明けた国
子が背く昔私がしたように
わたしにもはたちがあつた月おほろ

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

兵八郎

卒業の小舟押し出す時化の海
熱五等極生ビール類に出る
挫折感重たく開戦のニュース
爺に似た孫だと言われ北叟笑む
遣伝子が溜め込んでいる戦好き
口福はふたりで牡蠣の直火焼き
オール電化なのに原発嫌われる
いやな里から明るい町に移り住み
授業では正しく税を教えてる
五時までのロスを五時から取り戻す

晴翠

輝夫

水笑

高明

虹視

四郎

正剣

鹿太

鹿太

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太報

春風や吹き溜りにも詩がある
桜咲く近くに住んで忙しい
戦争はやめると叫ぶ砂嵐
老漁夫が見送る孫のまぐろ船
舳い網切れてひとりの船出する

その

幸子

江美

鹿太

美代子

君代

康子

朝子

かほる

富子

美紗子

富美

哲男

芳郎

可住

漁り火の船出に急ぐ男達
夢の中笑顔の父に逢えまして
それぞれの新たな旅へゴーサイン
春雨に邪魔しないでと桜花
里帰りこんにはいと子に言わす
野良猫に情が移つて日々多忙
王様の姿色味松鯛
ドラの音に暫し別れの手が揺れる
一声を掛けて漕ぎ出す渡し舟
春ですぬ窓打つ雨もリズムミカル
逢うごとにだんだん服が赤くなる

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

私を揺らすと噂舞い上る
まだ噂残るふる里素通りす
底辺に生きてうわさともく静か
ボチ吠えて庭を掘つたという噂
よい噂だけを信じて嫁に行く
噂になり天下御免の二人連れ
手作りの主人の棚はすぐ落ちる
手作りのオシナ一念閉じ込める
手作りに慣れずに育つハンバガー
終章はわからないから日々楽し

アキ

あずき

香住

喜美子

欣史子

弘直

シマ子

加津子

能子

慶子

三幸川柳教室

古久保和子報

舌すべりべそかいている紅雀
使い分け上手い舌ですうふふふ
にこやかに諸事万端を仕切る舌
舌を抜くエンマ近ごろ過労気味

一步

当代

利治

鉄治

カズ子

よし子

信子

耕子

耕治

亀与子

孝一

満寿蔵

正治

澄子

求芽

無言劇舌の先から凍りだす
告白へいつもの舌が回らない
舌下錠の早さで皮肉効いてくる
利き鏡の舌は産地を見逃さぬ
ゴッホ展観に行くための一夜漬け
ビエロの芸泣きたい時も笑つて
お多福の面が無芸をカバーする
不器用な女に耐える芸がある
ギャグひとつだけでブームに乗つた芸
虎落笛風の芸術かも知れぬ
夕日という芸術家には泣かされる
名優は後姿で芸をする

章子

桂香

栄之進

武

マリ子

靖子

公子

次根

三千子

和子

町子

義男

登美代

幸

豊太郎

千秀

清史

保史

イセ

准一

義雄

朱夏

起世子

さち子

みね

求芽報

春蘭

三条の橋のにぎわい春鵲

春蘭

京都塔の会

都倉

春蘭

廢村を告げるファックス湖北雪
思い出の花見の頃が彷彿と

シートより欲しいシルバー専用車

し残したことのあれこれもう八十路

ペンシヨンのロビー小鳥の声で明け

苦渋満つ肩が世界を駆け巡る

眉開く安堵が春の風誘う

九回裏怒眉を開く同点打

眉引いてやっとな掛け顔になる

下り肩ノーベル賞の人の良さ

文楽の眉が今わの際に泣く

切り干しに温い日向の香が移る

切るよりも受け入れておく老いの愚痴

千切れるほど手を振り送る里の母

指切り秘めた思いがまた疼く

治療室怖い道具が置いてある

職人の道具に自負が込められる

昔ながらの道具大事に光らせる

引退をしても大事な道具箱

包丁が舞うに任せている刺身

棟梁の腕に逆らわない道具

釣道具みるたび亡父の声がする

人形は歳をとらない腹話術

思慮深いお方と思う道具箱

亡母の愛した茶道具と向いあう

尼崎いくし川柳会

春城武庫坊報

今が匂イカナゴ釘煮また送り

シャッターを押すのは今だ大落暉

節子 しづ子

ライバルの業績褒める通夜の席
趣味合つて老後楽しむ友が居る
年金と我慢を語る日向はこ
太閤の気分で散歩花の下
春の雨午前三時の救急車
絵馬の背につこり笑うくら咲く
沈丁花実の作らない花ですか
一行を問いつめて散る黄楊の花
人生の幕間で見せた乱反射
マフラーの一本ほどの寒戻る
春風を溜めて陽炎が揺れる
医療費上げフランスパンが硬すぎる
吊り革の視野でいくさを見ていよう
川柳塔鹿野みか月 土橋
忘れてた花壇のすみにスマレ咲く
老後にも堂々と咲く趣味がある
辛辛苦く花が咲いてる卒寿坂
夢の花ひらいてくれる種ひとつ
大輪を咲かす根となり茎となり
美しく咲ける牡丹の咲きどころ
庭先にみんなが褒める花が咲く
毒の花咲かせてまでも護りたい
葱坊主咲いて青空謳歌する
満開に咲いた笑顔の角隠し
体内に咲くバラ持った微笑みか
嬉しさに心の花が早く咲く
銃砲を聞いて咲くのか野の花よ
ドキッとしへそくり場所を変えていた

東園 幸子 満寿蔵 勝巳 薫 寛之 正子 光穂 昭三 比三 久子 和子 芳子 螢報 武子 保子 喜子 弘子 八重子 孔美子 節子 八重子 立亥 久枝 宣子 房子

映像を睨んで医師が黙りこむ
ドキッドキッとさせるわたしの恐い夢
真夜中のサイレントキック飛んで起き
口下手なわたしに槍が飛んでくる
お袋がどなさんかと言いだした
宿命と言えど意を突く空に遭う
和紙を貼る母の面影貼るように
少子化に祭の掟ゆるくする
燃え盛るために泉が湧いている
泉から硬貨が湧いてくるように
幸せの泉たつぷり張る乳房
ああ戦争ひとと泉でつくれない
衰えを知らず昔が湧く泉
あるがままに生きさざ波のたつ泉
疲れたらおいで癒しの泉もつ
彼岸まで都はなしをする泉
かわはら川柳会 上田
冷凍の古い種でもよく育つ
種をまきその成長に気をもらう
種まかぬ雑草生えて手間かかる
純情な種春雨にポツと咲く
種火まで根こそぎたやす不況風
やさしさが生まれ出そつな種を蒔く
正義感強くていつも損をする
価格破壊正札という死語ができ
色顔を見て正しいと巻きこまれ
こつこつと正直の春まだ来ない
正論をはかすにおよぐ水面下

実満 しみ子 かつ乃 菊乃 公人 諷人 茶子 睦子 かおる みどり くに子 汲香 和子 彩子 みさ子 富久江 俊路報 かず恵 聰 登生 悦子 静子 泰良 道子 好道 余史子 寿子 雅子

正座して聴くから妥協浮はない

川柳塔なら

坊農

柳弘報

俊路

スビーチの番がくるまで酒控え
手鏡に紅引くこころ覗かれる
竹の節おとき話が眠つて
人間の群れが一番こわい群れ
黒潮が育てた土佐の鯉節
センサーで覗くあなた胸の内
黒岩の続編にある人間味
人だから覗く揉め事好きな人
人間の形で乾く作業服
過ぎた日に覗きたくなるEメール
ライバルに覗かれていた虎の巻
気もつかいお金も遣う披露宴
堂々と泣こう笑おう人間だ
酒めでの折節にある雪月花
覗いたらあかん言われて覗く僕
秀才の理屈にほしい人間味
雑念を神が覗いている座禪
思いきり笑える人でよかつたね
肩ぐるまアトムの世界覗かせる
地下鉄の出口のぞいてから乗ろう
地獄など覗きもせずにあると言っ
万遍を迷う人間臭くなる
青竹の節目に汗を溜めている
笹竹に今が節目と諭される
アイヤ節唄うおんなの底力
幸せなバラが幸せ触れ回る

博一 カズ子 春蘭 登美子 秋泉 佳子 惠美子 理恵 春雄 真理子 富子 冬葉 孝子 明子 茂雄 幹子 弘風 朝雄 秋夫 洋子 良一

日本語を話せる嫁を披露する
天からの喝人間の愚を叱る
晩節を汚さぬうちにゆずる椅子
白寿の宴 母が仏に見えてくる

打吹川柳会

大森

孝惠報

(山) 卓

印半纏駅でお迎え奉る
斬られ役刃の下に美学あり
迎え火を焚いてあの世と対話する
古稀迎え二人三脚寺めぐり
真つ先にお客迎える一歳半
祝まれても辛抱します二日酔
姑より嫁の睨みがモロに効き
飲み会で酔わないうちに来た迎え
睨むなよ俺はいっぱい銭がある
睨まれるほどの大金貯めている
ばあちゃんも睨みをきかせ孫嬢け
冗談のをついたか睨まれる
わくわくとひそんで待った路地の角
女文字わくわく見たら請求書
絵手紙がわくわく春を連れて来る
わくわくと飽負つたり降したり
万物を迎える春の戸が開く
シンデレラ迎える馬車の南瓜たち
合格の知らせ総出で迎え入れ
わくわくと書いた届も今は反古
両手を広げ春を呑み込む爽快さ
軽トラでダンブ追ひ越す爽快さ
爽快になれぬ一匹の蚊がいる限り

玲子 克枝 美美子 善江 照彦 重忠 幸香 勝見 楨元 かつみ 久芽代 博丈 しろう 泰山 よしえ 貴恵 節子 和子 玲坊 美知江 龍枝 三津子 順子

迎え撃つ敵のハードル高くする
疑いが晴れ爽快に笛を吹く
空も風も海も飛魚もブルー
恋に勝ち青葉若葉を二人いく
ビー玉を埋めたところを掘って見る
ジョギングの前の女を追ひ越した
爽快に飛び交う朝のぐ挨拶

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

ゆつくりと回転椅子の日曜日
ゆつくりと歩いてほしい親の背な
留学の孫がはばたく五月晴
一日が終りゆつくり仮面脱ぐ
ヤジロベえゆつくりながら意思表示
停留所バスが素通りする寒さ
ゆつくりは大敵ノルマついてくる
二次会へ杜甫も李白もついてこい
二次会で男を磨く飲めぬ奴
縄張りを言わぬ水輪の展がりよ

川柳塔きやらばく

福代

天雀報

幸子 季芳 石花菜 友楽 芳光 孝恵 惠美子 好栄 民子 ちよえ はるみ かつ子 聖子 博利 清泉 白汀 亜弥 てい子 恵子 やえ 富美子 初枝 晶子 すみえ

日程に次つぎ仏事彼岸月

とんど焼きこのかた向いのお嫁さん

春なのに藪バラ窓叩く

樽を割り熱い握手の社長賞

癌の友にスカーフ選ぶ春の彩

画の手で握手をくれた知らぬ人

わたしより倅せそうな犬を抱く

明日の日はわからないけど桜もち

あした吹く風にそなえて樹を植える

駄々くささ治らぬままに生かされて

春霞向こうに山があるはずだ

祥月命日位牌も心なし震え

生きている老化は自然あすの日も

一枚の絵が見つからぬ春の夢

アメリカの驕り過熱は許されぬ

脱皮後の変化が怖い反抗期

川柳大阪

高木

信詮報

雪どけに目にもあざや寒椿

運転手今は相棒テープだけ

豆紋り祭だワッショイ孫と爺

キカイよりマメつくつても書くがい

おい相棒しつかりせいに影にいう

霜かぶる美山の野菜たくましい

たそがれる心に拾う人の味

銀行の破産気にするほどなもの

湯豆腐で焼酎あおる父平和

四十年割鍋綴じ蓋支え合い

ロケットの破片をインターで売る怖さ

春枝

天雀

八重子

瑞枝

寿々子

千繪

杏

千春

邦顔

ふみ

千代

清人

田鶴

なみ

日枝子

功

すがお

ひさし

多香

かよこ

美花

柳昌

鉄心

司

川童

照月

拾いものだった夫の背を流す

倒産の波に沈没タカラブネ

母さんはいいことばかり拾う車

相棒の骨を拾ってやる気概

にんげんを続けています医者嫌い

ああ至福地鶏をあてに雪見酒

浪曲に酔い旅に酔い酒もまた

せつないわ歳の数だけ食べる豆

太閤は青い TENT を何と見る

リハビリの箸でつまめぬ豆一つ

春よ来い花粉連れずに春よ来い

度忘れの言葉を拾う昼の月

苦と楽を一緒に拾う金と酒

相棒の笑顔で今日も無事終わる

へだてなく客を迎える自動ドア

苦と楽のハザマで拾う人の情

一億の包みを拾うことは無い

幸せも豆もじつくり母は煮る

ゆたなばで温もり育ち踏み世間

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

納得がいかに時効というニュース

産れたての児に戦争というニュース

わたくしが死んでもニュースにはならぬ

ニュースニュースと孫が百点見せに来る

過労死のニュースへ洗う作業服

休刊の朝がちよつぱり物足らぬ

イラクより老母の暮らしが気に掛かる

ニュースにはならないほどの喧嘩する

重人

洛醉

一步

青道

柳弘

まつお

楽子

圭

兵庫

宏

隆司

春蘭

章久

喜楽

民子

朝子

笑風

一風

信醉

稚代

輝子

大輪

三男

裕美

あき子

克子

英子

寝たきりに知らせるニュース噛み砕く

町内のニュースはおばあちゃんに聞く

超未熟児のニュースへ折り深くする

有線のホットなニュース過疎包む

血も凍るニュースの記事に慣らされる

ニュースにはされないように逢いに行く

耳寄りのニュースへ先ずは週刊誌

手に汗を握りニュースを見る平和

お見舞に仕入れたニュース持つてゆく

病院のテレビニュースで医療ミス

温もりが欲しくてたむろするのです

いつそなら溺れてみたい温い胸

寺参り心の温い人と会おう

平日は職安通いしています

平日のプランコ人を恋しがる

のんびりと土日を外すひとり旅

平日は我と向き合う主婦稼業

平日に自由の女神やつと来る

平日の妻の顔知る定年後

出勤に蜚を聞く耳がない

平日に安楽近の旅をする

むらくも川柳会

毛利

盃を三杯目まで妻も受け

妻となる日の盃が身に沁みる

盃の底に放浪癖がある

盃で喜びいっぱい百寿歳

大盃を回して高砂朗々と

結実

明子

さち子

富美子

鉄治

佐一

正博

利子

和子

美子

和代

優子

寿子

豊太

保州

紀久子

たつお

和

伶

よしこ

智三

幸報

雨石

秀子

秀夫

彰

克子

盃が回るにぎやか婦人会
盃を重ね重ねて今日の愚痴
盃に亡き人偲び散るさくら
盃で心を結ぶ酒の橋

交際の盃返す退職日

とび入りと盃かわす花の下

盃は働き者の指が好き

盃に見果てぬ夢を注ぎこぼす

盃に花びら浮かぶ句もつかぶ

盃に女性さまま酒楽し

盃が顔から顔へ歩き出す

盃も午前様にはつかれたよ

飲み口の良い盃でたまされる

サークル檸檬

西出

楓葉報

天守閣 男に広い視野がある

こんな機能あつたと捨てる頃を知る

主婦業に企業努力が欠かせない

天守閣 鼻折れた面吊つてある

栄枯盛衰人とは哀し城の松

これからが真剣勝負 終の章

千と千尋 不思議な城の夢をみる

城跡へ武将となりて踏み込まん

一言の挨拶もなく来た病魔

花吹雪 人の心は分らない

雑兵の足跡もない天守閣

酒とろりさ迷いながら帰る城

睡魔参上 追い払う一眠り

大阪城 余生過こそと呼んでくれ

明 朗
ます美

幸 寿

信 夫

昭 子

恵 美子

安 次

安 子

定 子

安 男

茂 光

昌 子

愛 子

みな妻のもの本丸も二の丸も

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

生え抜きの四番育たない悩み

育てたらメダカも鯉になりますか

前奏が鳴つてる震えとまらない

披露宴一番あとに父の歌

ナツメロはオレのロマンだ青春だ

心経をわが歌として生きており

巡業の力士が聴かす洪い喉

お経より演歌のうまい和尚さん

手と膝で演歌唄つてゐる音痴

防空壕で春を歌えぬ子らがいる

相談を肘掛け椅子が蹴散らかす

いやな相談なんでも言える友が居て

この冬も相談相手ひと減り

相談の相手がほしい木の芽どき

春ですぬ旅の相談待つてます

相談をしたいプロには金がいる

相談が少なくなつて子が果立ち

どんぐりが寄る相談でまもらず

別室で打算と打算からみあい

ロボットにやがて相談するだろう

パーティーへ心も化粧し出掛け

金集め票集めするパーティーで

パーティーは紳士淑女の顔になる

祝賀パーティーじつと我慢の泣き上戸

合コンとやらで射止めた玉の輿

鳥鳴いてスマイルはこべも春の宴

希 久子

六 点

美 代子

桂 子

敦 子

ロマン

専 平

たけし

一 壺

かつみ

ダン吉

忠 宏

昇

昭 平

さとみ

りつえ

悦 子

章 司

庸 佑

重 人

扶美代

遠 野

敏

喜久子

志 洋

いさお

みつこ

パーティーが縁の貧しい王子さま
イカナゴが春の訪れ知らせます
テポドンにおちおちできぬ射程距離

くらぼ三川柳会

前坂なお美報

鳥籠に飼つてはならぬ鳥が居る

居心地が良い鳥籠に住んでいる

一家族のるんな娘が輝いて

るんなの土筆袴を着けて来る

若者の手助けしたいから力む

力めない高血圧で破れそう

真夜中の男女干渉するなかれ

障子越し真夜中の月語りかけ

町村の合併例を見習った

よそさんの例は王虫色に映え

ひっそりと夜中は丸太動かない

油断して小鳥殺しの雪に遭う

本流をはずれた鳥の一人旅

るんなを飛んで帰らぬ竹とんぼ

るんなと絶好調のツキがくる

坂道に運命線が力みだす

正論が力んだ拳うならせる

悪い例ばかり私に当てはまる

悟られぬようにるんなしておこう

真夜中に病む妻の息確かめる

真夜中の蛇口切ない声を出す

教科書にない例題も考える

慣例も時の流れが変えてゆく

昼間にはできないことをする夜中

泰 子

フ ジ

久 仁子

幸 子

あらた

キヨノ

よしえ

はるお

涼 子

螢

悦 子

小 生

帆 雀

美 智子

一 眸

菜 美

静 生

みち子

小 鹿

富 子

久 江

な お美

重 忠

克 枝

和 代

伝 平

一 揆

父の例取つて息子に言いきかす
食べられて最後は鷹の血となろう
るんるんの羊なかなか眠れない
好き嫌い言つて夜中を困らせる

西宮北口川柳会

黒田 能子 報

そもそもは見合ひ写真に惚れたせい
押すだけを頼んだ写真顔がない
レントゲン胸の悩み写さない
無造作のスナップ本音語り出し
セピア色アルバム整理はかどらぬ
卒業写真前に出る子にかくれる子
ふところの深いお人と見てる海
遍路杖老いて深める夫婦仲
深呼吸わが晩節を汚すまじ
深いこと聞かず一献かたむける
根が深い運命線が邪魔をする
泥深いたんばに育つ蓮の味
やつかみに却つて疵を深くする
迷い箸言えぬ悩みがあるらしい
ライバルのひと言深く胸を刺す
深い河かつばも流れる事がある
あうんの仲深いえにして五十年
笑つたり泣いたり絆深くなる
深海に静かにねむれ散骨葬
実力と人気がなぜかミスマッチ
人気という魔物に負けぬいぶし銀
ぶらぶらとしてゐる彼に修羅場の目
振り子ぶらぶら里の柱の古時計

ふみ子 遊子 公弘 能子 房代子 美代子 嘉彦 文 トミエ いたる 求芽 春蘭 正坊 いわゑ 孝一 奮水 松煙 澄子 江美 キク子 光子 能子 貴代子 光久 富喜子 哲男 たす子

お守りがぶらぶら春のランドセル
もう少しこの世でぶらぶらして見たい
充電中妻の機嫌にぶらさがり
株主の顔で蛸やき焼けてくる
いちびりが過ぎて猫にも疎まれる
立て付けも狂い二度目の倦怠期
母さんが一番小さい影法師

南大阪川柳会

吉川

寿美報

哲子 てる 石舟 晴美 鹿太 曙蝶 ム女

志きめて訓練我慢する
草焼きが済んだ岸辺に草木萌ゆ
大空に夢泳がせて初節句
ほんほりへおんなは夢を継いでいく
大切な人を持つてしうぶの湯
これからの事考えて出す寸志
鉄の意志隠して道化演じきる
細波を立たせて見たい倦怠期
悲しみをいやしてくる細い波
細波で済みそうにない妻の乱

川柳塔みちのく

小寺 花菱報

大仏の耳にも春の細波が
春風が細波を描くモノの池
平和への細波でかくうねらせる
細波を掬うと春の音がする
顛末を沈めて細波の静か
貧者の一灯緑の羽根へ志
根回しの効いた仲間へのし袋
志素直に受ける好い笑顔
志上り列車を待っている
百均の食器も大志抱いている
ポケットにじつと育てている大志
抱いていた大志が行方不明なり
闘志には勝敗がない甲子園
祇園街粋な着物と下駄の音
夢二描く粋な女の憂い顔
父親は由緒正しい無粋者
羊水の神秘が生命育てあげ
春雨に草木も鳥も唄い出す
細波が起きた夫婦に子が宿る
鯉のぼり一年ぶりの風の味

朝子 直子 柳弘 雅文 シマ子 なぎさ 柳伸 重人 千里 ダン吉 寿美 遠野 弘泰 萬的 たもつ 志華子 章久 ひさ乃

子を叱りそこから続く孤独感
ゴム毬も老けて会話も弾まない
鉛筆を削り直してまた歩く
人の歯の削る音でも身構える
今日からは戦の言葉削ります
一撃毎に菩薩が生きて来る版画
寡黙だが父は背中を見せてくれ
削られてこけし津軽の顔になる
会話から今日が始まる花鈴
鉛筆の芯が短くなつて春
胎の子とお話中の手編針
人間がにんげん削るスキヤンダル
竹トシン父子で作り血が通う
少し喋つて少し動いて老い二人
削つて削つて仏師菩薩にたどりつく
不景気の風は晩酌一合半
爆弾で地球を削っている悪夢

東雲 叡代 朝美 久子 三男 明正 頂留子 洞庵 庸佑 あすろ きよし ヒサ子 てる 隼人 順風 慕情 銀波 ふさゑ 雅城 愁女 ツネ 井蛙 黙人 千加子 花峯 一花

大声の母の会話に裏がない
疑問符を削る女の泣きぼくろ

川柳塔まつえ吟社

津川

紫見報

人柄もフリーになると丸くなり

フリーター自由ばかりで金がない

明日という宝は捨てぬフリーター

本当のことはフリーになつてから

フリーにはなれない主婦という仕事

フリーだと自由に書ける裏の裏

ローン終えそれから家族丸くなり

それから少々嘘も混ぜてやる

それからが修羅場になつた僕の家

それからが風の知らせで聞いている

ストレスが溜まりそれから不眠症

目を病めば風の渡りがよく見える

虹の橋おとぎの国の夢をのせ

丸木橋渡つて遊んだ川が泣く

道聞けばあの橋渡れと田舎道

不器用な夫婦が渡る丸木橋

渡り初め今日三夫婦の晴れ姿

嬉しいな門につばめの巣が二つ

門札でまだ頑張っている仏

獣道哀しい門に辿り着く

たたけば開く青春の門がある

門外不出極秘の印が押してある

門灯がぼんやり待つて午前さま

一冊の本心豊かにしてくれた

五楽庵

ちえこ

注 湖

浜 丘

桂 子

昭 二

幸 子

義 良

芳 山

知 恵子

静 恵

多 賀子

薰

小 生

邦 代

政 子

治 代

秀 子

き み子

主 詩朗

登

茂 美

き みえ

操 子

山の上豊かな空をつかまえる
職引いて豊かになつた胴まわり

桜さくら豊かに春を演技する

豊かさのスーツ貧しさなど知らぬ

豊かさは真珠を抱いたあこや貝

翠 洋 会

六 吹

義理固い昔の阿呆を保つて

燃える兵生命を保つこと忘れ

保証期間過ぎて生きてる人多し

ママ達が丁丁発止保育園

アイドルと同じ髪型してる孫

絶対にアイドルとなる愛子さま

勤勉のアイドル二宮金次郎

日本のアイドルゴジラ松井君

踊りの輪蜘蛛の子散らす通り雨

いのち散らし利権漁つていくさ

和ませてやがて静かに散る桜

散り散りの家族に春はまだ遠い

散り急ぐ柳友惜しむ花手桶

人間に生まれゆつくり散る覚悟

未練など書くまい恋は雪のよう

柳界の古希になつても雉魚は雉魚

真つ直ぐな道でよそみをして困る

友の名の短冊探す通り抜け

寒暖のきつさに今日も身構える

小道具に独楽取り出して孫を待つ

荷にならぬいい思い出をたんと持つ

物干しに家族出揃う雨がかり

俊 一

たけし

房 子

叮 紅

紫 見

東 雲

春

蕉 子

孝 一

伽 羅

舞 夢

正 坊

寂 子

桃 花

富 子

志 華子

尚 士

久 峰

日の出

照 子

恭 昌

蛙

会 美

さと美

正 雄

石 舟

絹 子

このままでいたい小さな勘違い
中年の頃はまだまだ夢があり

ビリオドを約束させて来た小指

それぞれに老い方がある髪の色

長 柳 会

加 島

移りげに時代に添えぬ父の下駄

やがてくる熱愛の日も終るとき

新入りは六十路半でも金しほり

ぶかぶかの服で中一入學す

熱つく未来語つた日のあな

新鮮な風に出逢つて深呼吸

歳を重ね熱血漢も丸くなり

算盤は時代おくれと人が言う

満開の桜に微熱移される

新しい音符をハモる春の森

新天地へ旅立つ我が子はマスク顔

同窓会学生時代にすぐもどる

青い目に茶髪も見馴れ新時代

新入りのゴジラ満塁ホームラン

新しい時代をキャッチ呱呱の声

新聞はじっくり読んですぐ忘れ

アルバムに時の流れを見る法事

焼けこげがみんなが好むかやく飯

あの時代不惜身命光つてた

時代代々黄門様のファン減る

いい時代両手たいて酒かわし

新社員の涙を見る眼が光る

新太郎の涙を見る眼が光る

昭 義

理 恵

澄 子

英 美

輝 子

淳 司

潤 子

幸 雄

靖 子

たけし

ひろし

一 慧

富美子

ルミ子

も こ

マ サ

正 一

正 美

史

けい子

良 男

正 男

武 男

輝 治

芳 野

和 代

込みいった話を冷ます熱いお茶
着メロに熱い想いをのせて春
この時代皆懸命に生きている

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

希望まだ捨てかねている地輪の目
ニイハオに負けて灯を消す町工場
それぞれの春スタートへ応援歌
ひとときを校の下にいる平和
喋らねばランクは少し上なのに
お揃いで是非にと誘う花便り
嫁が来るただそれだけで胸はずみ
花便り北へ北へと延びる貨車
定年も老後もなくて貨車を引く
貨車だって新幹線を走りたい
父の貨車やさしい花をつんでいる
現実を越えてアニメの貨車に乗る
貨車客車タフなS/L人気者
貨車の屋根からふるさとへ雪便り
馴れ合いをひっくり返す熱い舌
流された数だけ傷に馴れてゆく
馴れすぎて禁句ばりりと転げ出る
馴れなれし奥さまと呼ぶ選挙前
猛獣使い生れた子から馴らして
ダイエツトしていいのにやせる脳
しわくちやの脳もやつぱり生子引
煩惱を少し薄める朝の粥
晩学へ老化の脳に鞭を打つ
大脳が怠けて今日も物忘れ

三和子
直樹
敬二

弘直
已代一
加津子
きよみ
幸生
柳宏子
更紗
シマ子
ますみ
ダン吉
度
昌子
頂留子
春蘭
欣之
弥生
宏至
きらり
東雲
ミツ子
柳伸
民
ひさ乃
菜月

ボーダラインぐらいいは越えて欲しい脳
洗脳をされた顔だと見抜かれる
外出日掃除洗濯手抜きする
外出へ娘の携帯持たされる
明日の風もらいに弾む万歩計

川柳さんだ

北野

ふくらんで行先告げぬシャボン玉
降りるたびやげふくらむバスの旅
ふくらんだ化粧ボーチの片想い
里帰り靴もふくらみ身も弾む
検診がふくらむ夢に待ったかけ
満開の桜ひとひら吉予感
花吹雪私の悩みつれてつて
石垣をキャンパスにする桜草
倒産のうわさを聞いている花見
赴任地へこちらは桜咲きました
オルガンでさくらさくらを弾いた姑
甘くない白球に託し打者に立つ
孫娘なくさめたげると電話口
五十年辛い甘いで時が過ぎ
雨宿りついに宝石買うはめに
若いから悔し涙はバネにする
虎が勝つ今日の明るいニュースです
失敗も老いの特権笑つとく
無我夢中走り終えたら膝笑う
チグリス河またも歴史に一頁
ライバルに脇の甘さを突つかれる
風船が百個もあれば飛べるかな

庸佑
とみ
欣子
千里
一風

哲男報

真由子
千恵子
修
朋月
千代子
哲男
一弘
久恵
開子
サクラ
俊昭
正和
泰子
一之
藤朗
千代

ふくべむら川柳

村上

信子報

留守電にメールを入れて返事待つ
絵手紙の返事メールで間に合わせ
塾通いさせて老後は見放され
ブッシュへの返事九条色褪せる
世界一何より勝る母の愛
世界一おいしい梨を夫が継ぐ
縁談へ良い返事なく春が過ぎ
世界一長生きしてもどうせ死ぬ
一升を溢れた米は切り落とす
もう少しゆとりがあればゴッホ買う
嬉しいと母の涙が止まらない
蛙が飛んだ燕の子が飛んだ
美を競いながらは散る身桜花
札束を見ると変身する女将
口惜し涙溢れる時は上を向く
池で蛇に変身女物がたり
赤鬼に変身した花の下
変身しても根っから貧乏性
飛び出してそれから気付く忘れ物
大変だやがて金庫が満杯だ
疑問符がついてあふれる裏話
オアシスが溢れ砂漠に星が出る
苦も楽も変身できる歳になり
蔵の戸を開けつ放した三代目
一本の竿で地球を釣っている

岩美川柳会

石谷美恵子報

蟹郎
雅女
よしえ
孝男
重忠
きみ子
かつみ
公乃
完司
一京
はるお
一粋
克枝
菖子
忠良
石花菜

ゆとりから笑いと夢が湧き上がる
棺桶でやつとゆとりの顔になる
感情が溢れ化粧も無駄になり
戸締まりはいらん平和な過疎の村
やさしさを忘れ女の戸が軋む
雑草がバラになる日を夢に見る
宝くじやがて私に当る頃
健康になつてゆとりを取り戻す
変身をもつて若さは戻らない
裏木戸をノックしている春の風
古井戸はこの家の浮沈知りつくす

富柳会

池

森子報

カリスマが燃えてデフレをぶつ飛ばす
抽出しの奥にあの日の破裂音
重い日も軽い日もある命とは
花一輪重役会議すんなりと
奇手奇策でのひらひろげ裏返す
越境の花が奇麗で切れぬ枝
変革の枝葉になつて春を待つ
風神雷神男は空を馳けるもの
合格の枝に結んだ有頂天
今日いちにち良ければそれでよい歳に
今更には良ければそれでよい歳に
枝振りを競い春よ羽根の意地
かくしても五弁の赤がしゃべり出す
理由あつて背く覚悟の風を読む
春なのに重いニュースの社会面
安い酒押り不満を溜めている

主 一郎
季 芳
睦 子
静 生
一 瑠
節 子
た ぬ
照 子
裕 子
美 恵子
和 子
ア キ
扶美代
冬 虹
巳代一
鐘 造
登 子
夕 子
欣 之
奈保美
洋 介
和喜子
亮 幹
浩 子
初太郎

割烹着脱いで才女に早変わり
定位位置に七福神のいる安堵
成りゆきで女心は火にもなる
重病の人に笑顔を返される
真実はひとつ無口の胃が重い
風花に乗つて来ましたラブレター
風はいま乙女らしさを連れてくる
易々と罫に嵌つた雨の夜
リストラにやつぱり俺は枝だった
虹消えて笑いきれぬ花の首
安心がはしくて酒をのみすぎる
言い訳を詰めた袋は不燃ゴミ
改めてプラス志向の春にする
真つ直ぐに弾んで春をつれてくる

川柳ねやがわ

平松かすみ報

耕せば畑もほつと深呼吸
秀才と言われ畑違いとも言われ
農園で心通わす核家族
耕した畑が夢の種を待つ
携帯と禁煙世相騒がしい
大喧嘩もう仲良しの縄電車
世を騒がす事件に慣れてゆく怖さ
騒音も便利な場所で慣れてくる
騒いでも妻の尻から抜けられぬ
選挙カー今赤ちゃん寝ています
冥土への旅は近道避けて行く
牛歩でもいいさ近道などしない
近道より花のある道歩きたい

帆 雀
ひろこ
花 梢
深 雪
紅紫朗
春 蘭
一 夫
誠
たかし
鬼 焼
宏 至
かなこ
萩 乃
森 子
柳 弘
洋
朝 子
三 峰
一 笑
さち子
弘 風
弘 清
弘 一
修

近道は教えぬ父の自負がある
色付いたレンズで人を読み違え
じつくりと聞いているレンズ拭きながら
コンタクト私の社会が広がる
遠近中レンズに映る悩み事
取り替えたレンズに見えてきたまこと
妻の目は魚眼レンズが隠せない
正直な心のレンズ持ち合わせ
心の奥深くレンズを母は持ち
帯といてくつろぎたから難の段
結び目のゆるみに気づく春の冷え
平和ボケたまちゃん戸籍贈られる
年金をリュックに詰めて一人旅
キルト刺す女の折り風運ぶ
現実にユダとおぼしき人の影
美女の手で起されてから転ぶ癖
無農薬野菜の顔に艶がある

熊本川柳会

高野

宵草報

祝杯に妬み心が溶けきれず
カタカナ語に侵略される日本語
植木市数百年の横仰ぐ
春暖を待つ床の間の軸を換え
ソプラノで挨拶してゆく上機嫌
アメリカは戦争好きが多すぎる
時計に駆使されてひとりの暮降る
家計簿は赤字まだまだ呆けられぬ
疑心暗鬼敵も味方と同じ色
補聴器が捨てた噂も風に舞い

メ 女
庸 佑
亜 成
高 榮
順 三
博 泉
忠 央
かすみ
一 風
とし子
あやめ
たもつ
紗置子
冬 葉
利 昭
祥 昭
俊 子
あや子
久 子
百合子
エツ子
義 申
百 笏
清 香
柳 詩
とし子

妬まれるほどの幸せ掴みたい
春だから居眠り列車通ります
疑いが次第に闇を深くする
もつともな理屈の中にひそむエゴ

川柳クラブわたの花 吉村

一風報

子は巢立ち胡坐をネコが一人占め
逆上り出来てにつこり空仰ぐ
古稀からのドラマは愛のクロスワード
過ちも百年過ぎれば皆知らず
冬枯れの心にちよつと愛の詩
閑白も洗脳されて猫になる

(馬) 宏

一風 幸枝 晴美 俊子 恭一 奈良司 友甫 正純 一道

二次会も上司サカナに盛りあがり
大の字になられて勝負ママの負け
大フィルを聴いた平和がありがたい
紫煙の輪吹かし大人となる背伸び
日溜りへ老い二人乗る観覧車
流水に青空揺れて春うらら
つくしんはわくわく踊り出る大地
砂嵐戦止めの神の声

(本) たえこ

赤妙子

この先は流れにまかす花筏
夢と欲持っているから明日を待つ
春雨に片袖濡れてみたくなり
旅の宿友それぞれに葉呑む
ジャンボくじ元がとれたと大騒ぎ
穏やかなニュースを探す虫めがね
しがらみに喘いで走る父の貨車
スナックに生命を洗う水がある
定年でまず脳味噌を取り替える

ますみ まさと いつふみ 義明 春江 順生 知佐子 美代子 民 明 八寿子

大寒過ぎて春に追われる梅便り
逃げないで向かっていけと父の愛
よく回るのは脳よりも口の方
なかなか握手できない鬼もいる
大好きなあの娘のそばにかれが
リストラへあぐらをかいて思案する
まろやかな味とじこめる落とし蓋

岬川柳会

八十田洞庵報

パートナーも足もつれ出す夫婦坂
人生のどたん場越えた折り返し
永遠に息重ね合う夫婦岩
息合わぬダンスパーティー夜もすがら
鐘が鳴るのか撞木が鳴るやパートナー
どたん場で白票という自己主張
初曾孫部屋にやさしい音を吊る
ほつとする母と女房の居る茶の間
楽譜見て歌っているのになぜ音痴
見連えるほどの女になった姪
どたん場でやつとする気が湧いてくる
庭に咲く椿にもある色違い
介護する主夫歌に酔うティータイム
いや勝る美女の合一升より
奥さんも這いつくばつてわらび採り
違えと怖くて検討しますだけ

年子 和香 みやこ 和美 倅子 勇 令子 茂平 里子 洞庵 とみ 桜琴 昌夫 富美子 蛙城

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

止められずうちの息子もホテル族
負けそうな気配 涙を見せておく

タミ 蛙

散らしたがやがて痛みが来る気配
気配すら見せず寄りつく貧乏神
車間距離つめる気配はない女
白封筒 恋の気配が少しだけ
客らしい僕は朝からほり出され
降りそうな気配お向かい干し布団
気配りが過ぎてストレス溜めている
農作業見るとすると大違ひ
菜種梅雨 作業手順にひびきます
軽作業 手よりも口がよく動き
メルヘンの世界 地で行く二度重子
メルヘンの夢が呼んでるちひろの絵
メルヘンへ誘う杏の里の春
豆の木に登りメルヘン夢広げ
封じ手は決して使わない夫婦
巣立つ子に嬉しく瘦せた腰がある
叱られることには馴れた口応え
恩人の見舞い予定をカットする
水やつて花の笑顔と対話する
さわやかな緑トンネル足まかせ
六甲おろしに酔う風船が飛ぶ夜空
大義なき戦に民の血が流れ

いずも川柳会

佐藤

清らかと言うのでしょうか片想い
水仙は黙って玄關守っている
矢印の通りに行くとか岩清水
気どらずに開く桜の花吹雪
淋しくて開けてしまった玉手箱

博子 満寿蔵 寿美子 都代子 玲子 実 重人 千津子 春 巴子 郁子 萬的 英子 庸佑 求芽 啓生 柳宏子 満寿巳 女 知香子 石舟 正坊 多喜 すみこ 章峰 寿美 多輝子

日記帳開くと軽い嘘がある

窓を開け尻尾の向きを考える

かみさんの威勢で聞く朝の市

背を向けた里に許したおぼろ月

おぼろ月見てならぬ物目をつむり

おぼろげな答は出さぬとうがらし

結局は何と話そうおぼろ雲

おぼろげな噂が春の風にのる

度忘れが続くおぼろな語り草

再会におぼろなものが火照りだす

四十年おぼろな愛につながれる

月おぼろ桜もおぼろ私も

世渡りの基本を知らぬ猿芝居

発声のイロハ基本がまだ出来ぬ

厚い壁イロハのイからやり直す

生きてゆく基本やんわり聞いた耳

一タス一基本通りに生きられぬ

生き方の基本仏間に置いてある

基本などもう忘れてる車間距離

正義 悪歴史に結果問うてみる

下積み耐えに結果の花開く

プラスマイナス結果はゼロになりました

結果論うやむやになる白い闇

先人に真似反故になる結果論

よたよたと歩めば結果が先を行く

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

せつかも悠久の美は胸に来る
交代の時期をにらんだ石ひとつ

桂子

美江子

紫見

スズコ

蘭水

満江

靖乃

房子

美佐子

玲子

昌枝

季子

きみえ

まこと

浜丘

久子

文子

テル子

叮紅

ちかし

義良

茂美

治代

多賀子

れいじ

保子
桂子

悪名を売ってイラクは血に染まる

荒城の月がイラクに影落す

三味線でシェンソンを弾く芸達者

むなしさに月の砂漠を口ずさむ

おおらかに恋詠み交わす万葉歌

安売りで買った自慢の花が咲く

寮歌祭蜜カラ美学魁り

鼻歌の風呂からもれる春の宵

方言で売る朝市をそぞろゆく

桜散り早半袖に衣替え

実印を逆さに捺して苦笑い

ことさらにお国言葉の朝の市

愛唱歌歌う悲しみ消えるまで

せつかに神の戒めコブ一つ

地球儀へ戦士の挽歌埋めてみる

せつかは案内人より先を行く

売れてますコマーシャルほど効くかな

衝動買い甘く煽ってノルマ上げ

せつちの父は上手に餅を焼く

着けばはや帰り支度をしてる母

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

夢一つ僕に下さい駄目ですか

ライバルに勝てるカードを温める

その瞳疑うことをまだ知らぬ

切り札を使わずじまい持ち腐れ

千羽目の鶴の祈りも駄目ですか

もみもみで過去の栄光露と消え

戦争は待って下さい駄目ですか

久子

黒兎

正三郎

敵子

蜚柳

見清

祥風

実

雪子

柳童

信男

昭子

セツ子

契子

ヤギエ

長一

禮子

勝

幹治

陽子

洋々

圭一郎

螢

大鯨

節子

金祥

はつ江

欠点を味方につけてあぐらかく

頂点に立てば寂しい風に遭い

背信の橋を渡つちや駄目ですか

やんわりと論す言葉を探し出す

奥の手のカード敵には見せられぬ

カードでは買えない愛を持てます

ひと言を添えたカードが温かい

隠してもびつたり当たる母の勘

ジョーカーに勝てるカードが破産した

クレジット弱い女が落ちて行く

借金担保に老妻は駄目ですか

気にするな老いの火遊びお茶までじゃ

花どろぼううちよつと失敬駄目ですか

つまずいて点と線との絆知る

年金と相談のうえ返事する

意思表示しつぽ振つても駄目ですか

駄目ですか酒に本音を漏らしては

担保ない融資の話駄目ですか

ワンマンの頂点すべり台がつく

点数が気に入らぬとは嘘ですよ

駄目ですかまだ独身を通して

老春期ちよつと火遊び癖がつく

春風にカードは遊び癖が胸深く

何時出そうレッドカードを胸深く

ローズ川柳会

山崎

君子報

無人駅蝶の華やお出迎え

飯の世の舞台千秋楽近し

逢いに行くドレスひととき蝶になる

朋恵

一京

一瑠

春鼓

昌鼓

茂登子

(澤)裕子

(山)節子

蟹郎

美恵子

忠良

志げ緒

益子

一粹

美雪

信子

無限

宗明

雅女

のり代

殺

はるみ

夢路

孝男

てる

キク子

みつ子

蝶ネクタイの團見も今年成人に
自分流まこと都合の良いきまり
バズル解く浮き世の謎もこのように
アメリカは何をしとるぞ世界の眼
座席券一枚破った片思ひ
古い殻脱こうショパンを聞きながら
空の青追いつ追われつ蝶の恋
春うらら昔の脚が欲しくなる
今生の別れだったか桜闇
別れとやまた素晴しい出会いあろ
散るさくら童女のごとく浴びて発つ

倉吉川柳会

竹信

照彦報

戦争で飲んだ涙と砂あらし
暴落に野菜と涙土に埋め
肺炎が攻める香港には行くな
人せめるまえにこころを開け放す
大根飯を食ったおしんの物語
青虫がおまけについた野菜賣う
高菜食う高倉健の頭の皺
定年離婚神もため息してござる
神棚で当り待ってる宝くじ
攻めに野菜はあるか米あるか
攻めたものの互めに痛みやつて来る
漬物になつて立派になつたなあ
少子化に菌止め下さい鬼子母神
飯盒の蓋でかわした樵酒
神様のような夫を尻に敷く
長生ができる玉露をのんでいる
お転婆が首たてに振るまで攻める

藍 哲子 貴代子 まさお 孝一 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 義子 雅子 康子 日出子 よしえ きみ子 かつみ 玲坊 石花菜 季芳 龍枝 賀寿恵 勝譽 芳光 重忠 幸子 睦子 螢子

一匹の蚊がささやいて攻めてくる
向き合えば人もビールも味が良い
コヒーに混ぜてあなた愚痴を飲む
朝市に女性と野菜しゃべり好き
貧乏神笑いの渦に近づけず
会費制払っただけは飲んでくる
名水を飲んで堪忍袋締め
不況風飲んでふくらむ鯉のぼり
神様と妻にさんげをして生きる
一振りのタクトで春を呼ぶ女神
神国と言われた昔知っている
いじめられこつそり飲んだマムシ酒
勝つ兵も負ける兵士も神頼み

川柳塔おとしり

原

みさを報

大きくて元気な傘について行く
元気だと言つてベッドの上の事
見栄すこし張つて元気のものにする
元気元気うっかりはまる落し穴
合掌の生命線がのびている
たしなみも虚栄も捨てて元気だけ
沈没するぞ元気のない日本
元気だせ地場産業も県人も
いつまでも金勘定し元気です
流行る服買えば元気が出る私
元気が出る葉毎晩飲んでる
一病をなだめ元気な古稀の坂
元気ならそれでいいんだ遠い人
相似形集めここから遺族席
母になり母と同じだと思ふ

和枝 十三男 萩江 芙蓉 祐輔 泰子 茶子 菊枝 忠良 登美枝 雄々 次男 照彦 せつ子 幸次郎 羅奈 彩子 登美 真一 彰雄 大鯨 紀子 黙光 孝弘 正人 水楊

ありのまま書けば許してくれますか
そつくりの影がわたしを叱咤する
不機嫌を母へそつくり子は返す
野仏の鼻そつくりの位置で欠け
そつくりの孫が私に注意する
台所並ぶお尻はうりふたつ
そつくりの母に私の明日を見る
そつくりの影武者はしい一人旅
連休に布袋を干して孫を待つ
傷心の癒える日待つ白椿
変りなしたただそれだけの便り待つ
おだやかなこれが平和という砂丘
失恋を埋めた砂にも春がくる
霧雨にかすむ砂丘も春の色
海の果て戦の臭い風に乘る

堺川柳会

河内

月子報

ふたつ割り大きい方を妻が食べ
変なこと変だと言えろ国に住み
不揃いがふたつ転んで丸くなる
ケセラセラ匙投げられて生きてます
年上なのに教えて貰う事はかり
危ないが君のためなら体当たり
図星やろ秘書が秘書と逃げて
ママになる話聞かない身でかん
何ひとつ不自由のない身でいけず
いけずなお相手しますお姑さま
きび団子二つあげたら何すの
とんでもない奴と判つた祭りの夜
ふるさとの羅漢の鼻ものつべらば

艶子 愛恵 和子 雄々 仁子 憧貴子 清子 征子 風花 義弘 ひかり 邦昭 庸二 道子 梓文 一輝 小雪 かりん 深雪 八千代 美代子 天三 龍笑 忠敬 哲平

乗る方へいつかはまわる馬の足
疲れない靴をいつでも一足買
ホームラン投手はあらぬ方を見る
あのケチだきつと小金を貯めてはる
なげていた生徒がいつも便りくれ
案するな君のあとがまたんとい
通り雨優い傘に招かれる
あの方のよいになりたく思っている
年上の妻肝つ玉座つて
図星だったな転職するという秘密
指吸いが止まぬ小さなお兄ちゃん
年上も年下もない良い仲間
身投げする前にトイレに行つてくる
姉二人先の私が見え隠れ
ユズリハのように散りたいものです
埃埃に着て行く服が高く付き
乗りやすい夫で苦労してる妻

五月 日 伽 俣 半 舞 鐘 百 朋 春 月 醉
月 雄 出 羅 子 錢 夢 造 山 惠 月 蘭 子 粹
也 五 時 伽 俣 半 舞 鐘 百 朋 春 月 醉
も つ 日 羅 子 錢 夢 造 山 惠 月 蘭 子 粹
さ 出 羅 子 錢 夢 造 山 惠 月 蘭 子 粹
くら 雄 出 羅 子 錢 夢 造 山 惠 月 蘭 子 粹

第22回夜市川柳募集

題	選	者	締切
①「菌」	新家久保	司子	6月末日
②「忍術」	古山本	和子	7月末日
③「雷」	酒井	希子	8月末日
④「教える」	森恒松	葉	9月末日
⑤「食」	運恒松	紅	10月末日
⑥「群れ」	読本奥山	智彦	11月末日
⑦「読」	読本奥山	晴生	12月末日
⑧「放浪」	天根大	津子	1月末日
⑨「天女」	小島	夢草	2月末日
⑩「放浪」	小島	柳	3月末日
⑪「天女」	小島	幸	4月末日
⑫「天女」	小島	幸	5月20日

第18回国民文化祭・やまがた2003

川柳 作品募集要項

一、応募受付期間 平成十五年四月一日(火)～六月三十日(日)(当日消印有効)

二、応募規定
作 品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)
応募料 一人につき一〇〇〇円(但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします)
応募方法 山形県実行委員会作成の「募集要項」をご覧の上、所定の応募用紙を使用し
て応募ください。

(4) 応募先 〒993-0011 山形県長井市館町北五十一

三、宿題・選者(事前投句) 一 第18回国民文化祭長井市実行委員会事務局「文芸祭」川柳係

ダムⅡ平井 吾風(千葉) ゲームⅡ大場 可公(福岡)

米 佐藤 岳俊(岩手) 民 謡Ⅱ竹森 雀舎(大阪)

ダムⅡ小松原 爽介(兵庫) ゲームⅡ波多野 五楽庵(青森) 米Ⅱ近藤 季男(愛知)

紅 第二次選者 小沢 綾子(東京) ゆとりⅡ早川 双鳥(山口) 山脈Ⅱ秋山 静舟(静岡)

吉岡 龍城(熊本) 今川 乱魚(千葉) 磯野いさむ(大阪)

塩見 草映(愛媛) 西来 みわ(東京)

四、賞(予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・山形県知事賞 第18回国民文化祭山形県実行委員会会長賞・山形県教育委員会教育長賞・長井市長賞・第18回国民文化祭長井市実行委員会会長賞・長井市教育委員会教育長賞・山形県川柳連盟賞

五、発表会場 川柳大会(入賞発表、表彰式、当日句、選評)
平成十五年十月十二日(日) 10時30分～15時30分 長井市民文化会館
合同大会(上位賞の表彰式、記念講演会)
平成十五年十月十三日(月) 10時00分～12時10分 上山市体育文化センター

六、問い合わせ先及び募集要項請求先
第18回国民文化祭山形県実行委員会事務局
〒990-0041 山形県山形市緑町一丁目九番三十号
TEL 〇三三-六二二八〇〇 FAX 〇三三-六三三二六三〇

七、主催者

文化庁・山形県・山形県教育委員会・長井市・長井市教育委員会・山形県川柳連盟・第18回国民文化祭山形県実行委員会・第18回国民文化祭長井市実行委員会

柳界展望

☆第3回春はくろほこ川柳大会は、4月6日鳥取県浜村ビューホテルで、114名の出席を得て開催された。当日の本社関係者秀吟は次のとおり。

あす知れぬ命ベツトと語り合う 鈴木 公弘

名残雪女の節度重ね合う

山本 玉恵

哀しみを閉じ込めている

竹の節 新家 完司

山が集まって水の話をして

いるな 土橋はるお

山あいの古里が好き人が

平成十五年春の叙勲で、川柳文化普及と向上に貢献された功績により、木杯一組台付授与の栄に浴された。

大野風柳柳都川柳社主幹叙勲

好き 前坂なお美

ふる里の山に進退問いに

ゆく 植田 一京

ハードルを下げて傘寿を

飛んでいる 野口 節子

折り鶴よ飛べ飛べ父の癌

つれて 両川 洋々

木になると頑張っている

草がある 牧野 芳光

▽人事動向△

○4月27日の統一地方選挙

で、山本三郎氏（理事）は

寝屋川市会議員7期目の当

選をした。

○川柳研究社（東京都）代

表の野谷竹路氏は、4月28

日逝去、81歳。本社から弔

電等で弔意を表した。

▽みちしお吟社設立△

口横浜あおば句会を母体と

して、故菱田満秋氏の遺志

を引継ぎ新吟社を四月から

発足。清水潮華会長（理事）

▽出版△

○ほたる川柳同好会（田辺

正三郎会長）は、創立10周

年記念に会員38名の合同句

文集「川柳はたる」を発刊。

B 6判122頁。序文は薫風

名誉主幹。

○森下愛論氏（東大阪市）

は、川柳句集「葉ずれ柳」

を発刊。印刷・装丁・編集

製本一切氏の手製。B 6判

136頁。

▽訂正とお詫び△

4月号P 24上段10行目、

会議室女が、会議室女

5月号P 25上段4行目、

紀ノ国屋・紀伊国屋 P 44

上段15行目、党主・党首

常任理事会P 5月6日、出

席18名 ①第9回まつりの

新同人紹介

永^{なが} 浜^{はま} 加津子^{かづこ}

薫風・みつ子・シマ子推薦

永^{なが} 原^{はら} 昌^{まさ} 鼓^こ

天笑・洋々・公弘・完司推薦

山^{やま} 下^{した} 節^{せつ} 子^こ

天笑・洋々・公弘・完司推薦

澤^{さわ} 裕^{ひろ} 子^こ

天笑・洋々・公弘・完司推薦

記念品、選者謝礼他決定 特別常任理事会P 6月6日

②川柳塔ホームページ作成 (金)13時クアウィーナ207号室

について ③特別常任理事 参与以上の方は参加して下

会案件 ④水府忌交換選者 さい。議題―アンケート集

⑤同人4名承認 ⑥その他 計 会計中間報告 その他

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半から 肝心・研究・起る・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	15日(日)午後1時半から ホステス・飲む・雑音・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から ページ・暴く・ろうそく 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から 誘う・炊飯器・もくもく・紋 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城 北 川 柳 会	21日(土)午後1時から 浮気・脱ぐ・セクシー・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸 和 田 川 柳 会	21日(土)午後1時半から 抜け穴・振じる・昇る・化ける	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 会 梨 花	21日(土)まで 淑女・紫・直・モネ・雑詠	投句先 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 坂田和歌子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	22日(日)午後1時から 過去・つらい・ヘルメット 「景色」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	23日(月)午後1時から 臓・戻る・現場	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	23日(月)午後8時から 机・嫁・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	25日(水)午後6時から 白票・火・ふい・米価	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から 床・飛ぶ・出張・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	28日(土)午後6時から スキャンダル・負ける 好き・雨	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ふうもん 吟 社	29日(日)午後1時から 眠・アンテナ・ちょっと待て	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	5 日(木)午後 1 時から 遊び・キャッチ・帽子	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	6 日(金)午後 1 時から 降る・遠い・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	7 日(土)午後 1 時から 影・表面・雑詠	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7 日(土)午後 1 時から 切手・大臣・防ぐ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	8 日(日)午後 1 時から 歩・湿る・境界・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	8 日(日)午後 1 時から 泡・コース・わからない・「夏」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	9 日(月)午後 1 時から 利く・込める・のぞく・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
川 柳 塔 唐津支部	9 日(月)午後 1 時半から あきらめ・古・まつわる	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川 柳 同 好 会	10 日(火)午後 1 時から 菌・かくす・それで	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10 日(火)午後 1 時半から 洗濯・捨てる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス49番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	12 日(木)午後 1 時から 汗(共選)・空 や・い・ず(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
打 吹 川 柳 会	14 日(土)午後 1 時から 正体・なかなか・塗る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川 柳 塔 ま つ え	14 日(土)午後 1 時半から 無口・音・雑草	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川 柳 塔 みちのく	14 日(土)午後 4 時から 呼ぶ・恵み・ぐっと	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵

編集後記

☆四月中旬、本号の表紙の絵を頂くため、希久子さんと二人で直原玉青画伯のお宅へ伺った。

☆これまででは、画伯のお弟子さんの元同人・岸本豊平次氏が、お稽古日に受取って下さり、勤務先である中島小児科（生々庵先生のご子息が院長）まで持参、それを私が貰いに行っていた。☆けれど、院長が亡くなり閉院され、昨年3月からは郵送をお願いした。その間、豊平次氏は色紙が傷まないよう、空箱や厚紙を利用して実に丁寧に包装して送っていたのだ。

☆ところが、豊平次氏が体調を崩され、お稽古に行けなくなったという連絡があり、玉青画伯を直接お訪ねすることになった次第である。

☆守口市の閑静な住宅地の画伯のお宅では、お稽古や来客に便利なよう、玄関を入ってすぐの大きな机に、泰然と座っておられた。

☆ご存知の通り画伯は、日本南画院の重鎮で「川柳塔」と題の昭和40年10月号以来、表紙を飾って下さっている。明治37年8月生れの数え百歳。平成9年の「路郎・葭乃・生々庵・葉四先生追悼川柳大会」に、水墨画の実演をされた時に比べ足と耳が弱られたため、ご子息のお嫁さんが甲斐甲斐しくお世話をしておられた。☆用向きを伝えようと気軽に筆を取って、6・7月号の表紙を仕上げられた。その間約20分。「流石」である。お茶やお菓子をよばれ、若い頃の外国旅行のお話を聴き、白寿記念に出版された立派な画集を頂戴し、握手してお宅を辞した。（ふ）

ひとこと

パソコン事始

息子にすすめられてパソコンを買ったのが一昨年夏、ワープロを使っていたからキーボードに抵抗はないので、ワードから始める。市主催のIT講習会を受講し、一応、基本はマスターしたので、プリンター、スキャナーなどもそろえて重い腰をあげたが、何しろ「八十の手習い」、頭では分かっているても手の方が動かない。

それでも孫のサポートで住所録を作り、息子や娘とメールを交換、デジカメで撮影し、パソコンに取り込むぐらいいはできるようになった。インターネットも時々、開くがホームページは目下、準備中。やりたいことはヤマほどあるが、「日暮れて道遠し」と、ため息をついている。私のEメール

shodon@oct.zaq.ne.jp
(田中 正坊)

○知人に俳句の関係者がいるので、俳誌を手にする機会が多い。先頃も『雪解』『馬酔木』『南風』を読んだ。三誌ともにカラフルな現代絵画の表紙。『南風』は100頁弱『雪解』『馬酔木』とも1500頁。

主宰の選後の批評は、門外漢の私にも勉強になった。○編集に関わるようになって一冊の本が読者の手元に届くまでに、たくさんの方々の手を辿っていることを教えられた。

○ざっと目を通してどの俳誌にも共通しているのは書き手が多いということ。作品鑑賞、作家研究、随筆、評論、批評と読み応えがある。また先達の秀句紹介や信している。

○同人特集「雨百句」のためにバックナンバーをひもといた。亡くなられた同人の方々の作品に久々に接し、紫陽花の雨に面影を偲ぶ。○6月22日はあじさい忌。川柳塔のお母さんと暮わられた小出智子先生が亡くなられて6年。「上手い句より佳い句を」とご指導下さった智子先生の教えを改めて噛みしめたい。「身の上がどこか似ている一夜十二」 智子（朱）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（8月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

川柳塔 (8句) 河内 天笑 選
水煙抄 (8句) 奥田 みつ子 選
愛染帖 (3句) 波多野 五楽庵 選
茴香の花 (3句) 政岡 日枝子 選
課題吟 (3句) 「鱗」 上田 宣子 選
「耳」 田中 みね 選
「このころ」 西村 哲夫 選
初歩教室 「氣」 (3句) 三宅 保州 担当

8月号発表 (6月15日締切)

9月号

課題吟 「つ い」 「驚 く」
「翼」
初歩教室 「月」

本社 6 月 句 会

と き 6月6日 (金) 午後5時半・6時半締切
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
兼題 「好 き」 川端 一步 選
「譲 る」 神夏磯 典子 選
「とことん」 安藤 寿美子 選
「戻 る」 西出 楓 選
「痒 い」 河内 天笑 選
席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

路郎忌 本社 7 月 句 会 7 月 7 日 (月)

兼題 「エブロン」 「捨てる」 「いよいよ」
「洗 う」 「いのち」

第22年度 夜市川柳募集

第1回「菌」 新家 完司 選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集 (課題吟) への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所 (県・市名) を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇三年 (平成十五年) 六月一日発行

編集兼 発行人 河内 権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪府阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1436

振替 〇〇九八〇一五 一三三三八番

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

<http://www.yukawa.or.jp>

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分

紀州梅干



おいしさ、田舎づくり
Sankō 三幸農園

〒640-8412 和歌山市狐島508

TEL 073-455-8899 FAX 073-455-8773

地方発送承ります。

商品パンフレット差し上げます。

ご注文は ☎0120-04-8899

●インターネットでも、ご覧頂けます。

<http://www.naxnet.or.jp/~sanko>